# 夢の言葉　言葉の夢

星野廉

# 目次

◆第一部　多義性、動詞、レトリック

「あなた」と唱えるとき、あなたはふたりいる
＊ . . . . . 5

「短い」と「長い」と「厚い」と「熱い」が同時に起こっている
＊ . . . . . 11

「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれません。
＊ . . . . . 17

映る、写る、移る
＊ . . . . . 23

影に先立つ【引用の織物】
＊ . . . . . 37

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる
＊ . . . . . 55

レトリックだけでなりたっているような文章
＊ . . . . . 63

◆第二部　大和言葉（和語）、言葉のなかの言葉、自分語

うつせみのたわごと-1-（全 14 回）
＊ . . . . . 85

うつせみのたわごと-2-
＊ . . . . . 89

うつせみのたわごと-3-
＊ . . . . . 93

うつせみのたわごと-4-
＊ . . . . . 99

◆第三部　十の「げん」、言葉に言葉を当てる

げん・幻（うつせみのたわごと-5-）
＊ . . . . . 107

げん・言（うつせみのたわごと-6-）
＊ . . . . . 113

2 人のゲンちゃん
＊ . . . . . 121

げん・現（うつせみのたわごと-7-）
＊ . . . . . 127

3 人のゲンちゃん
＊ . . . . . 137

げん・限（うつせみのたわごと-8-）
＊ . . . . . 143

げん・原（うつせみのたわごと-9-）
＊ . . . . . 153

げん・Gen（うつせみのたわごと-10-）
＊ . . . . . 161

げん・眼（うつせみのたわごと-11-）
＊ . . . . . 175

げん・弦（うつせみのたわごと-12-）
＊ . . . . . 189

げん・減（うつせみのたわごと-13-）
＊ . . . . . 201

げん・絃（うつせみのたわごと-14-）（全 14 回）
＊ . . . . . 217

◆第四部　「言葉ではないもの（人にはとらえられないもの）」に言葉を当てる

「何か」に「何か」を当ててみる
＊ . . . . . 233

「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」
＊ . . . . . 245

人にあらわれて、機械にあらわれないもの
＊ . . . . . 253

言葉ではないものをさぐる
＊ . . . . . 263

# ◆第一部　多義性、動詞、レトリック

「あなた」と唱えるとき、あなたはふたりいる

あなた」と名乗ることで、あなたはあなた天使

＊

目次

**あなた、彼方、貴方**
**二重写し**
**鏡のあなたに**

**あなた、彼方、貴方**

　自分のことを「僕」となかなか言えない子どもでした。大人になってからも自分を一人称で言わない癖が続いていて、老人である現在もそうです。

　たったいま気づいたのですが、日常会話で二人称をつかうのにもためらいがあります。「〇〇さんのその素敵なマイバッグ、どこで手に入れたのですか？」というように、相手の名前を出します。こうした傾向は以前からあるのか、最近始まったことなのか分かりません。

「あなた」と「きみ」ではどちらを使いますか？

　いまためらいがあって、

あなたは、「あなた」と「きみ」ではどちらを使いますか？

とは書きませんでした。でも、通じますね。

　人称代名詞を省いても何とか話が通じます。状況で分かるのかもしれませんが、こんな芸当ができる日本語に感心します。古文での主語の省略を思い出します。あれは主語がないのではなく隠れていて、それを補って読むのでしたっけ？　古文は苦手でいまだに読めません。

ここまでの文章でも「私」を省いていますが、こういう文体が好きです。この先も省こうかと思っています。

**二重写し**

個人的には「あなた」という人称代名詞が好きで、「きみ」はまずつかいません。つかう相手がいないというべきなのかもしれません。親しい人がいないという意味です。「おまえ」はつかった記憶がありません。つかいたくもつかわれたくもない言葉です。

あなた（かなた）・彼方・貴方（貴男・貴女）。

こんなふうに書けますね。どういうことなのでしょう。簡単に説明すると次のようになります。

「向こう」とか「遠く離れて」の「あなた・かなた・彼方」から転じて（要するに間違えたり、ずれたりして）、「（向こうという意味の）あっち」とか「（向こうにいる）あのかた」となり、いろいろすったもんだありまして、とにかく「you」の意味の「あなた・貴方（貴男・貴女）」が生まれたらしい。

今回の記事でいちばん言いたことは、「あなた」という言葉に、「遠く離れた愛しいあなた」という意味が込められていることです。

「遠く離れて」と「あなた（貴方）」が二重写しになっているわけです。二つの意味が重なっているのですから、よく考えると不思議でなりません。

あなたと口にするとき、あなたを想うとき、あなたは二人います。かなたにいるあなた、たとえそばにいても自分のものには決してならないあなた、つまり外にいて「外」であるあなた。そして、もう一人のあなたは、自分の中にいるあなた。

両者のあなたはあなたと呼ばれるという一点だけでつながる存在であって、別々のものなのです。その隔たりは解消できません。その二重写しを、あなたという言葉は具現しているように思えます。

**鏡のあなたに**

ここからは、「きみ」や「おまえ」は忘れてください。

あなたが誰かを「あなた」と呼ぶとします。すると、相手もあなたを「あなた」と呼びます。

自分の外にいて（遠くにいたり近くにいたりします）、自分のものにはならない「外」である存在。それでいて、「あなた」と口にすることで、「あ・な・た」と舌で転がすことができ、「あなた」と唱えて想うことで、自分の中で思いうかべたり思いえがいたり思いおこすことができる存在。

それが「あなた」です。

物理的にも心理的にも隔たっていながら、思うことで「自分」の中にいると感じることができる存在。

それが「あなた」です。

遠いと近いが同時に起こっている。外と中が同じ場としてある。なにしろ、あなたは動いていないのです。それでいて、あなたは移っているのです。時と場が二重に写っている、映っている、移っている。

地面や水面やスクリーンに姿が映る。影が映る。写真に姿が写る。影が写る。

動いていないのに移っている。うつっている。

「うつる」は魔法の言葉です。

写る、映る。

あなたが「あなた」と呼ぶ相手と、あなたを「あなた」と呼ぶ相手が、「あなた」という言葉で（に）写り、映るのです。鏡みたいではないですか。いや、これは鏡なのです。

鏡と呼ばずして何と呼べばいいのでしょう。

　あなたがふたりいるのです。こっちとあっちに。内と外に。珍しく言葉の世界と現実の世界と思いの世界が重なるような気がします。

　写り、映る、だけでなく、鏡の向こうに移りたいとは思いませんか。かなた、向こうにいる、愛おしいあなたを自分のものにしたくはありませんか。

　移る。

　いまは愛の話をしています。恋愛だけではなく、友情でも、家族愛でも、相手はアイドルでも、キャラクターでも、人形でも、ペットでも、神でも、亡き人でもかまいません。

　愛は「移る」を願う大胆で貪欲な行為なようです。

　できれば、移りたい。向こうに行くだけでなく、あなたに移りたい。あなたも、こっちに移ってきて欲しい。わたしの中にあなたが欲しい。あなたの中のわたしになりたい。

　鏡のあなたに、彼方に、貴方に、うつりたい、写りたい、映りたい、移りたい。うつる代償として、わたしを捨ててもいい、わたしはなくてもいなくてもかまわない。

「短い」と「長い」と「厚い」と「熱い」が同時に
起こっている

虚、」と「長、」と「厚、」と「無、」が同時に起こっている

＊

「短い」と「長い」が同時に起こっている――。
「短い」と「長い」があっけらかんとそこに同居している――。
（拙文「「短い」と「長い」が同時に起こっている」より）

私は俳句については無知なのですが、読むことはあります。そんな私が俳句は短いけど長いと感じることがあります。俳句には短いと長いが同時に起きているのでないか、とさえ感じることが頻繁にあるのです。

たとえば、俳句の解説を読む場合です。有名な俳句の解説はそこそこ長いです。五七五の文字を対象に、いろいろなことが書かれています。私は俳句についてはほとんど知らないので、すごいなあと思いながら読みます。

超有名な俳句だと、たくさんの人がいろいろなことを書いているようで、たぶん読み切れないでしょう。十七文字に対して、無数の文字が書かれているみたいなのです。

こういう状況を目の当たりにすると、私はビビります。頭をかかえます。その当惑を短く言うと、短いけど長い、です。

＊

また新聞や雑誌に載っている俳句のコンテストを見ていると、入選した俳句について選者の方々がさまざまな言葉を添えていらっしゃるのですが、それを読んで該当の俳句を読みなおすと、なるほどと頷いたり、へえーっと感心したり、えっと戸惑ったりすることがよくあります。

多様な解釈という言葉で片づけることもできそうですが、そんなときには、俳句というジャンルの背後にある伝統、蓄積、集団の厚みと大きさと広さを感じて圧倒されるの

です。ひとりが詠んだ十七文字の背後に、あるいはその根底に存在するであろう、複数どころか無数の声たちと文字たちと「作品」たちが勝手に想像されて、体が熱くなるほどです。

定型詩であるからだと思います。定型（制約）があるという意味はきわめて大きいです。定型であることを除いたら何が残るだろうと思うほどです。しかも自分で勝手に自分に課す制約ではありません。自分の外にある確固とした制約なのです。とりわけ季語は学ばなければなりません。自分の外にあるものを参照し、その使い方を真似るのです。

俳句は短くて小さいのに、長くて大きいだけでなく、厚いし熱いのです。私の好きな言い方をすると、「短い」と「小さい」と「長い」と「大きい」と「厚い」と「熱い」が、あっけらかんと十七文字の中で同時に起こっているのです。こんなジャンルは他にあるとは考えられません。

十七文字という世界が十七文字で完結しているはずがないのです。言葉に言葉を重ねる、言葉に言葉を足す、言葉に言葉を積む、言葉に言葉を投げる、言葉に言葉をこだまさせる。そんな身振りが、俳句には感じられてなりません。俳句が短いだなんて冗談であり（事実誤認ではないかと言いたくなります）、単なるレトリックにすぎない（これもレトリックには違いありませんが）のではないかと思うほどです。

＊

たったいま、自分の覚えているある俳句を口にしてみました。

ゆっくりと三回、声にしてみたのですが、五七五を唱えてながら、じつに短いあいだなのに、複数どころか無数の声たちが響くのを感じました。

「声」たちがこだまするのですが、俳句に無知な私に既存の俳句がつぎつぎと思いだされるわけがありません。俳句というジャンルを離れて、私の中にある個人的な言葉の記憶の断片が押しよせてきたのです。

「読み」と「詠み」がどこかでつながっている。それは「黄泉」や「闇」にまでつながっているのではないか。

これまで話され発せられ放れた言葉がたちがどこかに集まっていて、そこから響いてくるこだまを、各人がその時その時に受けとり耳にし、口から吐くのではないか。

こだま、谺、木魂、木霊。音（たぶん文字も）は息（生き、行き、往き、逝き）のような魂なのかもしれません。読みと詠みと黄泉と闇が通底し、こだましている。それが言葉と、言葉からなる作品の世界のありようだという気がします。言葉はたったひとりで口にしたり文字にしているのではないのです。

いま述べたことは、どんなジャンルの文学作品にも言える気がしますが、とりわけ俳句においては、十七という音の持続と文字の空間に他者＝多者がいる気配が濃厚なのです。

俳句は一句で完結もしていなければ、一句で成立もしていない。部外者である素人の目からですが、そんなふうに見えます。とてつもなく長いのです。定型詩が短いはずがありません。定型という縛りは単なる鎖ではありません。えんえんと前にも後ろにも続く連鎖なのです。

「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのか
もしれません。

気づく」は「迎える」と同時に起こっているのかもしれません。

＊

影に気づくのはいつも遅れる。影に気づいても影は見えない。
人に先立ち消える影。影に先立ち消える人。
そのとき謎が残ったとしても、もうなぞる人はいない。
（拙文「先立つ」より）

日差しの強い日に、山の陰になった場所を目指して歩くのが好きです。くっきりと山の影が見えます。先端の鋭角や全体の丸みを帯びた形が、濃く地面に映しだされています。

そのまま、陰の中に入っていきます。陰は入るもの、影は見るもの。入った瞬間に、そんな思いがします。もっとも、これは後付けです。いま、家の居間で回想しているから、そんな言葉が浮かぶのです。

描写は創作だと気づきます。写生や再現ではありえないのです。言葉の世界に入っての、言葉の論理に従ってのいとなみだと痛感します。いま私が相手にしているのは言葉なのです。当り前のことですけど。

陰に入り、そのまま奥へと進んでいきます。足元に目をやると、さっきまでの濃い影は姿を消し、薄い影がついてくるのが見えます。これも影です。私の影。いつもいてくれる愛おしい存在です。

空を仰ぐと、太陽は見えません。光をはらんだ薄い青が冷たく広がり、その下には黒い山の影があります。一種の間接照明なのでしょうか、あたりの影はいかにも頼りなげに見えます。

木や建物の陰、屋内も、こんな感じなのでしょうか。光はあちこちから差してきます。光はあちこちにあり、うつり、まとわりつき、はなれ、とび、ゆれているかのようです。光は静ではなく動なのです。

＊

陰に入り、陰の中であたりを見まわすと、影の薄い分だけ濃淡の階層が綾としてはっきり目に映るような感じがします。いたるところにかげがあるのです。影も陰も姿も像も反射も、すべてがかげと呼ばれていることに気づきます。

そのさまを見ていると、かげがさす、かげるという言葉が浮かんできて、その比喩的な意味が、意味というよりもそこに立ちあらわれた形として、こちらにうつってきます。心と体にさしかかり、かげるのです。

どのかげも、光と闇の織りなす濃淡の階層であることにも気づきます。光と闇を分けることの無理にも気づきます。いまになって気づくとは。かげに遅れている自分がいます。気づいても、また忘れるのでしょう。

世界がいかに気づくもの、気づくべきもの、気づいてもいいものに満ちているかに気づきます。「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれません。遅れつづけるのです。決して追いつけません。その意味で「気づく」はありえない夢だという気がします。気づけないという意味です。

＊

” 谷には二つの池があった。
下の池は銀を溶とかして湛たたえたように光っているのに、上の池はひっそり山影を沈めて死のような緑が深い。”
（川端康成作「骨こつ拾い」（『掌てのひらの小説』所収）より引用）

野辺での送りの場面です。この川端の掌編では、光と闇、光と影、日向と日陰、表と裏、そして陰陽が美しく、また哀しく描かれていて、とても好きです。描写が多義的なのです。いや、私には多義的に見えるのです。何度も読みかえしています。

＊

「遅れる」は「おくる」に近いらしいと最近知りました。遅れる、後れる、送る、贈るです。

先立つ相手を敬い、先に行かせる（逝かせる）つまり送ることで、自分が遅れる（後れる）感じでしょうか。送るには葬送の意味もあります。

なるほど。分けても仕方ないのに分けようとしている自分に気づきます。

いずれにせよ、気づくものに、人は必ず遅れているようです。

その最たるものが、言葉ではないでしょうか。言葉が言葉であることを忘れるという意味です。言葉は私たちの後から来ながら、つねに先にあるものです。外にある外なのです。

よく考えれば当り前のことなのです。当り前だから気づけるのであり、当り前だから忘れるのです。目の前にあるから、先に行くから、気づかないものでもあります。つまり、後れる、遅れる。影のように。

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。先立つは前に立つや先に起こると、先に亡くなるの両義があります。

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうがずっと大切に思えます。目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

私には世界も言葉も多義的に見えるように思えてなりません（思われるだけです）。まるで顔のように、です。

もしそう見えるのであれば、かなたや裏やどこかに目を向けるよりも、ひたすら目の前をながめるしかない気がします。違ったものや新しいものや知らないものを見たいのではありません。たぶん、言や事や物が重なりあっているさまに気づき、できれば目にしたいだけなのです。

気づく」は「迎える」と同時に起こってくるのかもしれません。

ことのはに　さきだつひとを　おくるかげ

映る、写る、移る

＊

このところ、「映る、写る、移る」とか「映す、写す、移す」と何度も記事に書いてきたためか、何を見てもそう思えてくるという状態が常態化してきて困っています。

ここでいったん頭の中の整理をしようと思います。以下は、直近の記事からの引用です。ずっと気になっているところだけを取りあげてあります。

目次

**表情と身振りは生まれたての赤ちゃんの中にも入ってくる**
**相手の動きに合わせて、心や頭の中で、あるいは実際に動く**
**身振りや仕草がからだに訴えてくる**
**映る、写る、移る**
**明滅、ＯＮとＯＦＦ、吸うと吐く、あうん**
**映っている表情や動きが、自分の中で転写されて、「何か」が移ってくる**
**動詞は動きをうながす、名詞は固定を指向する**
**動詞的なもの、名詞的なもの**

**表情と身振りは生まれたての赤ちゃんの中にも入ってくる**

表情や身振りは視覚言語（手話も含まれます）と呼ばれることがありますが、おもに見て受けとります。

話し言葉と書き言葉との決定的な違いは、表情と身振りは生まれたての赤ちゃんの中にも入ってくるという点です。すごすぎます。不思議ですね。考えるとわくわくどきどきします。

赤ちゃんを見ていると意味と無意味について考えずにはいられません。赤ちゃんの表情や仕草や声が信号に感じられるからです。信号というのは、前提として意味やメッセージを想定しているわけです。つまり、はらはらどきどきです。

しかも点滅してあおることもあります。この泣き声はおむつを替えてほしいのか、お乳がほしいのか、どこかが痒いのか、痛いのか、暑いのか、それとも熱いのか？
こんなふうに解読ごっこになります。

初めてのお子さんだと心配でしょうね、不安でしょうね。解読地獄におちいる場合もありそうです。

でも、赤ちゃんとお母さん、お父さん、その家族の人たちの様子を見ていると、赤ちゃんの発するあらゆる信号をつねに正しく受けようとしているわけではないのに気づきます。

受け流しているように見える場合がよくあります。ほほ笑みにほほ笑み返す、ほほ笑みにしかめっ面をしてみせる、ほほ笑みをただ眺めている。泣いても知らん顔。

それだけでいい。そこにいて笑みを浮かべているだけでいい。そこで泣いているだけでいい。そこにいるだけでいい。

信号は解読すべきものではなく、ただそこに「いる」という、おおらかでおおまかな印として、そこに「ある」かのように見えます。

ただ「いる」という信号として、ただ「ある」だけ。

意味はそこにあるというより、人の中にあるのでしょう。世界が意味だらけなのではなく、人の中が意味だらけなのでしょう。人は自分の中でたちさわぐ「意味の立ちあらわれ」を静める術を心得ているようです。

（拙文「意味が立ちあらわれるとき」より）

**相手の動きに合わせて、心や頭の中で、あるいは実際に動く**

意味と無意味のはざまにいることも可能だという意味で、表情や身振りにはダイレクトに人に「何か」を感じさせる力があると言えそうです。

ダイレクトというのは、いわば無媒介的に表情が表情を、身振りが身振りを誘発する、つまり受け手が相手の表情と身振りを模倣する（「なぞる」）という意味です。

相手の動き（表情も動きです）に合わせて、こちらも心や頭の中で――あるいはじっさいに――動くと言えば、お分かりいただけるでしょうか。

身体的レベルでの「うつる」と「伝わる」が起きるのです。必ずしも「通じる」わけではありません。なぞってうつるのです。「何か」が伝わることは確かでしょう。この伝わり方をプリミティブと言う人もいそうです。

その伝わる「何か」は各人の中で起きていることですから確認できません。確認するためには、やはり言葉にして報告するとか説明するしかなさそうです。

身も蓋もない言い方になりましたが、じっさいにはそんなことはありません。みなさんの中で起きていることです。ご自分の日々の体験を振りかえってみてください。

というか、いまも、その「何か」があなたの中で起きているのです。

（拙文「中に入ってきたときに、中で起きること」より）

**身振りや仕草がからだに訴えてくる**

音としての言葉と、文字としての言葉に加えて、ぞくっとくるものを感じませんか？
皮膚に来るような感じとか、触覚的なイメージと言いましょうか、頭ではなく身体にくるような、からだに訴えてくるような感覚のことです。

文章を読んで覚えるむずむず感については、ロラン・バルトが、Le Plaisir du texte（1973）で似たようなことを書いていた記憶があります。

＊

言葉を見たり、読んだり、聞いたりしていて起こる、うつす、なぞる、なする、さする、こする、ぬる、なでる。

言葉では、こうした感覚がとても大切であり、誰もが日常生活で感じているはずであるのに、ないがしろにされている気がしてなりません（文学作品の鑑賞でも、この感覚が重要な役割を果たすのに、です）。

ないがしろにされているとすれば、なぜなのでしょう？　たぶん、恥ずかしいからではないでしょうか。人には隠しておきたい感覚があるような気がします。あまり口で言ったり、文字で書いたりするものではないのでしょう。

それは外では確認できない「何か」なのです。各人の中にあって、他人に通じないかもしれない「何か」なのです。きわめて個人的なもの、あなただけのものなのです。

荒唐無稽であったり、いやらしかったり、ときには背徳的で残酷であったりする。あえて、ひとさまに披露するべきものではない。それが「個人的なもの」ではないでしょうか。

それはきっと寝入るときや、トイレでぼーっとしているときに、あなたのところにやって来ます。そして、おそらく死ぬ間際にもやってきて、たったひとりでいて、たったひとりで逝くあなたをなぐさめてくれるかもしれません。

＊

うつす、なぞる、なする、さする、こする、ぬる、なでる——。持論なのですが、こうした身振りや仕草がからだに訴えてくるのは、口（舌、唇、口蓋、歯、歯茎、声帯）と指（指の先、指の腹、指の関節、指紋、爪、汗腺、痛点、皺、襞、てのひら）が深くかかわっている気がします。

話し言葉は口の動きと表情から発せられる波（振動）であり、書き言葉は手と指をもちいて書き、掻き、描くものであり、いまでは入力し、指でスライドしたりスクロールして読み書きするものであることを思いだしましょう。

もちろん、受け手である、濡れた眼（瞳、虹彩、睫、目蓋）、そして小刻みに震える耳（耳たぶ、産毛、中耳、内耳、鼓膜、耳小骨、耳管、蝸牛）を忘れることはできません。いやらしく見えたり聞こえたら、ごめんなさい。でも、そういうことなのです。

いずれにせよ、言葉を入れたり出したりする部分が、ひときわ繊細で精巧にできていることに驚かないではいられません。私がとくに感心するのは手と指です。手が意思表示や治癒に用いられることもあるのに注目してのことです。手というものが不思議でなりません。

いちばん気がかりなのは、耳や口や目と違って、手と指が自分の目で見えることです。自分から出てきて自分の目で見える文字（音声や表情や身振りは見えません）と似ています。

（拙文「「うつる」でも「映る」でもなく「写る」」より）

**映る、写る、移る**

ものすごく簡単に言うと、向こうが顔をしかめていれば、こちらもしかめる。向こうで走っていれば、こちらも走る。表情や動作をじっさいに、あるいは頭の中で浮かべてなぞるわけです。

それが見るであり、聞くであり、読むという行為と言えるでしょう。見たもの、聞いたもの、読んだものを、いったん信じないことにはーー「信じる」は「なぞる」ですーー、見えないし、聞けないし、読めないのです。実際には「ないもの」を見て聞いて読んでいるのですから、変な精神状態にあると言えるでしょう。

いましているのは、絵、映画、映像、動画、演劇、物語、小説の話です。虚構というも

のは「ない」を「ある」と一時的に信じ（つまり、思い描くことでなぞり）、しかもそれを自分自身も心の中で表情や動作として演じるわけですから、確かに変なことをしていると言えます。

要するに、映る、写る、移るです。

転写された相手が自分の中に入ってくるという感じ。それは鏡を見るときに起きることでもあります。便宜上、「相手」と「自分」という言葉を使いましたが、鏡における両者のさかいは曖昧だという気がします。どちらが主でどちらが従か、どちらが先でどちらが後か、どちらが実でどちらが虚か、こうしたさかいも意味をなくしているのです。

うつっているからです。うつるは相互的、双方向的なものではないでしょうか。鏡の話です。虚構の話です。見るのは人なのです。人あっての鏡であることを思い出しましょう。

（拙文「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」より）

**明滅、ＯＮとＯＦＦ、吸うと吐く、あうん**

患者に異状が起きれば、その器械が察知して音を鳴らすか、非常用のランプ（※おそらく赤でしょう）を点滅させるか、電波を通じて然るべき別の器械に伝えるであろう仕組み。

それらは、すべてが信号なのです。

信号とは生きている、あるいは息絶えようとしている「しるし」。蛍の光のように明滅している。

明滅、ＯＮとＯＦＦ、吸うと吐く、あうん。

明滅するのは知らせ伝えるためなのでしょう。何を知らせるのかは、信号には分からない。

送るものと受け取るもののあいだで生きる明滅。ツーツー、ピーポーピーポー、１と０、〇とＸ、開けると閉じる、目くばせ、まなざし、表情、顔。

明滅を繰り返すことで信号が何かを訴えている。その意味では息をしているし、その意味では生き物なのかもしれない。そんなことを、いまになってとりとめもなく考えています。

（拙文「病室の蛍」より）

※生き物にたとえてはいますが、ここで言う「信号」とは、人が意味やメッセージを込めて作ったものであり、いわば自然発生的に出てきたと考えられる「言葉」とは異なることを忘れてはならないと思います。

**映っている表情や動きが、自分の中で転写されて、「何か」が移ってくる**

アート・ガーファンクルの歌い方を見ていると、つくづく口は楽器だと思います。上下の唇、舌、口蓋、歯に注目し観察しながら、ぜひ動画を見てみてください。いちばんいいのは、口の動きを真似ながら歌うことです。自分が口になったような気分が味わえますよ。

映る、写る、移る、です。つまり、画面に映っている表情や動きが、自分の中で転写されて、「何か」が移ってくるのです。表情と動きは、話し言葉（音声）や書き言葉（文字）と同じく言葉だと言えます。

唇、舌、口蓋、歯の動きや位置を意識して真似るのです。何だかエロいことをしているような感覚になればしめたものです。そうなのです。口は性器でもあるのです。変なことを言ってごめんなさい。でも、冗談ではないのです。

ジークムント・フロイトとかジャック・ラカンとか精神分析学とかジル・ドゥルーズについての本を斜め読みすると（つねに意識散漫で集中力のない私には精読は無理です）、人が性器だけで性行為をするものでもないことや、性と生が密接に結びついていることや、全身が性感帯であり生感帯であることが分かるし、生まれたばかりの赤ん坊が唇や舌で世界を感知し触れ合う行為の深い意味について学べるでしょう。

簡単な例を挙げます。赤ちゃんのおしゃぶり、赤ちゃんをふくむ老若男女の唇に触れる癖、思わず唇を噛む仕草、無意識あるいは意識的に唇を舐める仕草、広告写真における唇の氾濫、軽く口を開けている人間の無防備な魅力、歯医者で欲情するという告白、女性の口紅、男女を問わず存在する喫煙という風習、特に男性に見られるパイプへの偏愛.....。こう列挙すると何かいやらしくないですか？

上述の小難しいそうな固有名詞を出さなくても、意識的にゆっくり言葉を音として発することで、ぞくぞくわくわくどきどきを楽しむことができるし、たとえばその行為によって発汗や赤面や動悸や息切れをはじめとする生理現象が起こることを確認できるのです。

（拙文「Ｌに魅せられた作家」より）

**動詞は動きをうながす、名詞は固定を指向する**

触れる、振る、揺らす。

とっかかりのない私は、こんなふうに言葉を並べて言葉に来てもらいます。名詞でもいいのですが、最近は動詞ばかりに遊んでもらっています。そうなのです。私は言葉に遊んでもらうのです。これはレトリックではありません。実感なのです。

動詞は文字通り動きを指す言葉ですから、動きをうながしてくれます。たとえば、「祭り・まつり」という名詞だと動きへとうつれません。まして「おまつり」というと「お」を付けただけで、名詞感がいや増し、私なんかはかえって言葉が出なくなってしまいます。

動詞は、「映る、写る、移る」なのです。動きですから、目というスクリーンに映り、それが顔をふくむ身体における動きや表情（表情は動きです）として写り、「何か」が移るのです。

（※「何か」は「模倣あるいは反復および変奏されたもの」であることは確かでしょう。いわゆる「意味」かもしれないし、いわゆる「メッセージ」なのかもしれません。ただ、動きとして視覚的に確認できないために、とりあえず「何か」としておきます。）

話をもどしますが、「まつり」（名詞）を「まつる」（動詞）とすると、私はとたんに動きを感じます。

まつる、たてまつる、あがめたてまつる。まつ、待つ、まつわ、いつまでもまつわ、俟つ、まかせる、まける、たのむ――。こんな具合にです。

論理や体系など無視した一種の連想ゲームなのですが、それに行きづまると、辞書に助けてもらいます。

纏る、奉る、献る、祭る、祀る。

並んだ言葉たちに見入ってしまいます。わくわくぞくぞくそわそわします。

（拙文「触れる、振る、揺らす」より）

**動詞的なもの、名詞的なもの**

こうやって引用箇所を集めてながめていると、「映る、写る、移る」と「映す、写す、移す」においては、動きとか波（振動）が大きな役割を演じている気がします。

「動き」は自然の状態であり常態であると思います。とはいえ、人は「動き」を見たり知覚したとしても、それを言葉にする以外に他の人と「動き」について語りあうことはできません。言葉という形で外に出さない限り、他人といっしょに確認できないからです。自分の中で思うだけという意味です。

そうであるなら、「動詞」について考えればいいのではないか、と短絡したくなります。というか、このさい短絡しましょう。ついでに「名詞」を出しましょう。

では、仕切り直します。

＊

「動詞」は自然の状態であり常態であると思います。「名詞」に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は「動詞的なもの」に満ちている気がします。

「動詞」も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、「動詞」の向いている方向は、「名詞」の抽象性とは異なる気がします。

比喩的に言うと具体的な動きを誘いだす「動詞」はすとんと腑に落ちます。繰りかえし的な言い方になりますが、「動詞」が動きを指向するからでしょう。

＊

「動き」がすとんと腑に落ちるというのは、話し言葉や書き言葉を知らない（学んでいない）赤ちゃんが、表情や動きに注目して、それを目でなぞり、おそらく自分の中でなぞったり、あるいはじっさいにその動きを真似て演じることを思いだすと分かりやすいかもしれません。

こんな場合も分かりやすいと思うのですが、よく日常生活で言葉に詰まることがありますね。私なんか歳を取ってきたせいか、頻繁にそういう状態におちいります。そんなふうに言葉が出ないときには、何かを伝えるべき相手に、おもに手や指や腕を使った仕草や、表情（一種の顔芸です）や、ずばりそのものを指すことがあります。

身振り言語とかジェスチャーとか言われるものでしょう。これをやっていると、なぜかとても気持ちがいいのです。動作や仕草と同時に、「あれ（が・を）」とか「これ（は・に）」とか「こんなふうに」なんてよく口にしますが、こういう代名詞は言葉だと言えそうもありません。

なんだか自分の恥をさらしているようなのですけど、話し言葉なんかよりも、ずっと楽なのです。また、相手もそういう感じで応えてくれると、その身振りや表情を見て、すっと腑に落ちるのです。もちろん、通じないことも多々ありますけど.....。通じないのは、話し言葉や書き言葉でも同じだと思います。

（中途難聴者である私は聞こえもかなり悪くなってきているので、手話を勉強しているところです。生きていくために必要だからです。文字つまり筆談だけでは「腑に落ちない」（ぴんと来ない）ことがあると最近感じているからでもあります。うまく言えませんが、仕草や身振りのほうがずっと楽なのです。）

＊

一方の、「名詞」は「頭で理解する」（比喩です）感じで、不自然なのです。動きよりも固定を指向するからではないでしょうか。自然界には固定を指向をするものは存在しない気がします。いわゆる万物流転です。固定は抽象（ここではヒトの頭の中にしかないものという意味です、というか抽象とはきわめて人間的なものなのです）ではないでしょうか。

あらゆるものが、動いているのです。ただその動きがヒトの知覚機能を超えている場合には、当然のことながらヒトには察知できないということでしょう。

そういう知覚できないものを、ヒトは器械や機械や器具をもちいて知覚できるような工夫をしていますが（いわゆる視覚化とか「見える化」とかシミュレーションがそうです）、それが完全であったり万全であるという保証はないわけです。

私はこういう状況を隔靴掻痒の遠隔操作と呼んでいます。簡単に言うと、「手に届かないもの」の代わりに「手に届くもの」で済ませて澄ましているという意味です。「そのもの（本物や実物）」には到達できないから、とりあえず「代わり（代理や似たものや似せたものや偽物、要するに別物）」を相手にしているのです。

写真に写っているものはそのものではないし、言葉は言葉が名指している事物ではないし、目の網膜に映っているものはそのものではない、と言えば分かりやすいかもしれません。

＊

話を「あらゆるものが、動いている」にもどします。

よく考えると、身のまわりのすべてのものが移動してここにあるわけです。それに、い

つまでもここにあるわけではありません。「ここ」にある「これ」は、以前は「こう」ではなかったし、「どこか」にあったはずです。万物流転。万物動転。気も動転。びっくり仰天。はあ。ため息が漏れました。すべての物が長い目で見れば動いているのですね。
（拙文「あやしい動きをするもの」より）

「動詞（的なもの）」と「名詞（的なもの）」については、以前に記事にしたことがあるので、近いうちにもう一度加筆したうえで投稿しようと考えています。

「映る、写る、移る」が、「動詞（的なもの）」と「名詞（的なもの）」へと「うつって」きました。なんとなく、整理できた気分です。こういうのは、やってみないと分かりません。

# 影に先立つ【引用の織物】

# ＊

　ガラスの内には典雅なニス塗りの、棺が飾られて、これも朝日を浴びていた。店の奥にはさらにいくつかの棺が、すこしずつ意匠を異にするようで、壁や椅子にやすらかに立てかけられ、楽器のようにも見えた。
（古井由吉作「物に立たれて」（『仮往生伝試文』所収）より引用）

目次

**棺＊**
**棺＊＊**
**棺＊＊＊**
**棺＊＊＊＊**
**棺＊＊＊＊＊**
**棺＊＊＊＊＊＊**
**棺＊＊＊＊＊＊＊**
**棺＊＊＊＊＊＊＊＊**
**枠と境**
**そっくり**
**真似る**
**見えないものは目の前にある**
**枠にひれ伏す**
**決めたのではなく決まった**
**影に先立つ**

## 棺＊

　人間には一人でいるべき空間がある、と彼女はよく考える。寝床、風呂、鏡の前、ストレッチャー、病床、死の床、棺、安置室、火葬炉、墓。夢の中や心の中と同様に、そうした場所には誰も入ってほしくない。できれば一人でいたい。
（拙文「一人でいるべき場所」より）

## 棺＊＊

　たとえばどこかをスマホを見ながら歩く人たち。たとえばどこかの待合室でスマホに見入る人たち。

　スマホというモノもそっくり、その画面に映っている映像もそっくり、聞こえてくる音声もそっくり、ときどき鳴る合成音やブルブルいう振動もそっくり、そのスマホに見入っているヒトたちもそっくり、ヒトたちの身につけているモノたちもこの瞬間に地球の至るところでそっくりなものがあるはずです。

　どことは言いません。至るところでの話ですから。誰とは言いません。誰もが免れない状況なのですから。

「わたしはスマホはつかわない」ですか？　テレビでもラジオでも新聞でも本でも車でも病室のベッドでも棺でもお墓でもかまいません。いま挙げたもののほとんどが、大量生産され、印刷という形で複製されたものです。あなたがつかっている、目にしている、耳にしている、皮膚にまとわりついている、横たわっているそれは他のどこかにそっくりなものがあるはずです。

（拙文「似ている、そっくり、同じ、同一」より）

**棺＊＊＊**

＊枠、タブロー、スクリーン

　人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしているとしか思えないものがある。

　書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレー、モニター。

　見えないものを真似ている。聞こえないものを真似ている。感知できないものを真似ている。知らないものを真似ている。

　なぞる。何かはわからないままになぞる。なぞっているという意識なしになぞる。

＊

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。空（くう）をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

＊

枠、frame、フレーム、figure、フィギュア。

仏壇、位牌、写真、卒塔婆、墓、墓石。棺桶、棺、火葬炉。

地獄絵、極楽絵図。

イコン、アイコン、アバター、分身。

（拙文「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」より）

**棺＊＊＊＊**

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。冷蔵庫をつくったために、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。パソコンをつくったために、パソコンの従者や下僕になった。スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わせて生活するようになった。

それだけではない。

大量生産されたそっくりなものを使う人間は、地球のあちこちで同じ仕草同じ動作をするようになる。そっくりがそっくりを生む。そっくりをそっくりが真似る。シンクロ、同期、似ている、激似、酷似、そっくり、同じ。

＊

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。うつったものに似せる、うつったものに似てくる。ミメーシス、模倣、描写。

うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

（拙文「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」より）

**棺＊＊＊＊＊**

寝入るとき、人はとつぜん一人になります。二人で抱きあって寝ていたとしても、眠りに入った瞬間に二人は別れます。どんなに愛し合っていても、二人いっしょに眠りの中にいることはできません。

お墓とはちがうのです。そんなの、嫌ですか？　悲しいですか？　お風呂もベッドも夢も、いっしょじゃなきゃ嫌。せっかく生きているのに。人生の三分の一は眠っているというのに。

お風呂はお墓に似ている、と書いた作家は誰だったか？　それとも、浴槽は棺桶に似ている、だっけ？　あ、トイレで縦長のドアが並んでいるのを見るたびに、縦に並べた

お棺に見えると言った女性を思いだしました。

　詩を書いていたあの人にまた会いたいです。夢でもいいですから。

（拙文「同床異夢、異床同夢」より）

**棺＊＊＊＊＊＊**

　いま自宅の居間にいる私は自分の視界を意識しようと努めているのですが、その視界がどんな形をしているのか、さっぱり見当がつきません。みなさんはどうですか？　　横長であるという気はしますが、長方形だという感じはありません。横に長い楕円形みたいにも感じられます。

　そう考えると、映画やテレビやＰＣの画面に似ていますね。本は縦長ですが、見開くと横に長いようです。昔の巻物もそうでした。人の頭というか意識の中には長方形の枠があるのではないかと疑りたくなります。それをなぞるというか真似て、物をつくっているのではないか。私たちは長方形に囲まれていませんか？

　生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、ＰＣ、スマホ.....。人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

　人は自分（あるいは自分の中にあるもの）に似たものをつくり、しだいにその自分のつくったものに似てくる、似せてくる、とつねに感じているのですが、人は「自分のつくったもの」に「自分もどき」を見て初めて、「自分そのもの」に気づくのではないか、なんて考えてしまいました。

　そのひとつが長方形の枠ではないでしょうか。

（拙文「直線上で迷う」より）

**棺＊＊＊＊＊＊＊**

長方形というと、ひとりでいる場所をイメージしてしまいます。上で述べた長方形の場所や「容れ物」ではひとりでいない場合のほうが多いのにです。たぶん、多くの人に囲まれていても人はひとりでいるという気持ちが強くあるからだと思います。

寝床、ベッド、布団、病床、シーツ、ストレッチャー、トイレの個室、棺桶、お墓、遺影。こうした場や容れ物にひとりでいる人が頭に浮かびます。誰かに似ていますが、想像の中にあるその顔は見えません。見たくないのかもしれません。

意識だけとか目だけになって道を進むさまが、寝際によく浮かぶのは車に乗っている時を思いだしているのかもしれません。道は、たとえそれが獣道であっても、舗装された道路であっても長方形を延長していったものに見えます。

テレビにしろ、映画にしろ、液晶画面にしろ、本にしろ、車窓にしろ、枠があり、その枠はほぼ横に長い四角に見えます。視界もほぼ横長の楕円形に思えます。その横に長い長方形の枠のある光景を見ながら、人は生きていく。そのあいだに枠を意識することはまれにしかない。

こういうのはこじつけなのでしょうが、こじつけというＡとＢに置き換える作業が、視覚や知覚全般の根底にあり、たとえば言語活動や広義の比喩や印象やイメージという形で、人においてあらわれているのだと思われます。目だけでなく、また意識だけでなく、魂の働きだという気もします。

（拙文「夜になると「何か」を手なずけようとする」より）

**棺＊＊＊＊＊＊＊＊**

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。これもレトリックですけど。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

スマホに限りません。車がそうです。自転車もそうです。三輪車もそうかもしれません。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産されたそっくりさんたちですが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をします。

ひとりひとりの顔も個性も違いますが、やることがそっくりなのです。

（拙文「私たちは同じではなく似ている」より）

**枠と境**

名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name
difficult to tame
difficult to frame

抽象だから、似ているというよりも、そっくりというよりも、同じであり、同一。同期。

same

なぞ、なぞをなぞるというゲイム。なぞるが目的化して空回りする。

game to play
aim
aimless game to play

何のため？　名前のため？

aim、name、fame、frame

それは罠だってば！

You're framed!

筋書き（aim）をなぞり、名（name・fame）を残し、枠（frame）を残すのに血道を上げる。

ゲイム（game）をプレイ（play・演じ戯れ競い奏で賭け、なぞり）しながら、自分が獲物と餌食（game・prey）になってしまうのに気づかない。いまは祈る（pray）べき時なのに。player ではなく prayer であるべきなのに。

いまはもう、両の足で立つのもままならないのに気づかない。

We're already frail and lame.

言葉にひれ伏し、辻褄合わせに終始する非難合戦。

blame game

敵に屈しているのではなく、言葉という枠に屈していることに気づかない。

shame

＊

It's the blame game.

It's time the game came to the end.

Who is to blame?

Shame on who?

＊

謎も境も、知ろうとしたり分かろうとしたとたんに消える。

気づいたとたんに枠でも境でもなくなる。

意味であり無意味。抽象であり具象。中傷であり愚笑。

＊

文字の形と音が意味をなす。同音で一瞬だけむすびつけられる文字とイメージと事物。韻、隠、陰、淫、印、因、姻。

偶然と必然が意味を無くし、同時に意味を有む瞬間。

そもそもないものをなぞるという謎。空の雲に何かをなぞるという謎。その形を指や目でなぞるという不思議。

なぞることで枠と境が立ちあらわれる、とつぜんの異物感と異物性。

＊

どうして、文字の形、文字が喚起する音（おん）、形と音が呼びさますイメージと意味という似ても似つかない異質な物と事と言（こと）同士が、そこに立ちあらわれてしまうのだろう。こんな不思議なことがあっていいのだろうか。

その不思議が当り前のこととして見過ごされるという、さらなる不可思議さ。これは知恵にちがいない。これこそ、人知なのだろう。さもなければ、人は日常生活をいとなめない。

線で文字をなぞるという謎。目でなぞるを追うという不思議。目線、視線が線である不可解さ。

無意識になぞるべきもの。それが人の知恵、人知、陣地。最後で最期の知、血、稚、痴、恥、遅。

**そっくり**

そっくりなものはたいてい人間がつくり出したものではないでしょうか。
そっくりな点がそっくりなのです。
それくらいそっくり。不自然なのです。

人には同じに見える、そっくりなものには自然物にはない精巧さが備わっています。
同じものなんて、人がつくらないかぎりないのではないでしょうか。

人がつくるそっくりなものには、どこか人に似たところがあります。部分的に似ているも含めて。
人に似ているのは、むしろ人が無意識に似せているからかもしれません。

自分や自分の仲間に似ているから安心するのです。

人は不気味なものはつくりません。不気味に似たものはつくりますよ。でも、何にも似ていない不気味なものはつくりません。

（拙文「引用の織物」より）

**真似る**

荒唐無稽で根拠なしの空想。馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

＊

物語を模倣する人間についての小説。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。まさか、小説を壊しているのではないか。できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

（中略）

小説を模倣する人間についての小説。小説と現実を混同してしまう人間についての小説。

小説というジャンルの始まりと洗練。律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

小説を模倣するボヴァリーを人は笑えるだろか。映画を、テレビドラマを、ＣＭを、アニメを、（演じる）俳優を、ストーリーを、ドラマを、キャラクターを、出来事を、事件を、報道を、ディスプレーに映った像やテキストを真似て、引用し、似せて、なりきる私たちは、そっくりな身振りをしていないだろうか。

ボバリズムとは、私たちのことではないか。

フロベールが「ボヴァリー夫人は私だ」と言ったという神話があるが、そう口にすべきなのは、私たち一人ひとりではないのか。ボヴァリー夫人は私たちなのだ。

（拙文「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」より）

**見えないものは目の前にある**

テレビ、映画、写真、絵画、文学、美術、映像、動画――こうしたものは人が現実の影、つまり現実とそっくりなものを求めて作った影です。

目的があり、ストーリーやドラマ、つまり意味のある影です。だからぞくぞくわくわくするわけですが、これだけ意味に満ちた影に囲まれて生きていると疲れることがあります。

（拙文「意味のある影、意味のない影」より）

＊

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということです。これがラカンについての私なりのまとめでもあります。

（拙文「人は存在しないもので動く」より）

**枠にひれ伏す**

人の作るものとは、言葉であり、物であり、事です。そのどれにも枠がありますが、枠とは境でもあります。

枠も境も、切り取るからできるものです。「切り取る」には「切り捨てる」がともないます。

そもそも切り取るのは、すっきりとしてきれいに見せるためです。持ち運んだり、簡単にさくさく処理するためには、すっきりとして無駄のない形をしていなければなりません。軽いことは絶対条件です。

軽くてすっきりしているのは、枠と境がある証拠だとも言えます。要するに不自然なのです。

＊

自然界には枠と境はないにもかかわらず、人は自然界に枠と境を作ることで、言葉の世界と現実の世界を一致させてきました。自然界に枠と境を作ることは、世界の言葉化でもあるのです。

自然も世界も、人の都合のいいように変えられてきたと言えますが、人はこの自然と世界の中にいるのであり、その逆ではありません。人も言葉化されてきたのです。

人は言葉を崇め、言葉にひれ伏しています。言葉の上での辻褄合わせと筋を通すことに血道を上げています。しかも、そのことに気づいていなかったり、気づいたとしても事の大きさにひるみ、すぐに忘れます。

それが人の面子（体裁）であり、同時に尊厳（プライド）であるとすれば、悲しいレトリックです。

（拙文「人の作るものは整然として美しい」より）

＊

We’re framed.

**決めたのではなく決まった**

鏡、影、落書き、絵画、写真、映画（影や幻影の進化したもの）、テレビ、動画、ＶＲ。これほど人が「見る」に取り憑かれているのは、じつはいまだに「見えていない」からであり、その不十分な「見る」を補助するような物や仕組みや枠組みをつくるたびに、思いがけない、つまり想定外の「見る」や「見える」を見てしまい、驚き、ぶったまげ、何かにはっと気づく。そんなことを繰りかえしてきた気がします。

そう考えると、「見る」というのは「とりあえずつくった言葉」であり、その「見る」について、人は何も分かっていないのではないかというふうに思えます。「見る」「見える」という言葉をつくったから、「見る」「見える」んだ、うん、そうだ、と「決めた」とも言えそうです。

なにしろ、人は「○△Ｘ」という言葉をつくって、その次に「○△Ｘとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

（拙文「直線上で迷う」より）

＊

人は「決めた」と思っているのに、じつは「決まった」のではないでしょうか。

同様に、事物を「作った」のではなく、「できた」。言葉を「放った・発した・話した・放した・離した」のではなく、「離れた」。「書いた・描いた」のではなく、「書けた・描けた」。「掛けた」のではなく、「掛かった」。「賭ける」のではなく、単なる「賭け」。

つまり、人の行為は、その行為をしたとたんに、人を離れて人の外での出来事になっているという意味です。要するに、人の行為は外にあるのです。さらにいえば、人の思いどおりにならないという意味で「外」なのです。

「決める」は人の為すこと、「決まる」は人知を超えている。そんな気がします。べつに神とか神秘を持ちだす話ではなく、「外にあるから見えない」だけなのでしょう。

だいたいにおいて、人が神や神秘を持ちだすのは、人が自分の落ち度を認めたくないときなのです。

「目の前にありながら外にあって見えない」という言葉の綾を文字どおりに取るしかなさそうです。

＊

言葉の綾と現実の綾が食い違っても当然なのです。言葉の世界と現実の世界と思いの世界は、それぞれ別個の論理と文法に従っていると思われるからです。

ただし、「なぞる」は「なぞられる」のではなく、「謎」である気がします。「賭ける」が「賭けられる」のではなく、「賭け」であるように。

「なぞる」も「賭ける」も外にあるようには見えなくて、つまり目の前になくて、それでいて見えないのですから。謎です。外にない外なのかもしれません。

「なぞ（る）」と「賭け（る）」――おそらく「決まる・決まり」も――の対象であり主体だと思われる（この三者には共通して固定化指向が強いという特徴があります）、文字はいったいどこから来たのでしょう。どこへ行くのでしょう。

**影に先立つ**

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに　さきだつひとを　おくるかげ

（拙文「「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれません。」より）

＊

鏡、落書き、絵画、文字、書物、文書、写真、映画、テレビ、動画、ＶＲ――。人のつくった影たちは何らかの形で残る気がします。

初めは人が影に先立ったのに、影が人に先立つようになり、最後には人が影に先立つのでしょうか。あるじをなくした影たち、いや、そもそも影たちはしもべではなかったのかもしれません。

つねに人の外にあり、ときどき人の中に入ったり出たりする、人の思いのままにならない「外」であるもの。影は不動、人が揺らぐ。

とりわけ気になるのは、人のつくった影の中で最もしぶとい文字です。

人に先立たれた文字。人の影であったはずの文字が残る。影が残る。影は人を見送ってくれるでしょうか。そのさまを思いえがくと苦しくなります。

ヒを浴びて　影に先立つ　空睨み

人が影を落とした大地と水面（みなも）には、もはや人の影はない。そんな地球上で、人のつくった影たちがどこかに残っている。遺っているのではなく、生き残っている。ひょっとすると、増えつづけるのではなく、殖えつづけている。

そうしたさまが、オブセッションとなって離れません。寝入り際にも、眠っている最中にも、浮かぶことがあります。

＊

消えないだけに、残るだけに、しかもいまや急速に増えているだけに――複製でありながら同一であるという最強の抽象を武器にして――、文字が気に掛かります。文字の暴力的なまでの異物性が気になってなりません。こんなものはこの星で他にあるでしょうか。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

先立つ人を見送るかのように（これでは、まるで人は利用されただけで終わるかのようです)。新たななぞり手に先立つかのように。待つかのように。

文字は影どころか、枠なのです。

線からなる文字が、なぞるべき枠という棺に見えてなりません。語源はさておき、駄洒落と掛け詞好きの私にとって、棺は分く（分ける）枠です。別く（別れる）枠なのです。枠に収める者と収まる者とのわかれです。

棺下ろし　境で別れ　雲疾し

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

＊

　移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。
　というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。
（拙文「うつすためには、うつらなければならない」より）

　熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂は、伝わり、移り、届き、通じます。
　でも、おそらく、伝わらないし、移らないし、届かないし、通じないものがあります。
　表情、身振り、文字です。これらは、むしろ、写したり、映すものです。
（拙文「伝わるもの、伝わらないもの」より）

目次

**うつる、つたわる**
**「何か」「何が？」**
**うつるは、かわる**
**つたわる**
**名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる**
**本物感と本物っぽさこそがリアリティ**
**「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る**

## うつる、つたわる

　影がうつる、像がうつる、姿がうつる、形がうつる。
　声が伝わる、音が伝わる、波が伝わる、熱が伝わる。

　「うつる」の例として挙げた言い方に出てくる、影、像、姿、形は、動きを止めて見るものです。連続すれば動きになります。写真と動画が、そうです。

一方の「伝わる」で挙げた、声、音、波、熱は動きとして感知されるものだという気がします。見えないのです。熱が動きであるのというは苦しい言い方になりますが、熱が伝わってくるからには、感知する側も熱くならなければなりません。これを動きとして見るかどうかでしょうが、無理に辻褄を合わせないで話を進めます。

ここでは研究や探求をしているわけではなく、わくわくを楽しむために言葉をいじっているので、大ざっぱにいきます。

**「何か」「何が？」**

姿形がうつる、姿形が伝わる。映像、録画、映写、電線、電波、電信、通信、撮影、複写、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

音声がうつる、音声が伝わる。録音、拡大、増幅、電線、電波、電信、通信、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

熱がうつる、熱がつたわる。伝導、摩擦、発熱、冷却、温度差、保存。

「何か」を「何？」と追及するのではなく、「何か」として保留したまま、動きに注目してみます。

**うつるは、かわる**

「うつる」では、「かわる」が起こり、位置関係が維持される気がします。「何か」から、別の「何か」に「うつる」ことにより、「かわる」が起きていますが、対応関係が維持されるのです。

地面に映る木の影。水面に映る空の雲。鏡に映る顔。
写真に写る、写す。写生する（絵）。描写する（絵・言葉）。

「映っている」「写っている」と感じるためには、位置の対応が粗くても細かくてもいちおう保たれていなければならないのです。きょくたんな話がゆがんでいても、下手で

あっても、大ざっぱであっても、あるいは不正確であっても、映っているし写っているのです。

ゆがみや誤差は、加工や加筆によって、ある程度まで修正できるかもしれません。あくまでも「近似値」なのです。誤差やノイズやエラーがあるのは「うつる」では当然なのかもしれません。

レントゲンやＭＲＩといった、人工的な「影」の中でも最も進化し洗練されたものになると、位置関係という意味での対応は精緻をきわめますが、影であることに変わりはありません。影は現物ではないわけです。言葉が事物ではないのと似ています。

ハイビジョンがフィルムに追いつけないとかいう話を聞いた覚えがありますが、写真や画像についても、たとえどんなに画質が優れてリアルであっても、やはり影は現物ではないわけです。

**つたわる**

「伝わる」では、動きや振動や波が上下運動、あるいは線からなる何らかの模様に還元される気がします。還元という言葉を使ったのは、抽象を意識しています。伝わるものは抽象なのではないでしょうか。

具体的な動きでありながら抽象であるというのは、言葉の上で矛盾して辻褄が合いませんが、言葉と現象がべつべつの論理と文法（比喩です）を持っていると考えれば、不思議ではありません。

別個のもの同士の間で辻褄が合うほうが、むしろうさんくさいのです。

たとえば、人は言葉で現実の辻褄合わせや帳尻合わせをすることに血道を上げています。両者が別物なのにです。それを人は知っているはずなのに、つねには意識しません。言葉で思いの辻褄合わせをすることにも熱心です。冗談ぽく言えば、捏造疑惑です。捏造常習者が言うのですから確かでしょう。

**名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる**

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。そんな気がします。

名詞的なものがうつるときには、うつる前のものとうつった後ものの間の対応が重視されます。理想は一対一の対応であり、そのありえない理想を指向するのです。絵をイメージしてください。絵はつたわると言うよりもうつる、とりわけ写る、映るのです。図柄や模倣が壊れてはいけないわけです。

一方の動詞的なものがつたわるときには、重視されるのは動きであり、つたわる前後の位置的な対応関係は無視されます。そもそも、つたわる前のものとつたわった後のものの区別さえ大きな意味を持ちません。両者が別物であっても重視されないのです。振動や熱をイメージしてください。

外の音や声（振動）が、室内のここまで伝わってくる。糸電話で声が伝わる。テーブルの向こうに置いた鍋の熱がここまで伝わってきている。

糸電話は「伝える」（振動が）ですが、伝言ゲームは、「伝える」と言うよりも「うつる」（メッセージが）ではないでしょうか。メッセージはつたわるのではなく、むしろうつると、ここではイメージしています。それぞれの動詞の慣用とは異なるイメージですね。自分語的な用法と言えるかもしれません。

**本物感と本物っぽさこそがリアリティ**

「伝わる」も「うつる」も、置き換えが前提になっています。置き換わらないと伝わらないし、置き換わらないとうつらないわけです。

要するに、本物や起源でなくていいのです。というか、本物や起源が伝わったり、うつるのは不可能ですから、何か別のものに置き換わっていく、つまり代わりのものが本物や起源を演じる、あるいは振りをすると言えます。

（※世界や森羅万象と無媒介的に触れあっているのではないため、本物には届きません。

時間をさかのぼることはできないので、起源を知ることはできません。自分を納得させるためには、本物も起源も、言葉で「こしらえる」しかないわけです。）

本物感、本物っぽさ、本物のようなもの、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので我慢するのです。それしか方法がないからです。このことを人は意識しないで知っています（たぶん学習した知識ではないでしょう）。意識するとがっくりきてやる気をなくすでしょう。生きる気力を失うかもしれません。

**「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る**

基本には「似ている」や「そっくり」がある気がします。確認するためには器具や器械や機械に頼るしかない「同じ」や「同一」ではなく。人は印象の世界に住んでいるようです。

そのため、たとえ「同じ」や「同一」というデータやそれによるイメージを得たとしても、それを「似ている」や「そっくり」でとらえる（置き換える）にちがいありません。この置き換えという操作をおこなうことが、人である証左なのかもしれません。

「〇〇感」「〇〇ぽさ」「〇〇らしさ」「〇〇性」「〇〇的」「〇〇ようなもの」、これこそが人にとってのリアリティなのです。「そのもの」にたどり着けない人類の歴史は、「感」「ぽさ」「らしさ」「性」「的」「ようなもの」の洗練の追求だと言えそうです。

本物や起源にたどり着けないことを人は意識していないで知っているわけですが、ときには、あるいは人によっては、それを忘れて「〇〇とは何か？」とか「〇〇の意味はあるのか？」とかという問いを発する場合があるのは、みなさんご承知のとおりです。答えが出ないことも、ご承知のとおりです。

レトリックだけでなりたっているような文章

# ＊

目次

**タイトルを決める
活用を活用して書く
動くために動くを使う
外国語に翻訳できないような文章
レトリックだけでなりたっているような文章
レトリック詞集
＊イッツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。
＊書いても書いても書いてはいない。
＊分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。
＊映る、写る、移る
＊記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。
＊この符合、符号、付合は、只事ではない。
＊そっくりなところがそっくり
＊（７）ＡとＢは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。
＊あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。
＊「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまう
＊写す、映す、移す、撮すと言うより
＊ player ではなく prayer であるべきなのに。
＊指す、差す、刺す、射す、挿す
＊「あなた」＝「I love you.（only you)」＋「I miss you.（without you)」説
＊なぞるをなぞる。
＊ことのはに　さきだつひと
最後に**

## タイトルを決める

動くものを手なずける

昨日に投稿した記事のタイトルです。私の記事には動詞が目立つと言われたことがありますが、それは意識してやっていることなのです。

動きを懐柔する。運動をとらえる。運動を固定する。運動を固定化する。動きを記述する。

「動くものを手なずける」の代わりに、こんなタイトルでもよかったと言えますが、あえてそうはしませんでした。「動く」と「手なずける」をどうしても使いたかったのです。

動くを手なずける。「動く」を手なずける。「動く」を記述する。

この二つも候補だったのですが、「動くものを手なずける」に落ちつきました。

**活用を活用して書く**

そんなことで悩んでいたのですが、わざわざ舞台裏をお話ししたのは、まさにそういうことを、今回は書きたいからにほかなりません。ややこしくてごめんなさい。

私は考えたり書いたりするときには、動詞とか用言に導かれることが多いようです。いま用言という言葉を使いましたが、私は文法用語には疎いです。英文法は好きでしたが、日本語の文法が苦手でした。なんだがぴんと来なかったからだと思います。

いま辞書で用言と体言を調べてみましたが、大きな違いは用言は活用して、体言は活用しないということみたいです。これなのです。私が動詞に惹かれるのは。

簡単な例を挙げます。

愛。これは名詞です。中国語ではどうなのかは知りません。日本語での話です。

愛する。これは動詞と見なしていいでしょう。

愛――。私の中では、これで終りになります。思考停止におちいるのです。「愛なの」「そうですか」、「愛である」「ははあ」、「愛です」「あ、はい」という感じです。

愛する――。えっ？　誰が何を？　何が何を？　誰が誰を？　いつ？　どこで？　どうやって？　愛さない。愛せない。愛せば。愛しちゃったのよ。愛してる。愛していた。愛するだろう。愛していいですか？　愛していないんですか？

動詞だとどんどん活用というか、頭の中で「愛する」が変化していくのです。ひとさまのことは知りません。こんなことを話す相手がいないのです。今回初めてこんな話をしています。

ちなみに、この記事は小説です。正確なタイトルは「【小説】レトリックだけでなりたっているような文章」です。私は研究者でも探求者でもありません。「小説」とすると言いたいことが自由に言えるので、このところ味を占めてやっています。

記事は楽しく書きたいものです。

**動くために動くを使う**

要するに、私は動詞を使うことで思考停止を避けているみたいです。名詞ばかりを使っていると、考えられないし、書けないと言えるでしょう。ひとさまのことは知りません。知りたいともあまり思いません。自分の世話で精一杯なのです。

そんなわけで、私の書く文章には動詞や用言がよく出てきます。活用する用言に助けてもらって書いているのです。活用を活用するというか。

＊

His love of dogs led him to the hatred of people.

イヌへの愛が彼を人間への憎悪へと導いた。

イヌを愛する気持ちが彼を人間嫌いにした。

イヌを愛する気持ちが高じて、彼は人間嫌いになった。

イヌを愛するあまり、彼は人間を憎むようになった。

自作のぎこちない英文を自分なりに日本語にしてみたのですが、いわゆる「直訳」から「こなれた訳」へと変わっていく過程が分かるのではないでしょうか。私はかつて翻訳家をめざしていたのですが、上のような訳の違いをいろいろな先生から教えてもらいました。

名詞構文とか動詞構文なんて言葉を使って説明する先生もいた記憶があります。要は、英語は名詞構文が多いから日本語では動詞的に訳せ、ということでした。そのほうが日本語としてこなれているとか、分かりやすいからだと教わりました。いま考えるといかにもいかがわしい説明です。

そうした訓練が、いまになって私の書く文章に表れているのかもしれません。いずれにせよ、原文があってそれを読みやすい日本語にするような練習をしていたのです。現在の私の文章が読みやすかったり分かりやすいかとはまったくの別問題ですけど。

＊

私にとって考えるとは、言葉を動かすことのようです。動詞でも名詞でも、どんな言葉でもです。言葉をいじると言ってもいいかもしれません。人が何をどう考えているかは、人の中で起きていることですから、確認できません。自分でも確認できないし、他人といっしょに確認することもかなわないという意味です。

思いは言葉という形で出してみて、はじめて確認できます。言葉は、外にあるのです。

外にある言葉は聞こえるし見えます。ただ、意味を取ろうとした瞬間に、言葉は見えなくなり聞こえなくなります。人の中に入るからでしょう。中にあるものを言葉と呼ぶ勇気は私にはありません。

（言葉が人の中に入ったと考えたとき、その言葉がどうなっているのか、不思議でなりません。確認できないという意味で、中の「外」というふうにイメージしています。ブラックボックスというか、分かりようがないという意味です。）

「言葉らしきもの」が、目に見え、聞こえ、場合によっては触れることができる場合に、私はそれを言葉と呼びます。見えない、聞こえない、触れることができないものを、私は抽象だとしか考えていません。

抽象は動かせません。

＊

”誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの――。言葉のことです。”

いま引用したのは、私はよく使う文章です。ちょっといじってみます。

”誕生の時点で既に存在するもの。常時、人の外部に存在し（外在し）、それでいて時に人間の内部へと出入りし、思惑に抵抗するという意味で、人にとって「外部」であるもの――。言葉のことである。”

このいじった文は自分では絶対に書かないものなのですが、動詞よりも名詞を使うことに加えて、もう一つ特徴があります。あえて漢語を使っているのです。

私はできるだけ、いわゆる大和言葉、つまり和語を使うようにしているのですが、これは名詞を避けて動詞を使うことと深くつながっています。いま思えば、大和言葉をなるべく用いるようにと言われていたのも翻訳を修業していたころでした。

誕生の時点で既に存在するもの。常時、人の外部に存在し（外在し）、それでいて時に人間の内部へと出入りし、思惑に抵抗するという意味で、人にとって「外部」であるもの――。言語のことである。

太文字にしたのが漢語的な言い回しです。私は漢語の多いこの手の文章が苦手で、頭に入って来ません。どうしても読まなければならないものは、自分なりに和語の多い文章に「翻訳」します。日本語を日本語に訳すのですが、これは冗談でもレトリックでもありません。

長い引用になりますが、最近の記事から取った以下の文章をざっとご覧ください。

＊

「わかる」と「はかる」は字面と発音が似ていますが、「わかる」にくらべて、「はかる」はあまり考えたことがありません。でも、身のまわりを見ると「わかる」だけでなく「はかる」が多いのに驚きます。

とくに、病気になったり老いると「はかる」を意識するようになります。病院に行くとわかりますが、検査は「はかる」のデパートです。「はかる」をたくさんして、その結果が「わかる」というわけです。尿検査だけでも、たくさんの「はかる」があり「わかる」があるようです。結果の項目（リスト）を見るとわかります。

それにいまは、家でも毎日体温を測っています。はかればわかって安心するわけです。いや、「はかる」の結果をわかりたくないと思うときが、ままありますね。気が滅入りそうなので、思い出話をします。

いまになって思うと、学校という場所は「はかる」と「わかる」に満ちあふれていました。そもそも、学校は「わかる」と「はかる」に二分されると言ってもいいのではないでしょうか。

なにしろ、はかるとわかる、はかるはわかる、なのです。恐ろしいことですけど。「はかる」は、ほんわかとした、いいこと尽くめではないのです。

（拙文「「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる」より」

＊

上の文章では、「はかる」と「わかる」という表記をしています。和語をひらがなにしているのは意識してのことで、もしそうした表記をしなかったら、上の文章は絶対に書けなかっただろうと思います。

## 外国語に翻訳できないような文章

ところで、上の文章を、たとえば英語に翻訳することは可能でしょうか？　いま考えていたのですが、私にはできそうもありません。

逐語訳（極端な言い方をすると、原文と訳文をできるだけ一対一に対応させる直訳みたいなものです）は無理でしょう。解説を訳文に混ぜるとか、註を付けば、できそうです。

ま、そんな奇特な人はいないでしょうけど.....。

必死にかく、もがき、あがくのです。書いても書いても「欠く」しかない世界。圧倒的に言葉は足りないし、見る果てがないし、きるにも切りがないし、分けても分からない。それが「ありえない」なのです。
（たとえば、いま書いた文章はレトリックだけでなりたっている書き方をめざして書きました。書かれていても何も言っていないのです。ひとり受けギャグの世界に似ていませんか？　また、この書き方には外国語に翻訳するのがきわめて難しいという特徴があります。翻訳する人などいませんけど。）
（拙文「ありえない文章」より）

こうした書き方を、用言体とか「ありえない文章」と呼んでいたこともあります。私にとってオブセッションのようです。

## レトリックだけでなりたっているような文章

たとえば、レトリックだけでなりたっているような文章、これを「レトリック詞」（私は詩が書けないので、詩ではなく詞です、当初はナンセンス詞とするつもりでした.....）と勝手に名付けたいと思います。

これはどんなものなのかと言いますと、上で述べたことの繰りかえしになりますが、たとえば解説をしたり註を付けないかぎり、外国語に翻訳するのがほぼ不能な書き方を目指します。「勝手に目指せば？」ですよね。我ながらアホなことを目指していると思います。

ひとつだけ言い訳をさせてください。「レトリック詞」は、学生時代にフランス文学（そして現代思想）を勉強していた自分としての総決算なのです。なぜなのかと言いますと、私がいろいろなことを学んだフランスの作家や詩人や思想家の中に、日本語（あるいはフランス語以外の言語）に翻訳するのが不能であるような書き方をしていた人たちが少なからずいたからなのです。

ミシェル・フーコーとジル・ドゥルーズにくらべると、日本語を母語とする者にとっては体感しにくいお話を語る人だという印象を、デリダについてはいだいています。
落語を聞いていて、あるいは海外のコメディ映画を見ていて、どこで笑えばいいのか分からないというのに似ています。「笑うべきところ」を解説をしてもらったとしても、笑いが自然と湧いてくるわけではないのです。
（拙文「【小説】音の名前、文字の名前、捨てられた名前たち」より）

私は、いわばオマージュとして、その人たちの書いた文章の言葉の身振りを母語でなぞりたいのです。たとえば、日本語でデリダする、フーコーする、ドゥルーズする、バルトするというふうに.....。いま思わず笑ってしまいました。無知から来る無恥は、まことに恐ろしいものです。鞭で自分をぺんぺんしたくなりました。

私がそうした人たちの足元にもおよばないことは重々承知しておりますが、だからこそ、アホと呼ばれてもいいから死ぬ前にやっておきたいなあ、と思っている次第なのです。じつのところ、アホでなければ、こんな荒唐無稽なことは言えません。

こういうありえない夢があるかぎり書きつづけることができるのだとすれば、この夢が終わらないでほしいです。この夢の中で、ありえない文章をひたすら書くしかない。
（.....）
終りなど考えないで、めざしているのが蜃気楼であると意識しながら、ただ歩くしかない旅なのかとも思います。
（拙文「ありえない文章」より）

そんなわけで、私は母語である日本語で、「ありえない夢」を追い、「ありえない文章」を書いていこうと思います。アホは直らないようです。

**レトリック詞集**

以下は自己引用による、いわばレトリック詞集ですが、出所はあえて明記しません。これまで何度も引用してわけが分からなくなっているのです。

自分でも不明なので、たとえば（「たとえば」が多くてごめんなさい）、「星野廉イッツ・ア・マジック。」とか「星野廉記述は、既述であり、」というふうにネット検索するとヒットするので助かります。

こんなふうに自分の痴部（たとえば、自己引用癖のことです）が露わになり、絶句します。

悪いことはできないものですね.....。いずれにせよ、便利な世の中になりました。みなさんも、ご自分のユーザーネームでお試しになると面白いかもしれません。

なお、以下のレトリック詞集に意味や内容はありませんので、ざーっと顔＝字面だけをながめる感じで、目を通してやっていただけるとうれしいです。

**＊イッツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。**

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イッツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

**＊書いても書いても書いてはいない。**

隔靴掻痒の遠隔操作。まるで夢の中。知覚機能を用いる限り対象には触れることができない。言葉を使う限り直接的に森羅万象を相手にすることはできない。

駆けても駆けても駆けてはいない。掛けても掛けても掛けてはいない。掻いても掻いても掻けてははいない。書けても書けても書けてはいない。要するに、そういうことです。

どう足掻いても藻掻いても現実にたどりつけない私たちは、覚めた夢の中にいるのかもしれません。

**＊分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。**

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

まず現実での体験があって、言葉は後という意味です。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

言葉、とりわけ文字は後付けです。理屈なのです。分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

**＊映る、写る、移る**

それが見るであり、聞くであり、読むという行為と言えるでしょう。見たもの、聞いたもの、読んだものを、いったん信じないことにはーー「信じる」は「なぞる」ですーー、見えないし、聞けないし、読めないのです。実際には「ないもの」を見て聞いて読んでいるのですから、変な精神状態にあると言えるでしょう。

いましているのは、絵、映画、映像、動画、演劇、物語、小説の話です。虚構というものは「ない」を「ある」と一時的に信じ（つまり、思い描くことでなぞり）、しかもそれを自分自身も心の中で表情や動作として演じるわけですから、確かに変なことをしていると言えます。

要するに、映る、写る、移るです。転写された相手が自分の中に入ってくるという感じ。

**＊記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。**

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

言葉を用いて「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉や言い回しを「なぞる」こと、言い換えれば既述なのであり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術だと言えます

**＊この符合、符号、付合は、只事ではない。**

呪術、呪い・まじない、魔術・マジック・magic、マジ・magie（フランス語です、マジな話が)、まじもの・蠱物。

この符合（※ふごう)、符号（※ふごう)、付合（※つけあい）は、只事ではない。「まじ」めな話が.....。

**＊そっくりなところがそっくり**

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。これもレトリックですけど。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

＊

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりなお客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、唖然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

**＊（７）ＡとＢは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。**

世界を「まだら」状にしか知覚および認識できない人間が、長年にわたって使用してきたことにより、慣例的に反対の関係にあると事実誤認および錯覚されていると推測可能な言葉のペア。補完関係があるという見方も可能かもしれない。静と動、絶対と相対、客観と主観、客体と主体、知覚と錯覚、「分かった」と「分からない」、「知っている」と「忘れている」、「記憶にございません」と「存じ上げております」、きれいと汚い、毒と薬、可能と不可能、シャチョーとペーペー、はじめしゃちょーと林家ペー（※両者とも人間という意味）、林家ペーと林家パー子、お偉いさんと市民、苦労人と元苦労人、玄人と素人、素人のど自慢と紅白歌合戦、濃いと薄い、あそことここ、善と悪（倫理的意味ではなく、この惑星に対しての人間の影響度）、神と悪魔（諸説あり）、異端と正統、温水と冷水、ヒトと動物、なまものといきもの、のろいとまじない（漢字にすると同じである点に留意されたい）、優と劣、高等と劣等、理系と文系、〇〇党と△△党、右派と左派、保守と革新、主流派と非主流派、〇〇党ＸＸ派と〇〇党□□派、など。

**＊あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。**

あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。
あやまるものはあやまる。
あやまらないものがあやまる。
あやまらないものがあやまらない。

あやめて、あやまる。
あやまって、あやめる。
あやまって、あやまる。

あやまって済む問題。
あやめて済む問題。

あやめとかきつばたとしょうぶをあやまる。

あやめばしで、みをあやまる。ごめんなさい。
あやめばしはあやめた橋。諸説あり。

あやめ亭は落ちついたお店です。
あじさい亭もすごく美味しかったです。最高でした。

あやまらないそうり。
あやまらない、あいむそうり。
あいむそうりと言わないそうり。
あいむそうりと言わないあいむそうり。（早口言葉）

あやめてもあやまってもあやまらないみちびくひと。
あやまりをみとめないみちびくひと。
つじつまあわせにちみちをあげるみちびくひと。（早口言葉）

**＊「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまう**

「あるとない」と「有ると無い」と「存在と無」は、同じことを言っているというのは抽象です。それぞれが違います。

「あるとない」＜「有ると無い」＜「存在と無」

「存在と無」は「あるとない」よりずっと厳めしい、つまり存在感があります。難解な印象を与えますし、実際に難解でもあります。なにしろ、「ないことはない」という振りをして「ないことがある」とほのめかしているのです。「いや」が「いいわ」だったりするＳＭプレイとそっくりなのです。

漢語系の言葉や漢字は、「ない」を「ある」ようにほのめかします。これは顔の問題だと思います。文字には顔がありますが、漢字のいかめしさはすごいです。漢語系の言葉を使うと頭が良さそうに見えるし、すごいことを言っているように見えます。

字面が強面だとも言えそうです。ないはない、ことばはことば、ことばはものではない。こういう身も蓋もない、がっかりするしかないほど明快なことを「無は無なり」「言葉は言葉である」「言葉は事物ではない」と漢語系の言い回しで言うと、とたんに「ないはある」の振りをしてしまうという事態が生じます。がちで「ある」ように思えてしますのです。いわば顔芸です。

「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がつまっている気がすると言えば、分かっていただけるでしょうか？

あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
あるあるあるあるある
無　＝　あるあるあるあるある……

漢字や漢語には何だか「思い」がつまっているようで「重い」のです。ただし、あくまでも日本語においての話です。また私という個人においての話であることは言うまでもありません。

**＊写す、映す、移す、撮すと言うより**

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。その意味で、なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではありません。

**＊ player ではなく prayer であるべきなのに。**

名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name

difficult to tame
difficult to frame

抽象だから、似ているというよりも、そっくりというよりも、同じであり、同一。同期。

same

なぞ、なぞをなぞるというゲイム。なぞるが目的化して空回りする。

game to play
aim
aimless game to play

何のため？　名前のため？

aim、name、fame、frame

それは罠だってば！

You're framed!

筋書き（aim）をなぞり、名（name・fame）を残し、枠（frame）を残すのに血道を上げる。

ゲイム（game）をプレイ（play・演じ戯れ競い奏で賭け、なぞり）しながら、自分が獲物と餌食（game・prey）になってしまうのに気づかない。いまは祈る（pray）べき時なのに。player ではなく prayer であるべきなのに。

**＊指す、差す、刺す、射す、挿す**

指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。つまり、サディスティックなのです。

川端康成の作品における「指」の役割と象徴性はきわめて大切です。指はなぞり、さすものなのです。何かの代用であることは明らかでしょう。

**＊「あなた」＝「I love you.（only you)」＋「I miss you.（without you)」説**

「あなた」＝「I love you.（愛しいあなた)」説。これでは「かなた」の意味がすくえません。

じゃあ、「あなた、貴方＝ you、彼方=over there」なのですから、音感的には「あなた・貴方」＝「I love you.」で、意味的には「あなた・彼方」＝「I miss you.（目の前にいないあなた)」では、どうでしょう。

つまり、「あなた」＝「I love you.（only you)」＋「I miss you.（without you)」説。

**＊なぞるをなぞる。**

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。なぞるをなぞる。空（くう）をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

**＊ことのはに　さきだつひと**

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがい

つか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

　ことのはに　さきだつひとを　おくるかげ

**最後に**

　以上、私の文章がいかに内容なんてないよーであることが体感いただけたかと思います。

　文章は顔が命。文章は読むよりも、その顔を見て愛でる。読むよりも、見たり唱えて楽しめばいい。

　さいきん、つくづくそう思います。意味に疲れて、憑かれて、突かれて、漬かれて、付かれているのかもしれません。

　ひとりよがりで自己満足でしかない自分語と化してきた拙文の言葉たちにお付き合いいただき、ありがとうございました。

# ◆第二部　大和言葉（和語）、言葉のなかの言葉、自分語

うつせみのたわごと-1-（全 14 回）

＊

なにかのかわりに、なにかではないものをもちいる。かわりをもちいるかわりに、たちばがかわる。そうなると、もう、もてあそばれるしかない。つかうのではなく、つかわれるがわにみをおくことになる。

＊

ことわりのないところでことわる。いうまでもなく、ことわりはない。わりきれない。

＊

ことをわける。わける。わかる。かわる。おそらく、そのあわいはせまい。わけがわからなくなるほど、せまく、ちかい。

◆

**「うつせみのたわごと-1-」（全14回）**

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。ふだん書いている文章とは違った書き方で、「言葉」、「書くということ」、「読むということ」をテーマに書くという実験をしています。

標準的な表記に直したキーワードは、「何かの代わりに何かを用いる」「ことわり・事割り・言割り・断り・理」です。

直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」「あわい」「かわる」です。
この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」

『フィネガンズ・ウェイク』「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel（邦訳：バベルの後に)』「ピジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.02　うつせみのたわごと-1-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

# うつせみのたわごと-2-

＊

まことのかたこと。かたことのまこと。

＊

まことちゃんがかたことをいう。からだをゆらすたびに、かたことかたことと、はこのなかのあめだまがなる。たまがころがる。かたり、かたり、こと、こと。

＊

かたことのからことばで、まことのことをのべようとする。まことにもどかしい。かといって、くにのことばで、まことのことをかたるのも、もどかしい。まことは、まことにまことなのか。そう、みずからにとうのがまこと、いや、かたことなのかもしれない。まことは、くちぐせ。とんでもない、くせもの。

＊

かたられるはなしのかたはしを、みみにし、かたはしからわすれていく。それで、すべてをきいたことにする。なんといわれたと、きかれたら、おぼろにおぼえているところをつくり、おぎない、かたればいい。それしかできないのが、みのほど。それなのに、もっとできると、ひとはおもいこんでいる。いいきかせている。

◆

**「うつせみのたわごと-2-」（全 14 回）**

「うつせみのたわごと-1-」につづき、できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。ふだん書いている文章とは違った書き方で、「言葉」、「書くということ」、「読むということ」をテーマに書くという実験をしています。

今回のテーマは、言葉でものごとを語ること、および、ヒトが真実・現実・事実をとらえることの不可能性です。

標準的な表記に直したキーワードは、「まこと」「かたこと」「かたる・語る・騙る」です。

直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」『フィネガンズ・ウェイク』「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel（邦訳：バベルの後に)』「ピジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.02　うつせみのたわごと-2-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

# うつせみのたわごと-3-

＊

なぞ。なにかわからない。だから、なぞる。くうにゆびでなぞる。いま、ここに、ないからなぞる。つちやかべに、えをなぞる。あるいは、かく。ひっかく。なすりつける。ぬる。そうして、おもう。おもいをめぐらす。おもいをえがく。

＊

なぞ。なにかわからない。だから、なぞる。くうにおもいでなぞる。いま、ここに、ないからなぞる。つちやかべやものに、じをしるす。うちわでしかわからない、ことばともんじ。よそものには、おしえない、なぞ。うちわだけのなぞ。やがて、それがなかまをしばるようになる。おきて。やぶったものは、とがめられ、むくいをうける。ことばがちからをえる。ひとにさしずし、もうしつけるようになる。

＊

しる。しるをかける。つばをつける。なづける。なつける。てなずける。なわをはる。なわばり。それでも、なつかない。このほしをてなずけるのは、むずかしい。どんななをつけても、どんなにながふえても、なつかないものがある。それをわすれる。それをしらない。だから、なつけたものとする。または、このさき、なつくものとする。いのり。ねがい。おまじないのことば。しるしるちしる、しるかけて、つばかける——。ないから、かける。むなしいふるまい。

＊

なつかしいところ。いごこちのいいところ。ただしいものにみちたところ。おのれのよりどころ。ささえ。みなもと。おもいのうちで、つねに、かえっていくところ。うち。なか。いえ。むら。むれ。もどることのできる、ちとつちがあるところ。なかまや、はらからや、おやのいるところ。だが、かえれないところがある。なつかしいが、もどれないところ。とおいむかしにあった、といわれるところ。あったと、されるところ。そこは、うつつには、ないからこそ、あるとしんじる。よそもののちをながしても、まもる

べき、つちとち。みなもととは、ないにわ。ないにわを、いのちをかけてしんじる。むなしいふるまい。かなしいさが。

＊

みなもと。にわ。かえれない。うつせみにはないから。うつお。うつせみのから。うつせみのあな。うつせみのな。うつせみのあなた。うつせみのないにわ。ひろいひろいにわ。ほしぼしのうかぶにわ。はて。ないはない。こころとおもいにあるだけ。しんじるしかない。な。ことのは。

◆

**「うつせみのたわごと-3-」（全 14 回）**

「うつせみのたわごと-1-」と「うつせみのたわごと-2-」につづき、できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

以上の３つの方法を試しています。

＊

今回のテーマは、ヒトが言語を獲得したこととテリトリーと知との絡み合いです。これまで何度か論じてきたことを、大和言葉系の語だけで語ろうとすることのおもしろさを感じました。スリリングな体験でした。

標準的な表記に直したキーワードは、「謎」「なぞる」「かく・描く・掻く・書く」「思い」「掟」「しる・知る・領る・汁」「名づける」「手なずける」「なわばり・縄張り」「ち・

地・知・血」「懐かしい所」「帰る」「戻る」「源」です。

　直接書かなかったキーワードは、「動物行動学」「縄張り行動」「マーキング行動」「闘争本能」です。

　この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」『フィネガンズ・ウェイク』「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel（邦訳：バベルの後に)』「ピジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.03　うつせみのたわごと-3-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

# うつせみのたわごと-4-

＊

そと。よそ。かかわりのない、ちのつながりのないものどものすむところ。よそは、うちにもいる。なかにもいる。よそをおう。だから、よそおう。これは、でまかせ。じびきにないものは、つくり、かたる。じびきは、ことばのあとをおう。ことばは、じびきにしたがわない。じびきは、おきてではない。はなつ、つくる、かたる、あやまる、なまる、まねる、まねそこなう、まなぶ、まなびそこなう。ことばは、そうしてうまれ、うつりかわってきた。よそとあう。よそとであう。だから、よそおう。これもでまかせ。ことばは、よそおう。これは、おそらく、まこと。

＊

よそおう。ふりをする。かぶる。かわをかぶる。ばける。いのちをかけてまで、なにかのかわりをしようとするものもいる。とらのかわをかぶって、ばけるものもいる。とらのかわで、こしをおおうものもいる。とらをよそおう。とらにばける。えらそうにする。とら、とら、とら。でも、とらではない。かわりは、あくまでも、かわり。にせたもの。にせもの。ほんものにみえるものを、よそおう。そうみえるだけなのに。ほんものかどうかを、しるすべはないのに。だから、だれもがかたられる。だまされる。それでいて、さしてさしさわりがないから、よはつづく。

＊

ほんものとみえるものは、かわりのもの。かりのもの。かりそめのさまを、ひさしいものとする。ものとする。そうきめる。みなで、そうだときめる。すると、そうだということになる。だから、にせる。にせようとつとめる。こうして、よは、にせものだらけとなる。にせものだらけと、かす。かす。かする。ばける。かりのすがたを、みあやまる。ほんものとみあやまる。さしてさしさわりはない。よはつづく。

＊

あやまる。はずれる。ずれる。まちがえる。ごまかす。つくろう。それが、ひとのつ

ね。さが。あやまっても、あやまらない。ずれても、とりつくろう。わすれる。なかったことにする。ぐあいのわるいことは、なかったことにする。そのうち、みんなわすれる。あやまらない。あやまらないはず。たがわないはず。そうおもいこむ。うたがわない。それが、ひとのつね。さが。このほしにすむ、ひととよばれる、はずれ、ずれた、いきするもののつね。さが。

＊

さがしい。こざかしい。さがしても、このほしには、ほかにいそうもない。おのれのおこないを、はずべきものとおもう、さかしさがありながら。ふりかえることができるはずだ、とおもうこころがありながら。はずかしがるけはいがない。はずかしい。かしこまるそぶりもない。わるがしこい。

◆

**「うつせみのたわごと-4-」（全 14 回）**

「うつせみのたわごと-1-」と「うつせみのたわごと -2-」と「うつせみのたわごと-3-」につづき、できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する。
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く。
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす。

以上の３つの方法を試しています。

＊

今回のテーマは、「外部・内部・辺境」という分類です。「よそおう」という言葉をつかって、そうした分類＝分ける作業が、ありもしない物事を捏造することだと指摘しています。ヒトという生き物の性（さが）を嘆いています。

　標準的な表記に直したキーワードは、「よそ」「装う」「そと」「うち」「ふち」「代わり」「偽物」「ずれる」「はずれる」「語る・騙る」「仮」「化ける」「誤る・謝る」「賢しい」「悪賢い」です。

　直接書かなかったキーワードは、「エルンスト・カッシーラー」「クロード・レヴィ＝ストロース」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.04　うつせみのたわごと-4-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp
参考記事

# ◆第三部　十の「げん」、言葉に言葉を当てる

# げん・幻（うつせみのたわごと-5-）

＊

げん──。きになることば。からからきた、ことば。やまとことばにまけず、おなじおんがおおいのが、からことば。やまとことばとからことば。うちとそと。なかとよそ。ことばのうえに、ことばはない。ことばのしたに、ことばはない。ただ、ひとりひとりにとって、なつかしいことばがあるだけ。みみにここちよいことば、したのうえをよくすべることばがある。こころなごむ。それでいて、みみにさわり、したにざらつくことばを、いみきらう。よそのことばを、いみきらう。みくだす。わかもののことばを、いみきらう。そしる。ひとのつね。

＊

げん・幻。げんかい・幻界。まぼろしのすむ、ひろいところ。まぼろしのある、にわ。まぼろしのいる、ば。ま──。おもいことば。いくとおりにも、みみにひびく、おん。まをほろぼす。間をほろぼす。まほろぼろし。なまって、まぼろし。これ、でかませ。ちかくにあり、ちかしいものとなったかにみえる、とおくのものをむねにいだく。へだたったものをだく。いまーじゅ。いめーじ。image。これも、からことば。

＊

まぼろしは、ひとりひとりがいだく、ゆめのつぶ。ぱちんとはじけ、ひをはなつ。まぼろしは、むれやなかまで、いだくものではない。ゆめは、ひとりでみるもの。ねむりのなかでみる、ゆめ。きたるべきものにかける、ゆめ。ひとつとして、おなじゆめはない。なんどもみるゆめでさえ、ずれている。まをほろぼす。間をほろぼす。魔をほろぼす。真をほろぼす。麻をほろぼす。目をほろぼす.....。

＊

ひととひとは、はなれている。ちかくにみえるひとさえ、へだたっている。ちかくにいるのではない。ちかくにみえるだけ。ゆめも、かけはなれている。だから、ゆめにかける。ゆめに、はしをかける。ひとは、つねにうつりかわる。ゆめうつつは、かわりつつ

あるのが、つね。もどることはできない。かえることはできない。だから、いのる。ねがう。ごまかす。いいきかせる。むれでいのれば、かなうとしんじるものが、いかにおおいことか。あさましい。きなくさい。せめて、ひとりでしんじたい。

＊

魔をほろぼす。まほろぼしば。まをほふるば。まほろば。まほら。まほ。まほう。みな、でまかせ。みな、でたらめ。そうやって、ことばはうつろってきた。まちがう。まちがえる。まをちがえる。まがさす。まがう。まがよう。まざる。まがごと。まがまがし。まがる。ゆめのなかでは、どんなことでもおきる。おもいのうちは、とりとめがないのがつね。まがいもの。にせもの。かわり。とはいえ、ひとは、まがいをしんじるしかない。まぼろしを、しんじ、よりどころとし、いきるしかない。

◆

【後記　今回のたわごとで「幻界」が出てきました。10 の「げん」について計 10 本のたわごとを書くつもりだったのです。以下は、10 の「げん」の見取り図です。

※太文字の部分だけをご覧ください。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
＝ 7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
＝ 8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげ

る・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
＝9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・輪・和・わ」
＝10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

◆

**「うつせみのたわごと-5-」（全 14 回）**

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

以上の３つの方法を試しています。

＊

今回のテーマは、「まぼろし・げん・幻」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「幻界」です。この回から、10 の「げん」について連載していく形になります。

標準的な表記に直したキーワードは、「幻・まぼろし」「間を滅ぼす」「真を滅ぼす」「魔

を滅ぼす」「イメージ・image」「信じる」です。

直接書かなかったキーワードは、「知覚（する）」「想像（する）」「空想（する）」「夢想（する）」「魔法」「まじない・呪い」「だく・だかれる・いだく」「ジャック・ラカン」です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」『フィネガンズ・ウェイク』「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel（邦訳：バベルの後に）』「ピジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.06　うつせみのたわごと-5-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

# げん・言（うつせみのたわごと-6-）

＊

げん――。きになることば。からからきた、ことば。ことだまは、おそれおののくものに、はたらきかける。おのれのてだてとしようと、おもわくをもって、ちかづくものをあいてにすることはない。このしまじまにくらすもののことばだけにやどると、だれがいっただろうか。ことばは、ひとをえらばない。たまも、ひとをえらばない。ひとしいのが、ひと。ひとは、みなひとしい。ことばも、ことごとくひとしく、ことなることはない。ことなるのは、かたとかたちだけ。ことばは、ひとしく、ひとにはたらきかける。

＊

げん・言。げんかい・言界。のっぺらぼう。ぺらぺら。ひらひら。はっぱ。ことのはし。もの、こと、ありよう、みさかいなくはりつく。もっとも、はりつけるのは、ひと。おととして、こえとして、はなち、はなすのも、ひと。もんじとして、しるしとして、かき、ひっかき、ぬり、こすりつけるのも、ひと。なぞり、えがき、ほりきざむのも、ひと。このほしでひとがきえても、きずあととして、のこる。いしころのように、ものとしてのこる。

＊

のっぺらぼう。ななし。おと、こえ、かたち、もんよう。よむのは、ひと。うたうのは、ひと。ことこまかに、ことわけするのも、おそらく、ひとだけ。げんかい、幻界、言界。おなじ、おと。そうよむのは、ひと。おなじ、おと。おそらく、おなじおもい。すくなくとも、ちかいおもい。そのあわいはあわい。だから、おもいはおもい。さまざまなおもいが、おなじおとにかさなる。おびただしい、おもいとおとが、かさなりあう。だから、おもい。

＊

のっぺらぼう。ぺらぺら。べらべら。さわがしい。やかましい。だが、おそらく、おとなしが、まこと。だから、つまるところは、おなじ。おとなし、おんなし、おんなじ、お

なじ、とずらす。これ、でまかせ。しゃれ、じゃれ、ざれ、ざれごと、たわごと、かたこと、ところがす。ころがる、たま。たまたま、たま。たまをころがす。じびきにたより、からことばのちからをかりて、ころがす。げん・幻・言・現・限・原・源・元・Gen・眼・弦・減・絃——。ま・真・眞・間・魔・麻・摩・目・身・ma——。やはり、おもい。まことのかたこと。かたことのまこと。ことたま。ことのはしに、たまをみいだし、はたらきかけられるのは、ひと。ひとりずもう。ひとりてんか。ひとりごと。ひとりわらい。ひとりしばい。ひとりじめ。このほしにすむいきものたちのなかで、ひとひとりだけ。

＊

ことばは、すじ。くせもある。うろうろ、おろおろ。なまり、ころがり、うつろい、ふみはずし、ずれる、いや、ずれまくる。ずれることこそがつとめのように、ことばは、ずれる。おもいとことばは、ずれている。どうしようもなく、ずれている。なぜだろう。どういうわけか、ひとは、ずれた。さるから、はずれた。あたまのなかで、なにかがずれたというはなしもある。ひとにひとしくそなわっている、といわれている、ことば。ひとをまねるかのように、ことばは、ずれる。ずれまくる。

＊

ことばは、おもいをうつす。おもいも、ことばをうつす。つねに、ゆれ、ゆがみ、ずれながら、うつし、うつり、うつろう。それでいて、ことばは、まこととまっとうさをめざす。ところが、ことばは、まことはいうまでもなく、ほんものにも、にせものにも、まがいものにすら、なりそこねる。ひとのおもわくや、たくらみや、いのりや、ねがいをよそに、ことばはなにかのかわりとして、ある。というか、なにかのかわりとしてしか、ない。せめて、こういいたい。けなげに、なにかのかわりをつとめるのだと。いとしい。

＊

ことばは、いとしい。みからでたもの。もとは、いき。いきるのいき。かく、きざむ、ぬる、しるす、つづる。もんじは、あとのはなし。もとは、あなからでるもの。あかんぼうや、うんちのごとく、ことのはは、いとしい。どれも、いきんで、あなからだすもの。あなどれない。だからこそ、いとしい。でたあとは、はなれる。かなしい。だが、なにかにはたらきかける。ちからをおよぼす。うごきをさそう。とはいえ、うごくのは、ひと。うれえぬわけにはいかない。このほしのいのちと、ゆくすえさえも、ひとのはく、ことばのちからにかかっている。ひと。ずれた、さる。はずれた、さる。くるえる、さる。むごい、さる。あやうい、さる。むやみにあやめる、さる。おやまの、さる。

＊

はなに、ことばありき。はなに、ずれありき。すべては、そこからはじまった。ことのは。ことのはし。ことのはじまり。

◆

以下は、10 の「げん」の見取り図です。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
＝ 7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
＝ 8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
＝ 9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・輪・和・わ」
＝ 10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

◆

**「うつせみのたわごと-6-」（全 14 回）**

　できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

　ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

　以上の３つの方法を試しています。

＊

　今回のテーマは、「言葉・げん・言」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「言界」です。言葉が代理でしかないこと、ヒトには言語を習得する先天的な能力が備わっているらしいこと、言葉はヒトの思いや感情の表出や伝達を担っていること、言葉がヒトの知の体系をつくり上げる支えとなってきたこと、について論じています。

（こうしたことがらを、大和言葉を多用しながら平仮名だけで記述する場合と、そうした語の使い方によらない書き方をした場合とを比較すると、つづる形態がつづられる内容に大きな影響を及ぼすことがよく分かる。そんな気がしました。簡単に言うと、書き方が書く内容を左右するということです。）

　標準的な表記に直したキーワードは、「のっぺらぼう」「事の端・言の端・言の葉」「言霊」「思いは重い」「ひとり言」「すじ」「ずれ」「うつす・写す・移す・映す」「息・生きる・息る」「出る」です。

直接書かなかったキーワードは、「表象」「代理」「ニュートラル・匿名性」「ノーム・チョムスキー」「言語能力・competence」「経路」「ミメーシス」「コミュニケーション」「ヒトの言語獲得」です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」『フィネガンズ・ウェイク』「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel（邦訳：バベルの後に)』「ピジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.07　うつせみのたわごと-6-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

# 2人のゲンちゃん

＊

ところで、唯〇論って、ありますね。で、思い出したのですけど、唯幻論と唯言論とのあいだで論争があったとか、なかったとか、そんな話がありました。昔の話です。いわば、ゲンちゃんとゲンちゃんとの喧嘩です。

声に出せば、同じ「ゲンちゃん」なんだから、それに、両方とも結局は同じことなんだから、喧嘩はやめましょう。当時、そう思ったことも思い出しました。

ゲンちゃん同士の喧嘩がどういう内容だったかは忘れましたが、言と幻が材料なら、こんな話になりうるという横着な乗りで勝手に考えてみます。

＊

まず、「言は、物=物質=具体的」vs.「幻は、現象 or 意識=こと=抽象的」と図式的に処理しておきます。

蛇足とは思いますが、誤解を避けるために申し添えますが、言=言語=言葉は、話し言葉=音声=空気の振動、書き言葉=文字 or 活字=刻んだり引っ掻いた跡 or インクのかすなど、という具体的な物質です。

したがって、知覚の対象になります。見たり鼓膜を振動させたり触ったりできない、意味やメッセージのことではありませんので、よろしくご理解とご了承をお願いいたします。なお、意味やメッセージは、むしろ幻さんの担当のようです。

ここで、視点=支点という点を考慮しなければなりません。最初から、どちらかに加担=支持=配慮する形になっては、２人のゲンちゃんが、ひがんで腹を立てますので、公平にいきましょう。

「言から見れば=言に重点を置けば、すべては言=言語=言葉である」となり、「幻から見れば=幻に重点を置けば、すべては幻=幻想=まぼろしである」となります。

＊

で、言が、特権的=メタな立場にある、根拠=基盤=背景=理由として、ヒトは広義の言語=言葉でしか関係を築けないし、言葉によってしか知を継承できないという説=フィクション=イメージ=物語があります。

一方、幻が、特権的＝メタな立場にある、根拠=基盤=背景=理由として、ヒトはしょせん本能が壊れた生き物なのだから「狂え！　狂え！」という説=フィクション=イメージ=物語があります。

さて、いま、上で並べた２つの文章ですが、同じことを言っています。意識的に=故意に、同じことを言わせた、同じことを書いた、やらせだ、出来レースだ、八百長だ、とも言えます。何とでも言えます。

いずれにせよ、両者が同じことを言っているというのが顕著にあらわれている個所は、「ヒトは広義の「言語=言葉」でしか関係を築けない」＝「ヒトは本能が壊れた生き物だ」です。

ヒトにおける、言語の存在＝本能の壊れと単純化すると分かりやすいと思います。あとは、いわゆる、「卵が先か、にわとりが先か」の問題ですが、「言語の存在=本能の壊れ」のどちらが先かは検証も実証もできないし、結論も出ない点は大切だと思います。

２人のゲンちゃんをめぐる喧嘩の仲裁は、以上です。

＊

"唯*論" でネット検索してみると、たくさんの唯〇論があります。その中で以前に聞いたり見たことがあるものを個別に見てみたのですが、仮想敵があるのではないかと感じられる唯〇論が多いようです。

唯〇論対唯△論とは限りませんが、何かを敵（かたき）にして論を張っているという感じで、ほのめかしや当てこすりが透けて見えるのです。さらに興味深いのは、その仮想敵と推測できる「何らかの論」と、その論がよく似ていたり、ほぼ同じではないかと感じられることです。

「唯」という大げさな言葉をつかいながら、意外と局所的な不満や批判ややっかみ、あるいは近親憎悪から生まれているのではないか。そんな気がしました。今回の 2 人のゲンちゃんの喧嘩も、そうした文脈で読めそうです。

# げん・現（うつせみのたわごと-7-）

＊

げん――。きになることば。からからきた、ことば。からから、ものやことがはいり、そととうちがまじり、いまのゆたかさがある。よそものをしめだす。よそものをいれない。よそものをかえりみない。おもいやらない。そんなくにが、このさき、さかえるわけがない。そとのかたきとにた、うちなるかたきが、そとをにくめとそそのかす。にたものは、にくみあう。そっくりは、なお、にくみあう。それがうつつか。ひとのよか。あきらめよ、というのか。

＊

げん・現。げんかい・現界。うつつ。うつせみ。ゆめからさめても、ひとはゆめうつつ。うつうつ。うつらうつら。うとうと。ゆめとうつつのあわいにあるのが、ひとのおもい。ひとのこころ。ひのもとでも、やみはさらない。よい、まよいは、きえない。

＊

めざめる。めをさます。さとる。さととる。さ、ありととる。そうであるととる。これ、でまかせ。さもありなん、とおもうだけ。さもあればあれ、いなおるだけ。さもあれ、さとる。なんと、えらそうなことば。ゆめつつ。それで、いいではないか。やまにこもる。ひをたく。けものみちをあるく。みずをあびる。だまり、ただすわりつづける。なんとみがってな。ひとりしばい。おのれだけ、すくわれようとする。あさましい。さとにおりれば、することはやまほどあるのに。すくいをもとめているひとたちが、たくさんいるのに。にせひじり。ひじり。ひをしるひと。えらそうなことば。ありえない。うそっぱち。いかにも、ひとのかんがえそうな、ことのは。ことのはし。かたこと。

＊

げんかい、幻界、言界、現界。さかいはない。へだたりはない。かさなりあい、からみあい、そのあわいはあわい。いまここにあるのは、ことのは。ことのはし。現とうつつ。からことばとやまとことば。そのあわいはあわい。なつかしさは、そのひとのうまれと、

そだちからおこる。うえもしたもない。ことばはならぶ。ならんでいるだけ。つづるもの。よむもの。そのあわいもあわい。げん、げん、げん。まぼろし、ことのは、うつつ。幻、言、現。ならんでいるだけ。わけるのは、ひと。ひとがいて、はじめて、わけがある。

＊

うつをうつ。打つを打つ。全をうつ。空をうつ。虚をうつ。鬱をうつ。うつつ。打つ。撃つ。討つ。棄つ。うつつ。打棄つ。でじゃびゅ。déjà vu。あ、みたことがある。あ、きいたことがある。あ、ふれたことがある。あ、かいだことがある。あ、きいたことがある。あ、このおもい、はじめてではない。ぼん、ぼん。とん、とん。がん、がん。うつ、うつ。からだはから。うてばひびく、うつろなから。にく、ち、ほね、ふしぶし。はだ、すなわち、かわをのこせば、からだはからだ。かわをはった、うつわとおなじ。うてば、ぽん、ぽん。おとがする。かいのから。せみのから。へびのから。たましいのぬけがら。からをうつ。うつをうつ。どこかで、みみにしたことのあるおと。なつかしいおと。ははのはらのなかで、きいたおとか。まさか。まさに、ゆめうつつ。うつうつ、うつつ。それにしても、ここちよい、ひびき。めをとじ、ききいる。めざめは、いらない。さとりなど、いらない。わけも、いらない。

＊

ふし。からだをつなぐふし。からだをくぎるふし。まをへだてるふし。ふしがながれる。うたがながれる。となえる。よむ。からをふきぬける、かぜ。こまかにふるえる、から。ぼん、ぼん。ぽん、ぽん。とん、とん。がん、がん。うつ、うつ。からだはから。うてばひびく、うつろなから。ちは、なみうつ。にくは、ふるえる。ほねは、きしむ。ふしぶしに、おととなみが、はしる。いきも、ふし。ふーっと、ふく。いきる。いきをあわせて、ふしがなみうつ。それがからだ。いきている、あかし。うつつ。うつうつ。

＊

ま。まー。ma。am。om。あーむ。おーむ。あうん。あくび。まーと、くちをあけ、うまれる。あーむと、くちをとじ、なくなる。それが、うつせみのよ。よわいうつせみの、よわい。あくび。ゆめうつつのあわいでの、なくなるまね。しにまね。かりのし。ねむり。ねむい。ねむる。めをつむる。しにまね。まばたき。またたくまの、しにまね。まぶた。まのふた。まなこをおおう、まなぶた。あくび、まばたき、ねむり。ひびくりかえす、かりのし。そのあわいでみる、ゆめ、おもい。

＊

ねむる。かりのし。ゆめをみる。めざめる。よあけ。あさ。あらたなうつつの、はじまり。よみがえる。よみからかえる。やみからかえる。やみはおそろしい。こわい。ひのもとにも、やみがある。ひのかげにも、やみがある。いきていくみちにも、やみがある。なやみ、やまい、くるしみ。おもい、わずらう。ならば、うたおう。なつかしいおととふしを、おもいだし、うたおう。うつせみのように。うたが、とわにながれる、としんじ、ふしをつけて、うたおう。うたう。うたあう。うちあう。それだけが、うつつ。うたおう。はなうたでもいい。おとが、はずれていてもいい。なかみなど、かんがえずに。ふしとひびきに、みをまかせ、いきのあるかぎり、うたおう。それが、うつつ。からだをはっての、ゆめうつつのあかし。

＊

ゆめうつつというが、ゆめもうつつも、ひとのおもいのうちにあるかぎり、わけめ、わかれめがあるはず。ことわけ、わけるは、ひとのくせ。さが。うつつは、ないものやないことを、あるとしんじるところ。ゆめのなかでは、しんじるものもこともない。あるという、おもいだけがあるところ。ゆめは、まぼろし。ひたすら、あるとしんじる、ねんじる、いのる、のぞむ、ほっする、ねがう。そのかなたにあるところ。そこがゆめ。そこが、うつつとことなるところ。おそらく。きっと。

＊

ひたすら、あるとしんじる、ねんじる。これが、うつつにあるあかし。しるし。ゆめは、しんじるのかなたにある。うつつでは、ひとは、わかろう、しろうと、いのちをかける。よをわたるすべ。かせぐすべ。しあわせをてにする、すべ。さいわいをひきよせる、すべ。うでやちからをみにつける、すべ。はうつー、はうつう、うつうつ。しかた、やりかた、てだて、すべ。すべすべ。すべからく、まなぶべし。べしべし。わがみに、むちうつ。いそがし。

＊

いまのはやり。あたまのなかと、かつすべ。あたまのかわとほねをもぎとり、あはあ、わかったとさけぶ。それをつづる。よにだせば、うれる。もうかる。もうかれば、さらにもうけたい。だから、わかったとさけびながら、ぼける。おさめるべきものをわすれるほどの、まぬけぶり。ぼけとたわけは、かおだけにしてくれ。かつまた、はったりをきかす。それをつづる。よにだせば、これまた、うれる。さらにつづらせたい、まわりのや

からが、ちやほやほめそやす。そんなわけで、しげるきぎのごとく、ことのはのかずかずを、かきちらす。なんとでもいえるのが、ことのは。はったりにはったりをかさねる。そうしてみせにならぶ、かきもののかずかず。かずかずよもすえ。いや、かずかずよもつづくか。つぎは、きれいがいのち、とか。

＊

すべてがはったり。でまかせ。よせあつめ、うつし、まねて、すこしかえて、それをおのれのうんだものだと、はったりをいう。からことばのかきものを、ひとにめいじて、このくにのことばになおさせ、おのれがなおしたと、はったりをいう。そうやって、おおくかいたものの、かち。まともによみ、うけとったものの、まけ。ほねおりぞんの、くたびれまけ。もうけなし。あげくは、がんばりすぎて、うつ。うつうつ、うつつ。こう、やまをかけてでてきたのが、ぎしぎし、ぎすぎす、はぎしりか。うふうふ。とはいえ、がんばらずがんばるとは、わざなし。どこかできいたはなしの、むしかえし。うらで、かつまたてをむすび、もうけにあずかる、ちゃっかりか。しらぬは、なみのひとびとなり。いや、うすうすしっても、しんじない。しんじるのが、らく。しんじれば、すくわれる。あしも、すくわれる。あたまのなかも、すくわれる。からより、ましか。

＊

ひたすら、あるとしんじる、ねんじる、いのる、のぞむ、ほっする、ねがう。それがうつつ。うつせみのよ。だから、ことのはにつられて、かりのもの、にせものをほんものとみまちがい、はったりとくちぐせを、まにうけて、よむ。でるから、よむ。きりなく、よむ。うつつをぬかし、よむ。けれども、うまくはいかないのが、よのつね。がんばりすぎたあげくに、うつせみのから。もぬけのから。なかみなし。いまは、おもいおもいは、はやらない。なかみのないかきものほど、きりなく、あきなく、うれる。だから、またかく。うつつをぬかし、かきちらす。かきなぐる。こんなにいい、あきないはない。これこそ、まことのうつつのありよう。このたぐいのかきものこそが、まぼろしとことわりにみちたうつつを、うつすかがみなり。げんかい、幻界、言界、現界。ここでも、かさなる。さかいはない。そのあわいはあわい。

＊

おもいは、かなう。これが、かきもののひながた。つまるところ、こんだけー。わらいごとではない。ひとは、そうしんじる。こころより、しんじる。ねんじる。となえる。つづる。かなしき、いのり。むなしい、いのり。あわれ。それにつけこみ、あきないとするものが、いかにおおいことか。かみ、かみがみ、ほとけ、さとり、たま、あのよ、はった

りをつづったかきもの、いわしのあたま。あさましい。ひとは、いのるしかない。そこに、つけいる。かたる。おもいと、ことのはは、ゆめとうつつのかけはし。せめて、そう、しんじたい。だから、そう、ねんじる。となえる。つづる。それしか、ない。できれば、ひとりで、しんじよう。むれることなく、ねんじよう。にせものに、みつぐことなく、いのろう。ひとは、ひとりで、おのれをこえたものと、ことばをかわすべき。すくなくとも、このあほは、そうおもう。たわごとなり。

＊

うつつは、まことにあらず。うつせみは、まことにあらず。ひとのおもいのなかにあり。まことはかたこと。かたことはまこと。かたこと、かたこと、みずぐるまはまわる。ことこと、ことこと、かざぐるまはまわる。くるくる、きょろきょろ、ひとのまなこもまわる。おちつくところなし。おちつくわけなし。うつうつ、うつつ。あわいをうちうつ。あわいをうつつ。あわいをうつ。おとがする。ひびきあり。なつかしいふしがきこえる。うたおう。うつせみのうたを。

◆

以下は、10 の「げん」の見取り図です。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
＝ 7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
＝ 8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」

＝9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・輪・和・わ」
＝10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

◆

**「うつせみのたわごと-7-」（全 14 回）**

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

以上の３つの方法を試しています。

＊

今回のテーマは、「現実・げん・現」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「現界」です。
目覚めている状態、つまり意識が働いている状態と、夢を見ていたり、空想をしていたり、無意識でいる状態とを対比するのではなく、連続した帯＝濃淡＝階調として論じようとしています。
幻界、言界、現界が重なるものであるとも訴えています。また、瞑想などによって悟

りを得て自分だけが救われようする態度や、現実を生きるさいに、現在多くの人たちが指針としがちな自己啓発書を批判しています。

標準的な表記に直したキーワードは、「うつつ・現」「ゆめうつつ・夢現」「悟る」「救い」「あうん」「あくび」「歌う」「眠る」「仮の死」です。

直接書かなかったキーワードは、「om」「うつ病」「出版界」「マーケティング」「実用書」「処世術」「脳科学」『ブヴァールとペキュシェ』です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」『フィネガンズ・ウェイク』「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel（邦訳：バベルの後に)』「ピジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.08　うつせみのたわごと-7-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

# ３人のゲンちゃん

＊

ところで、唯〇論って、ありますね。で、思い出したのですけど、唯幻論と唯言論とのあいだで論争があったとか、なかったとか、そんな話がありました。昔の話です。いわば、ゲンちゃんとゲンちゃんとの喧嘩です。

みなさん、ここで、この記事のタイトルをご覧ください。「３人のゲンちゃん」となっています。そうです、ゲンちゃんは、もう１人いるのです。ひょっとすると、もっといるかもしれませんが、３人にとどめておきます。

では、ご紹介いたします。「唯現論のゲンちゃん」です。“唯現論” でネット検索すると、複数のゲンちゃんがヒットしますが、そのご使用中のゲンちゃんのことは存じません。世の中には、同名のヒトがたくさんいます。

ここでの、ゲンちゃんは、「げん・現・現実・事実・うつつ」という連鎖を信奉していまして、「言」と「幻」にならってフレーズ化しますと、「現から見れば=現に重点を置けば、すべては現=現実=「今、現に在る事実・状態」である」となります。

また、現が、特権的=メタな立場にある、根拠=基盤=背景=理由として、ヒトは現実に「現在する=現に存在する」事象以外を認識できないという説=フィクション=イメージ=物語がある、ともなります。

＊

で、この現ちゃんの意見ですが、言ちゃんと幻ちゃんの言っていることが同じなのと同じく、同じことを言っています。

いちばん大切だと思われる「ヒトは広義の「言語=言葉」でしか関係を築けない」=「ヒトは本能が壊れた生き物だ」=「ヒトは現実に「現存する=現に存在する」事象以外を認識できない」という部分が同じことを言っています。

さらに単純化すると、「言語の存在=本能の壊れ=現実の認識」は同義です。

「どこが同じなんだ？」「なぜ同義なんだ？」と疑問をいだいている方のために説明します。

３人のゲンちゃんは、「ヒトには、知覚、および、認識の両面において、限界=欠陥がある」と言っています。

言い換えると、「ヒトは、全知全能ではない。=ヒトには、出来ないことと、分からないことがたくさんある」、あるいは「ヒトは、この惑星に生息する一介の生き物にしかすぎない」と認めている点で、3 人の言っていることは同じだという意味です。

決定的に、同じなのは、

＊唯言論=唯幻論=唯現論が、どれも「ゆいげんろん」と読める。=３人とも、「ゲンちゃん」だ

という点です。

というのは、もちろん冗談でして、そうではなくて、

＊唯言論=唯幻論=唯現論が、どれも「唯〇論」である。
=３者とも、「ぜんぶ、私に任せなさい」「ぜんぶ、私が面倒見よう」と言っている。
=できもしないことを言っている。
=夢を語っている。
=希望を述べている

という点が同じです。

蛇足ですが、

＊すべてを「げん」に還元（かんげん）する（※「還元主義=　reductionism」の「還

元」です)。
＝すべてを「げん」で説明する

ことはできません。なぜなら、

＊たったいま、記述した立場=考え方は、言=言語だからであり、幻=幻想だからであり、現=現実だからである

からです。

＊問題は、「唯」と「すべて」にある。

と言えます。

＊「唯」と「すべて」は、肯定に見える=思えるが、実際には否定である。「唯」と「すべて」という言葉=イメージで、何かを特権化する=メタな立場に置く＝上位に置くという作業を行ったとたんに、ヒトは不可能性に直面している＝もてあそばれている

という事態に陥ることを、忘れてはならないと思います。早い話が、

＊「唯」と「すべて」という言葉=イメージは、「ヒトにとって荷が重すぎる」＝「ヒトには扱えない」

ということです。

＊

　ここで飛躍しますが、だからこそ、

＊ヒトは、必死で記述する。＝記述するしか方法がない。＝記述することで自らの「無力＝無能＝敗北」を認めている。

のです。

　万が一、ヒトが全能に近い存在であれば、記述などという、まどろこしい＝ほぼ愚かな作業に、没頭＝熱中しない、とも言えます。ヒトが血道を上げている

＊記述とは、既述であり、奇術もしくは詭術でもある。

なんてなかななか言えていますよね。

したがって、メタな立場にたつ＝この惑星の王者を気取るなんて、10 年早いどころか、100 万年早いと言ったとしても、言い過ぎ or 言い足りない、と言えそうです。

＊

とはいうものの、３人のゲンちゃんは、全知全能ではぜんぜんなく、「ぜんぶ、私に任せなさい」「ぜんぶ、私が面倒見よう」という立場には全然ないにもかかわらず、それなりに有効性=効果=影響力を備えていて、ヒトびとのためになっていることは確かです。

誰がいちばん偉いかなんて考えることはありません。それぞれの活躍の場はあるわけです。

それはさておき、現実問題として、要は、ヒトは生きていくうえで、自分にとって「気持ちいい＝快である」ゲンちゃんと付き合えばいい、のです。ただし、

＊「唯〇論」の、「唯」は外しましょう。「〇論」だけで、いいじゃありませんか。

そうすれば、唯言論、唯幻論、唯現論、が全部、「げんろん」となります。「げんろんの自由」は保障されています（※公平を期するために、あえて「言論の自由」とは記述しませんでした。気遣いと気配りが何よりも大切でございます）。

# げん・限（うつせみのたわごと-8-）

＊

げん──。きになることば。からからきた、ことば。から、とおく、はて、はし、はしっこ、かぎり。よそやそととであう、ば。それが、さかい。さかいめ。わかれめ。きわ。へり。ふち。しきり。いま、このくには、さかいを、あたかもないものとしてみなそうとしている、くうきにみちている。あやういぞ。われ、くにを、うれえる。そういうひとたちにかぎって、よそをかえりみようとしない。それこそ、あやうい。うれえるにあたいする。

＊

げん・限。げんかい・限界。うち、そと、さかい。ひとはわける。せんをひく。なわをはる。つちをなづける。しる。ここは、わたしのもの。これは、わたしのもの。あれも、あそこも、それも、そこも、どこもかしこも、なんでもかんでも、わたしのもの。ここ、そこ、あそこ、どこも。こそあどことば。かぎりをしらない。いや、かぎりをしる、領るというべきか。いや、むしろ、かぎりをしるす、というべき。きりをしるす、というべき。きりがない。このほしの、そとにまで、なかまをおくりこむ。そのかぎりにおいて、ひとはずれている。ずれまくっている。

＊

わかる、わからないは、わく。わくぐみ。わくにきづくものもいれば、きづかないものもいる。また、きづくときもあれば、きづかないときもある。わくにきづいたときには、おもいのままにならない、おのれのみをなげく。きづかないときには、おのれのちからに、よいしれる。このほしをおさめているのはひとだと、おもいこむものもおおい。しる、しるす、そして、わける、わかる。わかるがきわまると、ひとは、そうしたおごりにいたる。

＊

わくにしばられていないものはいない。くさき、けもの、いしころ、そらのくも、か

わのみず――。すべてが、わくにしばられ、かぎりのこちらがわにあり、さかいをこえることはない。ひとは、ことばをえたことにより、さかい、かぎり、あわい、はし、ふちという、ことのはをおもうようになった。そうしたおもいをいだき、あたりをみまわすとき、ひとはことのはのさししめすものを、うごかせるとおもいこむ。おもいのままになると、おもいこむ。ことのはが、それがさししめすもののかわりであることをわすれる。ものやことやさまと、ことのはとを、とりちがえる。そのおもいこみと、わすれは、ねぶかい。それも、ひとのかかえる、わくにほかならない。ひとは、もはや、えらぶことのできないわなに、おちいっている。そのありように、おもいをめぐらすものもいる。だが、こころにかけないもののほうが、おおいだろう。

＊

もうひとつ、わながある。ことのはは、ものやことやさまのかずに、おいつけないという、かぎりがあること。ことのはは、つねにたりない。つまり、はてがある。たりないのはあたりまえ。ひとがわけるからにほかならない。わけて、わけまくれば、それだけなまえがいる。ことのはがいる。しるため、しるすため、わかるためには、ことのはがいる。はてしなくわけつづければ、ことのはのかずがおいつくわけがない。ひとは、わすれやすい。おぼえるにも、かぎりがある。わすれる。わすれると、へる。はてしなく、へる。へりにへる。だから、ひとはつねにへりにいる。いくらわけてもおいつかない、わかりえない、へりにいる。へりくつ。だじゃれ。たわごと。

＊

わく。わくぐみ。ありとあらゆるいきものは、わくぐみのなかでいきている。からだのなかもわく。からだのそともわく。からだのからもわく。ひとも、おなじ。ひとのおもいもわく。おもわず、わく。おもわく。すべてのわくぐみは、うつりかわるのがつね。おそらく、ひとは、おのれのわくをずらすことができる。みずから、わくをずらすことができる。たとえば、おもいのわくをずらす。すると、それまでみえなかったものやさまが、みえるようになることがある。みえないこともある。それがわく。おもわくははずれるもの。わくはずれるもの。

＊

いま、このたわごとをつづっているあほ。このあほも、わくをずらそうとしている。だから、あやしげなやまことばづくしのかきものをつづっている。つづることのはの、わくをずらす。あさはかな、たくらみ。たわけた、こころみ。あほが、あほなりに、こころをこめてつづっている。わかっていただければ、さいわい。からことばのかわりに、でき

るかぎり、やまとことばをもちいようとつとめる。これは、たくらみ。うちのことばにあらがいつつ、さからいつつ、つづる。いいかえるなら、うちのことばのわくのなかで、そとのことばでかたる。ややこしい。やまとことばのわくのなかで、からことばでかたるということではない。そんなこと、できっこない。うちというわくのなかで、そのわくをずらし、そとというわくをくみたてる、とでもいおうか。うちのなかのそと。へりとも、いえるかもしれない。

＊

ひらがなづくしも、あほのたくらみ。おなじおとをもちいた、だじゃれも、あほのくわだて。いくとおりにもとれる、あついかきものをよむことの、あつみ。おもいことのはの、おもみ。おもいおもいの、おもみ。そうした、いくえにもかさなった、ことのはっぱの、あつみとおもみのありさまを、ことのはにまってもらい、おどってもらう。それを、よむひとに、あたまだけではなく、からだで、あじわってもらいたい。あたまだけでなく、からだで、しってもらいたい。こころに、おもいうかべてもらいたい。ひそやかな、ねがい。

＊

ものをかくことは、かけ、つまり、さいころをふるのとおなじ、ばくちである。かかれたもの。かけたもの。かけられたもの。かけられたものをよんだときに、どんなめがでるか、わかったものではないことを、よむひとにかんじとってもらいたい。かけばよめる、よめばわかるという、うそっぱちにゆさぶりをかけたい。これも、かけ。ばくち。むちゃな、かけ。あさはかな、くわだて。おろかな、ねがい。ともかく、やってみる。やるっきゃない。だから、たわごとをつづりつつ、ことばのわくを、ずらす。それにつられて、よみのわくと、おもいのわくも、ずれるのではなかろうか。あさはかな、たくらみ。ひとりよがり。ひとりずもう。だが、ほんき。ほんきだから、なおあやうい。

＊

そと、うち、へり。ことわけはできるが、それらのあわいはあわい。すべてがへりだと、かんがえるべきではなかろうか。うちとおもっているものが、そとにみえる。そととみえるものが、うちにおもえる。すべては、ふち、へり、きわ、あわいにあるのではなかろうか。くりかえすが、そと、うち、へりと、ことわりはできる。とはいえ、あくまでも、ひとのくせ。ひとのすじ。おそらく、ひとにしかわからないもの。ねこにはねこのわけかたがある。うおにはうおのわけかたがある。とりにはとりのわけかたがある。どれがただしいというはなしではない。というわけで、すべてはへりだとおもう。これ、こ

とわりなり。ひとは、ひとのわくからでることなどできない。だから、へりにある。それしか、いえない。

＊

よそとうちは、まがい。がせ。もの、こと、さま、すべては、へりにあるというのが、まことにちかいのではないか。へり、ふち。がけっぷち。あわい、あやうい、あぶなっかしい、はらはら、どきどき、ゆらぐ、まよう、あてにならない、ごちゃごちゃ、ごちゃまぜ。まぼろし、ことのは、うつつ、ふち。幻界、言界、現界、限界。さだかなものなし、わけなし。

＊

わける。わかる。というか、わかったつもりになる。おもいこむ。いずれにせよ、ことわりは、すっきりしている。だが、ことわりは、どこかむなしい。なぜかむなしい。ひとであるかぎり、わけることなしには、いきられない。わけなしには、いきられない。いきにくい。それが、ひとのさが。ひとにとって、わけることこそが、らくないきかた。へりは、あらがいのば。たたかいのば。へりにみをおけば、いきにくい。いきがたい。かどがたつ。きわは、であいのば。なににであうか、わからないところ。おそろし。

＊

ふちにいれば、おちつくことなし。いごこち、わるし。だから、ひとは、そと、うち、きわとわける。わけて、かたる。そして、かたよる。よそ、なか、へりとわけて、かたる。そして、かたよる。とりわけ、よそとうちは、まがいくさい。かたり、だまし、なづけ、てなずける。かたって、こころのやすらぎをえる。だが、だからこそ、ひとはへりにあるといえる。ひとは、きわにいきる。きわどし。きわなし。はなしは、ここできわまる。ことのはは、なし。はなし。は、なし。はな、し。は、な、し。いくとおりにも、よめるし、よめない。たわける。たわけ。たわけごと。

＊

ことのはは、ことのはてにおいて、ひとのてから、はなれる。ひとが、はなしたのではない。かってに、はなれただけ。ことばは、ひとのしもべにあらず。げんかい、幻界、言界、現界、限界。いずれにおいても、ひとはあるじにあらず。おさにも、かしらにも、あらず。もてあそばれるだけ。あるじとおもいこむのは、ひとの、かって。くせ。さが。

＊

やまい、けが、わざわい、おい、あしこしのおとろえ、きのふさぎ。そうしたものにみまわれるとき、ひとは、かぎり、はて、おわり、すえをおもう。このよと、あのよとのさかいをおもう。ひとであることのわくをおもう。ふちにたち、おのれではない、ことやものやさまを、おもいやる。おもいをめぐらす。うつつ、ゆめうつつ、まぼろし、ことのは。幻界、言界、現界、限界。すべてがまじりあったなかで、ひとはとなえる。おそらく、なにかのなを、となえる。ふしをつけて、となえる。うたう。とりやむしやあかんぼうが、なくように。なく。うたう。まーあ。あーむ。そのこえも、やがてやむ。なぐ。なくなる。かたわらで、ほかのひとがつきそおうと、たったひとりで、なくなる。

＊

ひとがいるかぎり、かたることばがあるかぎり、ものがたりは、まだつづく。はてしなくつづくのではなく、はてまでつづく。やがて、このほしから、ひとびとのなきごえがやむ。うたがとぎれる。いきのねが、とだえる。なぐ。なくなる。みんなして。このままゆくかぎり、おそらく、いや、きっと、ひはかげる。そして、いなくなる。いま、ひとだけでなく、このほしのほかのいきものたちもふくめ、やみにもにた、こいかげりのもとで、みながへりにたっていないと、いいきれるものはいるだろうか。

◆

以下は、10 の「げん」の見取り図です。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」（うつせみのたわごと-7-）
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

＝7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
＝8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
＝9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・輪・和・わ」
＝10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

◆

**「うつせみのたわごと-8-」（全14回）**

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

以上の３つの方法を試しています。

＊

今回のテーマは、「かぎり・へり・げん・限」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「限界」です。ヒトをはじめ、あらゆる生き物は、それぞれに備わった枠の中で生きている。その枠組みを意識できるのは、おそらくヒトだけである。

しかし、ヒトを縛る枠は多種多様であり、それらの枠を意識することは難しい。枠はヒトを縛るが、枠をずらすことで、その縛りから一時的にでも逃れることが可能なのではないか。

外・内・へりという分け方は、うさん臭いものであるが、あえてその分類を受け入れるとすれば、ヒトはへりにいると言える。

以上のように要約できると思います。

標準的な表記に直したキーワードは、「線を引く」「縄を張る」「土地を名づける」「分ける」「名づける」「名が足りなくなる」「あわい・間」「境目」「言葉という枠」「体という枠」「種（しゅ）という枠」「書くという枠」「分かるという枠」「生死という枠」です。

直接書かなかったキーワードは、「近親憎悪」「狂気」「フリードリヒ・ニーチェ」「アントナン・アルトー」「ジェラール・ド・ネルヴァル」「フリードリヒ・ヘルダーリン」「フランツ・カフカ」「ジャック・デリダ」「ジル・ドゥルーズ」「ヒュー・ケナー」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.09　うつせみのたわごと-8-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

げん・原（うつせみのたわごと-9-）

＊

げん――。きになることば。からからきた、ことば。もとをただせば、おおきなりくからきた、ことのは。ところで、ことばのみなもとを、たどろうとするひとたちがいる。そうしたひとたちの、むれがいる。なぜか、むれると、わかれるとは、ちかい。ひとは、むれると、たちまち、わかれる。みなもとは、ここ。いや、みなもとはあっち。ここ。いや、むこう。なかたがい。どういうわけなのだろう。みなもとにしろ、えだわかれしたはしにしろ、よそではなくここだ、つまり、うちだ、というのは、ちがうと、このあほはおもう。うちもそともなく、どこもが、へり。しいて、わけることなし。ことなるものたちがであう、きわ。まじりあう、あわい。

＊

ちなみに、ここことは、このしまじまのことか。ひのでるもと。ひのもとのくに。それがいつのまにか、ひのいるくにのことばのよみで、よばれている。にっぽん。にほん。やまとにあらず。ややこし。やっぱり、へりではないか。ことなることのはたちが、あわいで、まじりあったにちがいない。いまある、このしまじまのもじのつくりとしくみをみるだけでも、あきらか。ごったまぜ。ほどくに、ほどけない。ゆたか、というひとたちもいる。それで、いいではないか。もと、つまり、うちのうち、なかのなかなどない。もどるところなどない。そもそも、もどるにもどれない、かえるにかえれない。それが、ひとのさが。

＊

ことばがえだわかれしていったという、ものがたりがある。おとずれたこともない、とおくに、おのれのはなすことばのみなもとがある。そこから、わかれて、ちっていった。ちるにつれて、であい、まじり、うつりかわっていった。どのことばにも、つきまとう、ものがたり。かたり。もどって、まことかどうかをしらべるすべはない。ときをさかのぼるのりものをまつしかない。ことばだけではない。おやのおや、そのまたおや。ちのすじや、ねっこをたどろうとする、ものがたりにも、ことかかない。みな、みなもとがきになるらしい。だが、もどれない。もどる、とは、もとほる、からきたかもしれないと、じびきにある。もとほるとは、なんのことか。ややこしい。このあほも、ひとのはし

くれ。もどるの、みなもとが、きになるが、やはり、わからずやのあほには、わからない。ほってもほっても、もとはほりだせない。ほっとけ、ほっとけ、ほうっておこう。

＊

げん・原。げんかい・原界。からことばを、ずらしてみよう。原、源、元。もじのはなつ、ちからをうけとめてみよう。もと、みなもと、本、基、原子、元素、根っこ、ルーツ、泉、湧く、わく、わくわく、出る、でるでる。これ、みんな、でまかせ。とはいうものの、いま、しているはなしは、でるという、うごきときりはなすわけにはいかない。こちらも、ずらしてみよう。でる。はらからでる。はらから。なかからでる。なかま。なかまはずれ。なかまわれ。うちからでる。みうち。あつまる。よる。みより。むれる。むれ。むれからでる。むらはちぶ。しっぽのないさるたちのなかまから、でる。さる。ひと。にんげん。にんじん。ずれる。はずれる。はみでる。いえからでる。いえで。いえでびと。さまよいびと。ながれもの。たびびと。たびあきんど。たびやくしゃ。しまながし。わたりもの。いっぴきおおかみ。みんな、でまかせ。それにしても、おもしろい。

＊

むれをでてからも、つながりをおもんじるものたちもいる。そうしたひとたちは、ふるさとをでたのちも、たすけあいながらいきる。ときおり、おおきなあつまり、よりあいをひらくこともある。いつのひか、ふるさとやむれにかえることを、ゆめみるものたちもいる。にしきをかざる、といういいかたが、ある。おちぶれてかえるわけには、いかないのか。でるとかえるは、ふかくむすびついている。でたものには、かえるというおもいが、つきまとっている。かえることはゆめであり、つねにいだいているまぼろしでもある。そうしたうつつのなかで、でたものたちはいきている。かえるをささえに、いきてゆく。ふちとへりをわたりつづけ、いつか、ふるさとやむれに、もどることをゆめみている。

＊

かえるというおもいなしに、ながれつづけるひとやむれもあるだろう。たびげいにんが、あたまにうかぶ。かつて、そうしたひとたちは、たずねるさきざきで、こどもにもおとなたちにも、わくわくしたきもちをわかせたのではないだろうか。まつり。はれのとき。ながれものたちが、どこからともなく、おとずれる。ながれつづけるたみのなかには、やむをえずふるさとをでることになった、とおいおやたちのものがたりを、かたりついでいるものもあるときく。いずれにせよ、あわれみをさそう。

＊

でたものは、うごきにうつり、いたるところにある、そととうちとのさかいをかきみだす。であう。にらむ。みつめあう。まじる。きそう。あらそう。あやめる。かえる。つくる。つくりかえる。ほろぼす。くずす。つぶす。ずらす。ゆがめる。こわす。うむ。うみだす。さる。とどまる。ことなるものは、よそものとなり、おとずれたところで、うごきをさそい、うごきをなす。そのさまは、さまざまだ。いずれにせよ、かきまぜる。かきまわす。幻界、言界、現界、限界、原界は、まじりあっている。せっしあっている。てあかのついたたとえだが、ひとはだれもが、たびびとだといえる。だれもが、ふちにあるともいえる。みなもとなし。みなが、界から界へとかってにゆききし、たびをつづける。おちつくこころなし。

＊

もと。ものやことが、おこるところ。きにたとえれば、ねっこにあたる。はら。いのちのめのやどるところ。ははのはら。はらからのでるところ。でるにまかせて、ずらしてみよう。はら。はらむ。のはら。しんのすけ。くさはら。かわはら。かわら。さいのかわら。さい。さいのめ。まらるめ。うなばら。こはま。おはま。おばま。はま。はまべ。うみ。うみは、このほしのいのちのみなもと、とならったことがある。うむうむ。うむ。うまれる。これ、でまかせ。だが、いえてるきがする。ははのはらのなかは、みずたまりとか。ちいさなうなばら、ではないかいのう。みずのなかでゆれる、いのちのめ。うつくしい、さま。うつくしい、まぼろし。およぐ、ちいさなちいさなこ。やがて、あなからでる。うまれる。おぎゃー。

＊

しをおもう。そのとき、ひとは、もとにかえるとかんがえる。たしかに、くちたからだは、つちにもどるらしい。それが、あらたないのちのもととなる。よくみききする、ものがたり。おそらく、そうなのだろう。しぬ。なくなる。もどる。かえる。また、うまれる。いないいないばあ。うまれかわる。いきかわり、しにかわる。いないいないばあ。でるときえるが、わをえがく。ぐるぐるまわる。めまいをさそうおもい。

＊

ひとは、なににうまれかわるのか。ひとは、ひととして、ふたたびうまれる。そうしんじて、うたがわないひとが、なんとおおいことか。なんとみがってな、かんがえなの

だろう。ひとは、そんなにえらいのか。ぐるぐるわっかごっこを、しんじないものとしては、あまりにもあさましいはなしに、あきれはててしまう。いきて、なお、またもや、もとをとりもどそうというのか。いやし。うまれかわるとしんじて、このよで、いやされたいのか。いやし。いじきたなし。よくぶかし。いまをしんじる。いまをいきる。それだけで、いいではないか。

◆

以下は、10 の「げん」の見取り図です。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」（うつせみのたわごと-7-）
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」（うつせみのたわごと-8-）
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
＝ 7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
＝ 8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
＝ 9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・輪・和・わ」
＝ 10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

◆

**「うつせみのたわごと-9-」（全 14 回）**

　できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

　ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

　以上の３つの方法を試しています。

＊

　今回のテーマは、「もと・はら・げん・原」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「原界」です。ヒトは何ごとについても、その始原を求めようとする傾向がある。それは、「戻る」「帰る」という運動へとヒトを誘う。

　源に帰ろうとするという動きの前提には、枝分かれしている形態の存在と、「出た」という過去の出来事が想定されています。「出る」「出た」は、流れる、移る、渡る、回るという運動の源です。動きと動くものとが、「出る」と「もと・はら」という場で重なります。もの、こと、さま、うごきが、重なる。それが「原界」ですが、「混沌」とも言えるでしょう。

　以上のように要約できると思います。個人的には、苦手な物語です。どうしても馴染めません。信じていないせいか笑ってしまうのです。この種の話とは相性が悪いのでしょう。

標準的な表記に直したキーワードは、「群れ・群れる」「分かれる・別れる」「親」「母」「子」「旅」「つながり」「はらむ・孕む」「産む」「生まれる」「海」「死」「生まれ変わる」「輪」「めまい」です。

直接書かなかったキーワードは、「うんち」「神話」「叙事詩」「経典」「聖典」「カール・グスタフ・ユング」「エミール・パンヴェニスト」「フェルディナン・ド・ソシュール」「インド・ヨーロッパ祖語」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.10　うつせみのたわごと-9-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

げん・Gen（うつせみのたわごと-10-）

＊

げん――。きになることば。からからきた、ことば。このしまじまの、にしどなりにある、りくのはしと、そのむこうにあるおおきなりく。そこより、ずっとはるかかなたにある、りく。さまざまなことばがあるなかで、Gen（※ドイツ語）とつづり、げんとよむことのはがある。もっとも、げーんと、のばして、くちにするのが、ただしいらしい。いのちのもとのこと。

＊

いきものをこまかく、さらにこまかく、わかていくと、げんとよばれるつぶがあるという。いきものを、きにたとえてみよう。みきがあり、おおきなえだがあり、ちいさなえだへとわかれていく。そのみきにも、えだにも、えだのさきにも、はっぱにも、はなにも、みにも、ちいさなつぶがやどる。つちのなかで、はっている、おおきなねにも、ちいなさなねにも、こまかなつぶがやどる。それぞれのつぶたちは、ほぼおなじ、げんからなりたっている。そんな、はなし。

＊

げん・Gen。げんかい・Gen 界。そこでは、わかれる、ふえる、うつす、つたわる、わたす、うむ、うまれる、でる、あらわれる、わく、がおこる。しくみは、うつすにあるという。うつしをつくる。そっくりをつくる。うつしまちがうことも、あるらしい。そんな、はなし。

＊

げんは、いのちのもと。ちいさなちいさな、めにみえないほどの、かすかなつぶをおもいうかべてみよう。まぼろし、ことのは、うつつ、ふち、みなもと。そして、もと。幻界、言界、現界、限界、原界、そして Gen 界。そのあわいはあわい。どれもが、ひとがつくった、ものがたり。ひとがおもいえがいた、こと、もの、さま。そとにありながら、うちにある。それがおもい。かたり。ことのはをもちいた、はなし。おそらく、ひとにし

か、つうじない、はなし。ねこには、つうじそうもない。かといって、ひとがえらいわけではないのは、いうまでもない。ひとは、わけるだけ。そんだけ。

＊

ひとはわける。わけてわかったと、おもいこむ。これが、ひとのくせ。くせもの。いのちさえも、ことこまかにわけ、わかりはじめたと、おもいこんでいる。いのちのつぶを、かぞえ、ときほぐし、よむ。いつか、すべてがわかると、しんじている。いのちさえも。ことさえも。ものさえも。さまさえも。このほしさえも。このほしの、そとさえも。

＊

わけるのは、ひとがちいさいからに、ほかならない。ちいさいから、わける。おおきなものは、みえない。おのれがちいさいから、みえないだけ。おのれがちいさいから、わけるだけ。それだけなのに、おもいちがいをしている。これを、かしこいとみるか、おろかとみるか。ひとそれぞれ。つねに、おごりたかぶるものもいれば、おそれつつしみ、かしこまるたちのものもいる。ひとそれぞれ。ひとのたちは、ときによる。ときとともに、かわることもある。おおむね、おろかで、おごりたかぶる。それが、ひと。くせ。たち。すじ。そうしたものまで、げんがきめるのだという。そんな、はなしもある。

＊

ちいさくしてみて、みえたとおもいこむ。おのれがおおきいとおもえば、ちいさなものを、あなどることができる。みくびることができる。みくだす。みきわめたと、おもいこむ。そのくせ、おおくのひとは、いまだに、かみをしんじるという。にまいじた。うそつき。あしき、くせ。こころのうちでは、このほしをおさめる、おおかみだとおもっているくせに。おもいと、おこないが、おおきくずれている。くせもの。

＊

いのちのつぶのものがたりに、みみをかたむけてみよう。あくまでも、かたりだということを、わすれないようにして。きくところによると、いのちのつぶは、ながいながいおびを、ねじったごときかたちをしているとか。そのしくみのかなめは、うつす、うつる、ふえる、つたえる、らしい。ない、から、ある、はうまれない。とどのつまりは、あるものを、うつすのが、うむ、うまれる、ということか。おや、つまり、ちちははから、こどもへと、うつしたものが、つたわる、ということか。ややこしい。わずらわしい。

＊

すなおに、なるほどうんうんとうなずけない、へそまがり、つむじまがり。このたわごとをつづる、あほも、そのひとり。おつむがまがっているから、いたしかたなし。かたなし。よくできたはなしだと、よくできたものがたりだと、にがわらいするのが、せいぜい。とはいえ、いのちのすじの、しくみをときほぐすわざ、などといわれれば、かしこまってしまう。やまいをなおし、ゆたかなみのりを、てにするすべ、などといわれれば、おそれいってしまう。ねじれにねじれたしくみを、ほぐしまくる。どんなに、ときほぐしたところで、ほぐしきれるたぐいのはなしとは、おもえないのだが。ひと、それぞれ。

＊

なおしたい。なおりたい。ながくいかせたい。ながくいきたい。もっとふやしたい。もっとふえたい。もっとさかえたい。そのためだけではないが、さかりたい。ひとには、つねにさかるという、めずらしいくせがある。ほかのいきものにはみられない、すじがある。このほしには、もううけいれないほどのかずの、ひとがいる。それなのに、まだふえつづけている。よいわるいのはなしではない。おそらく。

＊

ふえる。ふやしたい。もっと、もちたい。もっと、ゆたかになりたい。さきに、ゆたかになったものたちのあとをおう、あらたにさかえつつあるくにぐに、ひとたちがいる。それにしても、ひとはふえすぎた。このほしにあるものが、すべてのひとたちに、ゆきとどかない。まずしきものと、とめるものとのさが、ひらきすぎた。このほしにあるくにぐにから、ひとがあつまり、はなしあう。はなしあいは、まとまらない。だれもが、おのれとおのれのなかまや、はらからが、かわいい。いとおしい。こたえはでない。

＊

まぼろしがふえる、ことのはもふえる、うつつもふえる、さかいめもふえる、みなもともふえる。そして、ふえるのつぶのときがきた、という。幻界、言界、現界、限界、原界、そして、Gen 界。どれもが、にている。ほぼおなじ。ふえる、ます、うむ、でる、わく。そうした、うごきとゆらぎが、あるのみ。おおいなる、うごきのくさり。おおいなる、ゆらぎのわ。

＊

ひとは、かわす。ものとものをかわすが、はじまりだったとか。いまでは、もの、ひと、はたらきを、かわす。えっ、このみ。とっ、れいど。まー、けつと。からことばなり。ひとのよは、かわすにみちている。かわすのもとにあるのは、おもみ、ねうち、あたい。おもみ、しますか。ねぇ、うち、きらいなの。あたい、きらいなの。それでは、すまない。

＊

おもみは、おもうからきたというはなしがある。と、じびきは、いう。おもい、おもみ。どう、つながるのか。また、おも、つまり、つらからきたという、はなしもある。つらは、かわ。ねこのまなこのごとくかわる、かりそめのかおのさま、いいかえれば、かわり。ばけること。かおにつける、おもてがた。からことばで、ますくというとか。かの、つたんかめんの、ですますくの、ますくとおなじです。いずれにせよ、なにかのかわりになにかでないものをもちいる、につうじる。かわりのしくみに、にている。おもい、おもみ。おもしろし。これが、でまかせとすれば、おどろくべき、でたらめ。おどろくべき、であい。おどろくべき、たまたま。おそるべし。

＊

すべては、かわりが、かわりのさししめすものの、かわりであることから、くる。なにかと、そのかわりとのあいだには、なんのかかわりもない。きまぐれ。なにかがありそうにみえるとしたら、まぐれ。きまま。ままならぬ。おもみ、あたい、ねうちも、おなじ。ままならぬ。ひとは、もてあそばれるだけ。

＊

かわすと、ふやすは、ちかい。ちかくみえる、というべきか。からみあっている、ともいえそう。ふやしたい。もっともっと、ふやしたい。あれがほしい。これがほしい。そのためには、おもみのかわり、つまり、かねがいる。かね。まね。まに。まねまねまね、まね。まねすんな。まにまに、まに。まにうけるな。かわりゆえに、まにうけるなといわれても、かねはほしい。とみを、えたい。だれしも、そうおもう。このあほも、そうおもう。おもみはおもい。かねなしでは、くえない。うえじにするだけ。ねこにも、くわせられない。

＊

もの、ひと、はたらきのあたい。おもみ。おもみは、ひとのおもいにある。おもいはかわる。めまぐるしく、かわる。ひとのよには、おびただしいかずの、いちばがある。というか、つくられた。できちゃったものは、しかたがない。かねのおもみ。とみのおもみ。なにかのかわりのもののおもみ。そのおもみとながれが、くるう。もとのしくみが、きまぐれで、きままだから、いたしかたなし。いま、はじまったことではない。

＊

くるいは、ひとが、かわしはじめたときに、はじまった。ふえるはずが、へる。へるはずが、ふえる。ふえるふえるが、へるへる。ごーつーへる。おーまいがっ。からことばの、ののしりなり。ふえるとへるの、あわいが、ますますあわくなってきたかのごとくみえる。そう、みえるだけ。みえるのは、ひとだけ。かわり、にせもの、おもてがたが、みだれまう。ひとがつくったものが、ひとのてからはなれて、まい、さまよう。とばっちりは、ほかのいきものにも、およぶ。あなどれない。

＊

おもみは、あわい。おもみは、はかない。おもみは、あてにならない。なぜなら、おもみはおもいだから。おもいえがくことしか、できないものだから。えにかいたもち、だから。それも、よってたかって、みんながかってに、ふでをだして、かきかえるもちだから。ほしい。もっとほしい。ふやしたい。もっとふやしたい。おもみのしくみにとりつかれた、ひと。いまでは、そのしくみが、ひとのいとなみすべての、もとにある。そのしくみにもてあそばれて、ひとはうごいている。ひとがつくった、ありとあらゆる、もの、こと、さま、はたらきを、うごかしている。ああ、なんたるおもいちがい。もとにもどせない、おおちょんぼ。

＊

ふえるはず。おおきくなるはず。そういうしくみだったはずなのに、そうはなっていない。そんなしくみをつくってしまった。これもまた、しっぽのないさるからひとになったときの、あたまのなかでおこったという、ずれのせいなのか。へだたったものをちかくにみせる、しくみ。なにかのかわりになにかでないものをもちいる、かわりのしくみ。ふえるはずのものがふえたりへったりする、おもみのしくみ。これらは、ひとがつくったというより、なぜか、てにしてしまった、みにそなわってしまった、とかんがえるべきなのか。もしも、そうであれば、ひくにひかれず、もとにはもどれない。ひとのくせ。

さが。さかなに、おかをあるけと、いうのとおなじ。どうしようもない。

＊

いま、おおごとなのが、かわり、にせもの、おもてがたの、おおぐるい。だれかが、なにかに、しくんだらしい。どくまんじゅう。さぶ、ぷらい、む。からことばなり。おかわりをかえせないものに、おかわりをかした。もとは、そんだけー。どくまんじゅう。どくはまわる。ひとのよを、まわる。うつる。つたわる。かけめぐる。きえそうな、きざしもない。おもみがおもいのうちにあるのなら、きえるとしんじ、ねんじれば、いいのか。どうも、そうはいかないらしい。

＊

おもみとかねをめぐる、こざかしげなものがたりの、かたりても、かたなし。おもみとかねについて、うまくのべるものにあたえられる、のべるなんとかいう、かねでできたまるいいたと、それにそえられたおおがねをもらったものたちも、このどくまんじゅうには、てをやいているらしい。それにしても、のべるなんとかを、そういうひとたちにさずけるとは、うさんくさい、はなしではないか。こうなってしまえば、のべてもしかたなし。のべる、しようがない。のべるしょうなんて、いらない。

＊

ふやす。うつす。そっくりをつくる。ものがほしいときには、かみのかねをする。するとは、そっくりなうつしをつくることなり。すってすってすりまくり、どくまんじゅうたいじ。こうかなし。どくが、ほかのものに、うつってしまったらしい。ばくちで、すったのとおなじ。すったもんだ。

＊

かたや、いのちがほしいときには、Gen というつぶのうつしをつくる。からだから、きりはなし、かみをきどった、ひとのてでつくる。うつし、うつし、うつしまくる。そのさまは、うつくしくない。おそれをしらぬしわざ。あさましい。ゆくすえが、どうなるかは、まだわからない。おそろしいやまいの、うつしごっこに、ならないことを、いのるのみ。

＊

かねと Gen。いずれも、おかわりであり、うつしである。それが、ともに、ふえる。はんぱじゃなく、ふえる。それが Gen 界。おかわりのおかわりのおかわり——。うつしのうつしのうつし——。やっぱり、にている。にすぎ。げきに。こくじ。おかわりのうつし。うつしのおかわり。そんなんが、どんどんふえていく、ひとのよ、そして、このほし。あやし。こわし。あやうし。

＊

Gen。ふえる。うまれる。いかがわしいかたりは、もういらない。おもみのしくみも、もういらない。なにしろ、たくらんたはずが、たくらみどおりに、ことがはこばない、ときている。あやまったに、ちがいない。つくりそこねたに、ちがいない。なにかとなにかをかわす。なにかをあたえて、かわりに、なにかをもらう。そんだけーが、そんだけーでは、すんでいないらしい。このあやしいうごきは、なにかににている。なにかのかわりである、ことのはの、あやしいうごきに、よくにている。かぎは、やっぱり、かわるにあるのではなかろうか。かわりにあるのではなかろうか。かわるはわかる。ひとは、そうしんじているみたいだが、わかっていないのがまことらしい。

＊

ひとは、うむ、うまれる、ふやす、ふえる、のなぞをといたと、おもいちがいをしているのでは、なかろうか。かわるがわかっていないのとおなじく、ふやすもうむも、わかっていないのでは、なかろうか。Gen をめぐるかたりには、しろうとのめからみても、あぶなっかしいところがある。とりわけ、こわいのが、Gen を、ひとのかってにあわせて、くみかえるというはなし。たくらみが、うらめにでないと、だれがいいきれよう。ひとつまちがえば、このほしのいのちがあやうい。すべてのいきものどうしばかりか、いきていないものたちのあわいの、つりあいがくるいかねない。たとえば、だしぬけにくさきがかれ、おおくのいきものがやまいにたおれ、ひいては、なつにおおゆきがふり、ふゆにむしのむれがたはたをおそいかねない。また、ひとのからだとこころにくるいがおこらないと、だれがいいきれるのか。

＊

かねとおもみをふやす、かわすいちばのしくみは、あきらかに、おおちょんぼ。これ、もはや、ばればれのはなしではないか。そうやって、かわるがわる、あらわれる、かたりのかずかず。ふえるのは、そんなかたりだけか。いかにも、ずれたひとのやることら

しい。せめて、ほかのいきものたちや、このほしまで、ずらさないでほしい。

＊

このほしにくらすいきものは、かわすことでいきている。ふえている。きえることもある。おおきくなる。ちいさくなることもある。ひとは、そのしくみをとくかぎとして、Gen というはなしをつくり、かたっている。かたりつくしたわけではない。それはさておき、ひとは、かわすことをおぼえた。なにかのかわりをかわすことをおぼえた。おもみをかわすことをおぼえた、ともいうべきなのかもしれない。そのうらには、ふやしたい、もっとほしい、さらにおおきくしたいという、おもいおもいがあるとおもえる。

＊

ひとは、かわすというしくみを、みにつけた。おそらく、しらずしらずにみにつけた。わけもわからず、みにつけた。いまだに、そのしくみをしらずにいる。なんども、そのしくみの、とちくるいにであいながら、またもや、くるいのなかにいる。いま、おそっている、とちくるいはおおきい。ふやせふやせ、おおきくしろおおきくしろという、かけごえのなかで、おおきくなったのは、くるいとずれだけ。あたまのなかに、ずれがおきてから、くるいつづけているひとが、またくるい、ずれた。これ、とちくるった、はずれものの、あほのたわごとなり。いうまでもなく、しんじるにあたいせず。

＊

それにしても、おもみ、つまり、あたいをかわすと、ふやすとは、もともと、はなしがちがうはず。おもみをかわすに、まとをしぼろう。おもみをかわすしくみは、おそらく、ひとのおもいや、おもわくでは、はかれないほどのおもみを、そなえているのではないだろうか。いいかえると、ひとには、にがおもすぎる。おもうにも、おもいにも、おもみをおもうには、にがおもすぎる。だから、はかれない。わからない。なにかのかわりになにかでないものをもちいるという、かわりのしくみは、ひとにわからないようにできている。それとおなじく、おもみのしくみは、ひとには、はかれないようにできているのではないか。

＊

てみじかにいうなら、おもいにおもいはわからない、となる。だめおしに、からことばのたすけをかりてみよう。思い、想い、念い、憶い、重い、面い、主い、母いは、図れ

ない、計れない、測れない、量れない、別れない、謀れない、諮れない。とにかく、にはおもい。ひとには、おもすぎる。はかれない。だから、くるう、ずれるしかない。

＊

Gen 界、すなわち、ふえるをめぐってつづることのはたちが、こんなにふえるとはおもいもしなかった。つづるかきもののなかみを、つづることのはがまねて、ふえたのにちがいない。ことばは、かしこい。おそれいる。とにもかくにも、こんなにも、ながくなった、たわごと。もうしわけなし。

◆

以下は、10 の「げん」の見取り図です。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」（うつせみのたわごと-7-）
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」（うつせみのたわごと-8-）
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」（うつせみのたわごと-9-）
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
＝ 7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
＝ 8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
＝ 9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・

輪・和・わ」
＝10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

◆

**「うつせみのたわごと-10-」（全 14 回）**

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

以上の３つの方法を試しています。

＊

今回のテーマは、「ふえる・げん・Gen（※ドイツ語で「遺伝子」)」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「Gen 界」です。
小さな命の単位が転写という仕組みでどんどん増えていく。転写しそこなう場合もある。死滅する単位もある。単位の集合体である生体は、単位を生殖や増殖という仕組みで、新たな生体を生み出していく。そうやって、写す、移る、増える、伝わる、渡す、という一連の動きが生起する。
ヒトは、その生起を出来事としてではなく、物語としてとらえるしかない。その物語を生成するために必要なのは、分けるという作業だ。分けるのは、ヒトが小さいからにほかならない。自分より小さく分けて分かったとする。
Gen 界における、もうひとつの運動は、「交わす」ことである。「ものを交わす」から、「価値を交わす」へとヒトは「交わす」を変化させた。価値という分けられず分からないものに、ヒトはもてあそばれ、振り回されている。それが経済である。「増える・増やす」

「交わす」の根底には、ヒトの欲望、とりわけ物欲がある。決して逃れることができない、根源的な欲がある。

この欲望には切りがない。「ほしい」「したい」だけが目的化して回りつづけ、ヒトは振り回されつづけるが、それもいつかは止まるだろう。

以上のような話です。

標準的な表記に直したキーワードは、「おもい・思い・想い・重い」「重み」「値」「値打ち」「かね・金」「はかる・量る・測る・計る・諮る・謀る」「サブプライム」「いちば・市場」です。

直接書かなかったキーワードは、「ゲノム解読」「遺伝子工学」「遺伝子組み換え」「バイオテクノロジー」「クローン」「ＥＳ細胞＝胚性幹細胞研究」「ノーベル経済学賞」「金融工学」「CDO」「大不況」「資本主義」「市場経済」「造幣」「財政投融資」「投資」「投機」「博打」「株式」「ジョン・メイナード・ケインズ」「交換」「貨幣」「カール・マルクス」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.11　うつせみのたわごと-10-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

# げん・眼（うつせみのたわごと-11-）

＊

げん──。きになることば。からからきた、ことば。からことばが、このくにのことばとであい、まじったときに、とりわけ、おおきなはたらきをしたのが、もじである。このくにのもじのしくみは、からからつたわった、まなと、まなをくずした、かなからなる。まなかなである。まなは、もののかたちから、とられたものだという。

＊

まなには、ひとつのもじで、なにかをあらわすものもあれば、いくつかのかたちが、あわさってできあがっているものもある。かたちとなかみをあらわすところと、おとだけをあらわすところに、わかれているものもある。まなにおいては、まなこをはたらかせなければならない。すなわち、よむ、みる、みわけることが、かぎとなる。

＊

まなにおいては、かたちがなにかをあらわすとはいえ、みておとをだすこと、すなわち、こえをだしてよむことも、かかせない。まなには、いくとおりかのよみがあるものがおおい。それが、まなにあつみとおもみをあたえている。よみには、からことばによるものと、やまとことばによるものがある。ずらしてみよう。眼、げん、がん、め、まなこ。目、もく、ぼく、ま、め。見、けん、げん、み。じびきをたよりに、ちょっと、あそんでみよう。ま、み、む、め、も。目、見、眸、眼、膜。

＊

ひとはまなこをもちいて、みる。ほかのいきものにくらべて、みることが、いきるかしぬかをわけるとさえ、いわれている。それほど、まなこのやくめは、おおきいらしい。とはいうものの、みるを、ずらしてみると、みるが、まなこのはたらきだけを、しめすものではないことがわかる。みる、見る、視る、観る、診る、看る。ふるいいいかたで、みる、回る、廻る、というのもあるという。

＊

みるのもちいかたを、みてみよう。みゃくをみる。やまいにかかったひとをみる。ばかをみる。なきをみる。なりゆきをみる。ひとをみるめ。あまくみる。あかんぼうをみる。けがをしたひとをつっきっきりで、みる。めんどうをみる。ときをみる。ゆめをみる。このように、からだでなにかをうけとめることを、みるということばで、あらわすことができる。

＊

さきほど、みてみよう、とかいたが、なになにしてみる、のみるも、ためしになにになにするといいたいときに、もちいられると、じびきにある。じびきをうのみにはできないが、そういうみかたもあるらしい。ちなみに、たったいま、かいた、みかた、の、みは、かんがえるということか。つまり、みかたとは、かんがえかたとも、とれる。これ、でまかせ。れっと・みー・しー。えーっと.....。でも、いえてるかもしれない。

＊

たしかにややこしいが、みるということのはの、あつみとおもみは、おもしろい。いろいろにとれるから、おもしろい。ことばずきのものには、こころがひきつけられる、おもいがする。みるということのはの、あつみとおもみが、みるという、いとなみのあつみとおもみと、かさなるものなのか。

＊

ひとが、まぼろしをみて、ことのはをとおしてものやことやさまをみて、うつつのなかでゆめをみて、ふちでであうなにものかをみて、おのれやものごとのみなもとにめをむけ、このよをみきわめたいとのぞむのならば、ひとは、つねにみている、といえるだろう。いきること、すなわち、みることと、いえるだろう。みるためには、ひかりがいる。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen 界、眼界は、ひかりにみちたばである、といえよう。

＊

わすれてならないことがある。すべてのひとが、めがみえるわけではない。おそらく、こころならずも、めしいとよばれるひとたちがいる。やみのなかにいて、まったくみえないばかりとは、かぎらない。みえないといわれるひとのなかにも、ぼんやりみえる、か

すかにみえる、あかるいくらいはわかるという、こい、うすいがあるという。みみのとおい、このあほには、きこえにたとえて、その、こい、うすいが、わかるきがする。みえるひと、きこえるひとには、そのあわいがわからない。いたしかたなし。

＊

みるといういとなみは、ひかりのたすけをかりて、ものをみることだけをさすわけではない。みるを、もっとひろいおこないだと、みなしてもいいとおもう。みる。みえる。みわける。とりわけ、みわけるということわけに、おもいをむけてみたい。みわけるは、見分ける、とかかれることがおおい。かつて、身分ける、とこのんで、しるしたひとがいた。

＊

ずらして、みよう。みわける。見分ける。身分ける。ことわる。事割る。言割る。断る。判る。ことわり。事割り。言割り。断り。判り。理。ずらすといいながら、まさに、わけているといえる。では、ずらすをずらして、みよう。ずらす、わける、かえる、うつす、こじつける、たとえる、つなぐ。これらのあわいはあわい。これらをわかつ、へだたりはちいさい。へだたりは、おそらく、ひとのおもいのなかにある。

＊

へだたり、おくゆき、かたち、ありさま。そうしたもの、こと、さまは、ひかりによってのみ、ひとにとらえられるとはかぎらない。たとえば、こうもりは、おとで、いぬは、においで、くもは、ゆらぎで、おのれのまわりをとらえるのに、ひいでているときく。そうやって、えものをねらい、とらえる。また、そうやって、みをまもるという。

＊

ひとにおいても、こうもりや、いぬや、くもと、にたことがおきているのではないだろうか。まなこをもちいて、みる。ここでは、ひかりがよりどころとなる。みみをもちいて、きく。ここでは、みみのなかのまくへと、つたわる、かすかなゆらぎがたすけとなる。においをかぐ。においのこまかなつぶがあると、きいたおぼえがある。あじをみる。これもこまかなつぶが、したに、はたらきかけるらしい。

＊

はだざわり、したざわり、てざわり、はざわり、ということのはがある。からだのいちぶが、なにかにふれたときにおこるさまをしめしている、といえるだろう。このように、からだにそなわっている、ば、つまり、どこかが、なにかをとらえる。それを、ひっくるめて、みるとよんでみてはどうか。あるいは、みるを、へだたったものを、ちかくにあるとおもうしくみだと、みてみよう。

＊

みるを、とらえる、とずらす。みるを、とらえる、とよむ。とらえる。おのれのからだのなかに、ばをあたえる。なにかのかわりになにかではないものを、ばとして、からだがうけとめる。おそらく、あたまのなかにある、きわめてほそい、いとと、きわめてこまかい、つぶとのあいだで、なにかがおこって、いまのべた、いとなみがおこなわれるのであろう。そうしたことわりは、どうでもいい。それは、くろうとがかんがえ、かたること。しろうとは、いまここで、からだがどのようにはたらいているか、それだけに、こころをかたむければいい。というか、それしかない。くろうとのことわけなど、どうでもいい。

＊

みる。とらえる。からだでうけとめる。それが眼界でおこっていることではなかろうか。へだたったものをちかくにあるものとして、とらえる。それを、しる、わかる、みる、ということのはでよぶ。なづける。てなずける。むなしい。あるいは、あやうい。なぜなら、ひとのおごりにつながるから。なづけ、てなずけたつもりの、ものやなわばりをながめて、よいしれる。ひとの、くせ。ひとの、たち。

＊

ひとは、わけて、わかったもの、しるしをつけて、しったものをながめて、あるじになったつもりでいる。だが、それだけでは、たりない。もっと、ほしい、もっと、ひろげたい。なわのそとをみつめ、せめいり、あらそい、あやめるおりをうかがう。きなくさい。なまぐさい。それが、ひとにおける、みるということか。いきものが、いきるとは、そうしたことなのか。とはいうものの、ひとのやることなすことは、ほかのいきものにくらべ、あまりにもおおきく、ずれている。はずれすぎている。

＊

まなこがあるないにかかわらず、あらゆるいきものは、まわりをみて、みをまもる。たべものをさがす。てきとたたかう。それは、それでいい。ひとのばあいは、どをこしている。このほしにも、かぎりがあるというのに、ひとのほしい、ひろげたいには、はてがない。はどめがない。すでに、がけっぷちにたっているのに、そのさまがみえていない。みてみぬふりをしている、ふしもある。

＊

ひとは、おのれが、まなこでみるのに、ひときわ、ひいでているとしんじている。だが、わすれてはならないことがある。めだけで、みるのではないことを。まぼろし、ことのは、うつつ、ふち、みなもと、ものごとのおこり、めでみえるさま。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen 界、眼界。ひとは、そうした界を、いくえにもかさねて、もの、こと、さま、あるいは、なにかとしかよべないなにかを、みている。とらえている。ひとのめには、みえないものやことやさまは、おびただしいかずにのぼるにちがいない。ひとが、わけられないものやことやさまも、おびただしいにちがいない。

＊

ひとが、いちどに、こころをかたむけられるばは、ちいさい。まばらに、まだらに、みているというべきか。わるくいえば、うかつなる、めしい。みるべきものをみないで、みたいものしかみていない。みなくていいもの、あるいは、みたくもないものが、めにはいることもあるだろう。ひとは、おのれのめのしくみを、てなずけ、あやつることはできない。めに、もてあそばれているともいえる。みみ、した、はだをはじめ、からだのどこもかしこもおなじ。

＊

だから、ひとは、やまいにかかり、けがをし、あやまちをおかし、まちがいをおこす。それは、それでいい。おそろしいのは、ほかのいきものをみちづれに、ほろびへのみちをあゆみかねないこと。ただすべきおりを、いまだにいっしていないと、だれがいえるだろうか。

＊

ひとが、こころをかたむけられるときは、みじかい。ひとが、おもうより、はるかに

みじかい。とびとびというべきか。わすれっぽい、あきっぽいというべきか。あてにならない。それをおぎなうための、ものやしくみをつくりだしてきたが、それも、つまるところは、ひとのまなこやみみの、はたらきにあわせたものにすぎない。つきに、なかまをおくりこみ、たたせたところで、おごりたかぶり、よいしれてはならない。

＊

おのれのちからをおぎなう、しくみやものを、つくりだし、みえないなみを、みえるようにする。みえないところを、みえるようにする。きこえないおとを、きこえるようにする。みみがとどかないおとを、きこえるようにする。みえないうごきやゆらぎを、とらえられるようにする。そのたすけとして、かわりをもちいる。かわりのしくみ。とはいえ、とどのつまりは、かわりをみる、きく、とらえるにゆきつく。それにたよるしかない。ひとの、さが。

＊

ひとのいう、うつつとは、ありとあらゆるものが、かわりにすぎない、うつつ。すべてが、にせたもの、にせものにすぎない、うつつ。うつつ、うつうつ。うつをうつ、空を打つ。虚を撃つ。鬱を討つ。むなし。

＊

みるにつきまとうこと。みるためには、のがれられないこと。みるといういとなみにとって、まぬかれないこと。どこから、だれが、どうみるか、という、とい。とけそうにもない、とい。みえそうにもない、とい。おもいもおよばない、とい。

＊

ゆめ、おもい、うつつ、まぼろし、え、かたり、はなし、かきもの。それらにおいて、どこで、だれが、どのようにして、みているのか、つづっているのか、えがいているのか、かたっているのか、おもっているのか。ひとの、ありとあらゆるいとなみのもとによこたわる、とけそうもない、とい。なぞ。ひとというわくを、でないかぎり、さとれそうもない、なぞ。せいぜい、くうを、なぞるしかない、たわむれごと。なぞをなぞる。たわけ。

＊

ひとには、めのまえのひろがりを、めでとらえることに、ひいでているとおもっているふしがある。かたや、ときのうつりかわりを、めやみみでとらえることについては、にがてだとおもっているふしがある。だから、ひろがりを、ふたたび、べつのばで、かわりをもちいて、くみたてなおすことは、どちらかといえば、たやすいとおもっている。だが、おこったできごとを、ときをへたのちに、かわりをもちいてくみたてなおすことは、むかしからさかんにやってはいるにはいるが、そのいとなみに、どこかうしろめたさをおぼえているようにおもわれる。

＊

まえにおこったことを、かわりをもちいて、くみたてなおす。かわりとは、ことのは、え、しるし、おと、である。あくまでも、かわりであるということを、ひとはきもにめいじるべきだとおもう。ほんものではなく、にせたもの、つまり、にせもの、あるいは、べつものであることを、わすれないようにすべきだとおもう。こうしたおこないにおいて、眼界はかぎりなく幻界と限界にせっするはずなのだが。なんどもやってきたならわしを、いまになって、やめるわけにはいかない。たとえば、さばきという、ひとのつくりあげた、おおがかりなしくみ。つみびとをとがめるさまを、みえるようにしたところで、しくみのもとをなす、おおきなといは、かたづくことなし。いたしかたなし。いたし、かたなし。

＊

ひとは、みえていない。よめていない。わかっていない。とらえていない。ひとという、わくにあるかぎり。

＊

なにかとしか、なづけようのない、なにか。かりそめに、たわむれに、あえて、しいて、なづけるとすれば、ゆらぎ、うごき――。たとえばのはなし。いうまでもなく、まことととから、ほどとおいはなし。かたり。かたこと。たわごと。

＊

ゆらぎ、うごきと、なづけることは、むなしい。はかない。なにしろ、ことのはでしか

ない。さししめすもののなぞは、とけていない。いたしかたなし。いたし、かたなし。

＊

とはいえ、ことわけをこころみてみよう。ばのひろがり、ときのうつりかわり、そのふたえにまたがっておきるさま、とでもいおうか。すべてのいきもの、ありとあらゆるいきていないものの、もとにあり、もとでおこっているさま、とでもいおうか。

＊

なづけえぬものをめぐり、ひとはなにができるか。ためしに、ゆらぎ、うごきとよばれるさまともに、みとこころをふるわせて、みる。しいて、ことわけすれば、そういう、ことだろう。こと。

＊

ひとは、ことからのがれることはできないということ。こと、言、事、断、異、殊。言なし。事なし。断つ。異なる。殊なる。ことのはのあそび。もてあそばれるしかない。

＊

うごく。ゆらぐ。かわる。うつる。うごきというなのな。な、名、字、無、己、汝、何、na、n、a。たわむれに、ずらし、みつめ、となえ、おもいのなかで、みをもって、うごき、ゆらぐ。むなしき、きやすめ。

＊

それは、それでいいではないか。ひととして、あほとして、みのほどをしろう。そうすれば、おそらく、いまより、くるうことなし。ことなきをえる。こと、なきをえる。こと、な、きをえる。こと、な、き、おえる。ことのはは、まう。舞う。眩う。まわる。回る。廻る。みる。回る。廻る。見る。みだれまう。みだれまい。めまい。みまい。瞑目。たわけ。たわごとなり。

◆

以下は、10 の「げん」の見取り図です。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」（うつせみのたわごと-7-）
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」（うつせみのたわごと-8-）
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」（うつせみのたわごと-9-）
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」（うつせみのたわごと-10-）
＝ 7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
＝ 8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
＝ 9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・輪・和・わ」
＝ 10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

◆

**「うつせみのたわごと-11-」（全 14 回）**

　できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

以上の３つの方法を試しています。

＊

＊「うつせみのたわごと -11-」2010-02-12　：

今回のテーマは、「め・げん・眼」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる眼界です。

冒頭で「まじる・混じる」「もじ・文字」「まな・真名（漢字)」「まなこ・目」「みる・見る」と発音するとｍで始まる言葉を頻出させて、ずらずという遊びをしています。
次に、「めでみる」という行為を「見る・視る・観る・診る・看る・回る・廻る」と、さらにずらしています。

こうした、つづられるテーマとつづる言葉たちの擬態＝媚態＝舞踏をしてみたかったのです。そうした言葉たちの舞いを読者に読むというより、「見て」もらうことにより、眼界を体感してほしい、できれば「めまい＝目舞い」を体験してほしい、という願いを形にしたつもりなのです。平仮名尽くしで書く必然性が「見える」ようにと考えて書きました。

内容的には、「見る」を「知覚する」という広い意味で取り、「見える＝見る＝見分ける＝分かる＝意識する＝認識する」へとつながっていくさまを語っています。「まだら・まばら」という言葉で、ヒトが「見間違う」「無視する」「見て見ぬ振りをする」こと、つまり、知覚と認識の限界性とそのいかがわしさについても触れています。
なお、「見る・見える」には「見ない・見えない」も含めていいと思います。前者にくらべて後者は――前者と同じくらい頻繁に起きているにもかかわらず――不当に軽視されているからです。

　それまでに扱った各界と、眼界とがそれぞれ独立しているわけではなく絡み合っていることにも触れています。掛け詞を多用しているので、要約をしても、あまり意味がありません。記事を「見て」いただければうれしいです。

　標準的な表記に直したキーワードは、「みわける・見分ける・身分ける」「ことわる・事割る・言割る・断る・判る」「あわいはあわい・間は淡い」です。

　直接書けなかったキーワードは、「ミシェル・フーコー」「豊崎光一」『砂の顔』「視線」「空間的広がり」「時間的経過」「再現の不可能性」「可視化というまやかし」「記憶の限界性」「信号・情報・データ」「手話」「指点字」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.12　うつせみのたわごと-11-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

# げん・弦（うつせみのたわごと-12-）

＊

げん――。きになることば。からからきた、ことば。ことのはをもちいて、うらなうというわざがある。おおむかしにも、あったらしい。むかしのほうが、さかんだったかもしれない。ことのはは、うつつとおもいをむすぶ。うつつでめにする、ものやことやさまの、かわりをつとめるのが、ことのはのやくめでもある。

＊

そのかわりのしくみは、どれほどしんじてよいものなのか。まぐれというべきか。それとも、なるべくしてなる、たしかなものなのか。ひとのちからをこえた、なにものかのこえを、そのものになりかわって、ひとびとにつたえるものがいたという。いまも、いる。なにか、あるいは、なにものかが、のりうつるのだ、というはなしもある。あやしい。

＊

てんから、ひとすじのつるがたれている。そのつるをにぎり、いのちがけで、すがりついているひと。そんなさまを、こころにえがいてみよう。つるを、いとと、かんがえてもいい。ぶらさがる。ぶらぶら、ゆらゆら。ひとは、いとと、かぜに、みをまかせるしかない。まかせる。まかす。まける。ひとは、おちないように、ひたすら、いのり、ねんじるしかない。こうしたさまは、ひとがいきているさまと、にている。

＊

ひとこそが、このほしのあるじだと、かんがえているものはおおい。おごりたかぶっているものは、かずしれない。それでいて、かみ、かみがみ、ほとけ、まものがいると、おそれおののきながら、しんじているものも、かずしれなくいる。いまはなきひとたちのたましい、おのれのとおいおやたちのたましい、くさきややまなどにやどる、たましいやちからを、しんじるものたちもおおい。

＊

うつせみにある、ひとのちからをこえた、なにものかをおそれ、うやまう。わざわいがおきたときには、なにものかが、いかっているしるしだとかんがえる。そのいかりをしずめるための、すべにおもいをめぐらす。いのる、あがめる。いけにえ、そなえものをさしだす。そうしたおこないをする、くろうとがあらわれた。そのみちの、くろうとたちは、おのれは、ひとのちからをこえたもののかわりだという。あやしい。いかがわしい。さきに、いったもののかちか。

＊

こわいことは、ほかのひとにまかせよう、とかんがえたものもいたにちがいない。ともあれ、そのみちのくろうととは、どのようなひとか。まぼろしやゆめをみるのに、なれているひと。なにかや、なにものかに、なりきりやすいひと。なりきりがうまいひと。つまりは、かわりをつとめるのに、たけたひとということ。くろうと。げいにん。ぷろ、ふぇっしょ、なる。え、きす、ぱーと。つい、でた、からことばなり。でものはれものところきらわず。

＊

いずれにせよ、かりのもの。にせたもの。にせもの。まさか、ほんものとはいえまい。いや、なかには、おのれは、かりのものやにせたものではなく、ほんものだと、いいはるものがいるし、いたらしい。いかがわしい。いかがわしすぎる。みなさま、いかがおもわれまするか。ひと、それぞれ。いわしのあたまさえ、ほんまもんになれる。ひとが、ほんまもんになって、どこがわるい。そう、のたまう、あつかましいものがいても、おかしくはない。いや、おかしいか。

＊

ゆるしがたいものは、とらのいをかりる、やから。とらのいをかりて、ほかのひとたちをおどす、やから。いをかりれば、らく。すべてのひとは、なにかの、あるいは、だれかのいをかりながら、いきている。らくだから。らくをしたいというおもいは、だれにもある。このあほにも、たっぷりある。でも、やりすぎはよくない。ひとのなかには、なにかと、やりすぎているひとがおおすぎる。また、このほしにすむ、いきもののなかで、ひとは、ひときわ、やりすぎている、おそらくゆいいつのいきもの。

＊

くいすぎ、のみすぎ、あやめすぎ、たたかいすぎ、きそいすぎ、もちすぎ、ほしがりすぎ、かざりすぎ、ひろげすぎ、ぬすみすぎ、まずしきものととめるものとのさのひらきすぎ、よごしすぎ、すてすぎ、しりすぎ、わけすぎ、でっちあげすぎ、うそのつきすぎ、かんがえすぎ、ゆめのみすぎ、まぼろしのみすぎ、くるいすぎ、ずれすぎ、はずれすぎ、うたがいすぎ、かんちがいのしすぎ、まちがいのしすぎ、とぼけすぎ、わすれすぎ、うみすぎ、ふえすぎ、おごりすぎ、ほかのいきものにちょっかいだしすぎ、いじめすぎ、あそびすぎ、つかいすぎ、もやしすぎ、こわしすぎ、しすぎ、すぎすぎ——。

＊

こうやって、ならべて、よくながめてみると、これらを、ひとからとりのぞいたら、なにものこらないおもいがする。もしも、このほしで、さばきがおこなわれるなら、ひとは、うえであげた、かずかずのつみで、とがめられるにちがいない。いうまでもなく、このたわごとをつづっているあほも、ふくめてのはなし。

＊

すぎ、すぎ、すぎ——。やりすぎ。すぎすぎ。おもわず、くしゃみがでた。すぎのおばな、すなわち、ひとでいえば、まらからこぼれる、おとこのたねの、こまかなこな。そのおびただしいこなが、こぼれおち、かぜにのって、まいちり、ひろがるとき、ちかし。はっくしょん。ぐじゅじゅ。かゆいかゆい。くすりをのべば、ぼけーっ。はらぐだし、するものもいる。お、すぎとぴー、こ。あかい、めと、すいーと、ぴーでは、めもあてられない。このしまじまで、どれだけおおくのひとが、なやみ、くるしみ、どれだけのかねをつかうことか。もとは、よかれとおもって、かってに、ひとがうえた、すぎのなえ。いまは、ひとがなえるもと。やりすぎ。すぎたるは、のちに、きづくなり。こわし。あなどれない、やりすぎ。きづいたときには、もうおそし。きもにめいじよう。

＊

はっくしょん。すぎ、ひのき、ぶたくさ、よもぎ、まつ、いねの、はな。はなは、ひとでいえば、まらや、ほとなり。すぎや、いねは、べつとして、はながうつくしいのは、はちなどの、むしをひきつけ、つがうてつだいをさせるためとか。なるほど。すぐれたしくみなり。ひとのちからをこえたもののけはいを、おぼえる。ひとは、くさきのはな、すなわち、まらやほとに、ひきつけられ、かざる。なきひとに、そなえるくせもある。きりばな。いけにえ。ちょんぎって、そなえる。きる。kill。あやめて、そなえる、おとな

しき、やぎやとりとおなじ。kill。きる。cut。かっと、なってきるのではない。まじめくさったかおで、きる。ほんまもんやから、こわいわー。ちなまぐさい。ひとの、みがって。このほしでは、すべてが、そんなぐあいになっている。いたしかたなし。いたしかた、あるとすれば、ひとがひとでなくなること。なくなること。それは、いたし、かたなし、やるかたなし。やはり、いたしかたなし。かなし。

＊

はなしはちがうが、ひとのあそこは、うつくしいだろうか。ひと、それぞれか。いずれにせよ、ひとは、ひきつけられる。ひきつけあう。ひきつけ、あう。くさき、けものとちがい、ときをえらばず、いつでも、おーけー。なんたる、すきもの。すぎたる、すきもの。すきすぎ。くるえる、さる。ほかのいきものの、あそこをちょんぎる cruel さる。それは、それでいいのではないか。いたしかたなし。

＊

ひとのちからをこえたものの、いをかりた、にせものに、はなしをもどそう。このあほは、そうしたえらそうなやくしゃのげいは、しんじない。ひとをこえたなにものかも、しんじていないから、そのかわりのものも、こわくない。だから、あがめたてまつる、ぎりもない。ひと、それぞれ。ちなみに、このあほはしんでも、はかはなし。とむらいも、ほねひろいも、はかもいならない、とかいたかみがある。はんこまで、おしてある。はかなし。のこったもちものは、おかねにかえて、めぐまれないこどもたちにさしあげる、とも、かきそえてある。もうひとつちなみに、おやのとむらいも、なし。はかなし。おやも、それでいいといっている。にたもの、おやこ。ひと、それぞれ。

＊

ぶらぶら、ゆらゆらに、はなしをもどそう。ぶらぶら、ゆらゆらとは、たとえである。ひとのありよう。いきもののありよう。このほしのありよう。このほしをふくむ、おおきなはてしなき、ば、のありよう。そうしたすべてのありようのたとえ。ゆらぎ、うごきといっても、いいだろう。ねつ、ひかりといってもいいだろう。なんとなづけても、それはひとのことわり。そうしたことのはで、さししめそうという、たくらみとは、かかわりがないと、ひとはこころえるべき。まけをみとめるべき。

＊

まけ。おてあげ。どうにでもしてちょうだい。まいりました。ほかになんといえばいいのか。たわごとをかさねるしかない。ひとのわくのなかに、ひとがそとにむかって、なざすものはない。

＊

ことわり。すっきり。くっきり。さっぱり。あきらか。まこと。ただしい。たしか。たとえなら、ゆるされるたわごと。にせもの、かわり、かりそめのもの、とこころえるなら、ゆるされるうわごと。ほんまもんと、ちゃうでー。まちがえたら、あかんでー。ひとのおもいや、くちからでるものを、まことやほんものなどといって、もったいぶるのは、よそう。でまかせ、でたらめ、むちゃくちゃ、めちゃくちゃ、くらいが、まっとうなひととしての、いさぎよい、よびな。みのほどをこころえた、よびな。

＊

まぼろし、ことのは、うつつ、へり、みなもと、ものごとのおこり、まなこでみるものやことやさまのありよう、ぶらぶらゆらゆら。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen 界、眼界、弦界。すべてが、ひとのわくのなかに、おさまる。ひとのまけ。かとう、わくをこえよう、などという、むだなほねおりは、やめよう。できっこない。こころざしを、たかくもちたいものは、ぶらぶらゆらゆらに、さからうのではなく、もてあましているちからを、めぐまれないひとたち、よわきひとたちをたすけることに、むけよう。このたわごとをつづっている、ものぐさで、いくじのないものは、みのほどをわきまえ、おろおろうじうじいきよう。

＊

てんからたれている、いとだけは、しっかりと、にぎっていよう。あとは、ひと、それぞれ。

＊

このあほのすきなあそびは、さいころをふること。これ、たとえ、ですねん、ねんのため、ゆーときます。ことのはという、さいころを、えいやっつ、とふる。わくわく、どきどき。ぽろりとでる、め。でるにまかせる、でまかせ。とはいえ、ことのははいとしい。けなげに、みぶり、めくばせをおくってくれる。まな、かな、かわいい。からことばのかずかず、これまた、いろけあり。ことのは。ふみ。へたながら、こえにだして、うた

うのも、よし。ただ、ぶつぶつ、つぶやくのも、よし。じづらにながめいるのも、よし。

＊

ことのはとのであい。ひととのであい。ものやことやさまとのであい。であう。このよに、でたために、あった、ゆかりをすなおによろこびたい。めでたいものとして、うけとめたい。であい。あい。ずらしてみよう。さいころをふり、でまかせに、であってみよう。さいころは、じびきのたとえなり。えいやっつ。ころりじゃなくて、ぺらぺらめくる。ど・れ・に・しようかな。

＊

あい、会い、合い、遭い、遇い、逢い、藍、哀、相、間、eye、I、愛。こんなんでましたけど――。やっぱり、愛。AI ではなく。

◆

以下は、10 の「げん」の見取り図です。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」（うつせみのたわごと-7-）
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」（うつせみのたわごと-8-）
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」（うつせみのたわごと-9-）
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」（うつせみのたわごと-10-）
＝ 7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」（うつせみのたわごと-11-）
＝ 8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」

＝9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・輪・和・わ」
＝10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

◆

**「うつせみのたわごと-12-」（全 14 回）**

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす、

以上の３つの方法を試しています。

＊

＊「うつせみのたわごと -12-」

今回のテーマは、「つる・つるされてゆらぐ・げん・弦」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる弦界です。

ヒトが天から垂れた「つる・弦」または糸につかまって吊るされて、ぶらぶらゆらゆらしている。すべてを何ものかに任せている。

この記事では、「任せる・負ける」という身ぶりが大きな役割を演じています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の存在が前提になっているにもかかわらず、ヒトはそれを知り得ないという立場で話を進めています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の威を借りる人たちを批判してもいます。

言葉遊びから、ヒトが「やりすぎていること」を列挙していますが、それもまた、人知を超えた現象として描いています。つまり、最終的な善悪さえ断じる力はヒトの側にはない、まして裁く力などないという意味です。

「任せる」から「賭ける」へと話が移り、「出あう・出あい・あい」という圧倒的な偶然性（※もちろん、やらせです、偶然性を装っている＝演じているだけです）の中で、「愛」を出すという、めちゃくちゃなこじつけで終わっています。

標準的な表記に直したキーワードは、「ぶらさがる」「揺れる」「身を任せる」「祈る・念じる」「驕りたかぶる」「代わりの者」「偽者」「生贄」「身の程を心得る」「サイコロを振る」です。

直接書けなかったキーワードは、「代理（人）」「シャマニズム（シャーマニズム）」「シャーマン」「まつりごと・政・祭事・奉事」「予言（者）・預言（者）」「託宣・神託」「官僚主義」「議会制民主主義＝代表民主制＝間接民主制」「ジェームズ・フレイザー」『金枝篇』「文化人類学」「ステファヌ・マラルメ」「花＝生殖器＝性器」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.13　うつせみのたわごと-12-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

（以下の「仮面と人形（仮面編）」と「仮面と人形（人形編」は、削除していまはない note のアカウントで投稿した記事のバックアップです。）

仮面と人形（仮面編）
げんすけ 2020/07/10 08:55　仮面と人形の共通点は何でしょう？　難しく考えないでください。両方とも、「人
bloggpostings.blogspot.com
仮面と人形（人形編）
げんすけ 2020/07/11 08:26　前回は、仮面とお面について書きました。身近な体験を例に取れば、仮面とは、トイ
bloggpostings.blogspot.com

# げん・減（うつせみのたわごと-13-）

＊

げん――。きになることば。からからきた、ことば。おおむかし、このしまじまに、からからことばがはいり、もとにあったことばとまじりあったという。ひとのよには、ことのはのかずが、おおいことばもあるし、すくないことばもある。どちらが、ひいでているか、ゆたかか、うつくしいか、というはなしではない。すべのことばは、ひとしい。うえもしたもなし。ただし、なみのひとが、うまれてしぬまでにもちいる、ことのはのかずには、かぎりがある。じびきにしるされたことのはを、すべてしっているもの、すべてをつかったことのあるものは、まずいない。とはいえ、ことのはは、つねに、たらない。

＊

つねに、たらない。いつも、かけている。かずが、おいつかない。すくない。これ、減界なり。減界なのは、あたりまえ、わけるから、ふえる。わけまくれば、ふえまくる。わけたら、わかったしるしとして、なづけて、てなずける。これでは、なまえが、いくつあっても、たりない。おなじおと、おなじよみ、おなじもじの、ことのはがあっても、いたしかたなし。だぶっても、しかたない。つまり、つねに、たらない、いつも、かけている、ということになる。欠けていれば、取り合いになる。取り合いになれば、それは、賭けと同じ。かつかまけるか。かちまけをかける。めちゃくちゃな、こじつけ。こじつけは、かけのいのちなり。こじつけなしに、かけなし。うまのなをこじつけて、ばけんをかうもの、おおし。まらるめの、さいころとおなじ。

＊

ひとは、わけすぎている。だから、たりない。わけしりがおをしていても、たらない。のーたりん。まりりん・もんろー、のーりたーん。のさか・あきゆきしの、さくしなり。のーりたーん。かえらざるかわ。りばー・おぶ・のーりたーん。もどるにもどれない。のーりたーん。かえさなくていい。つかいすて。ことのはに、にたり。

＊

ひとは、わける。わけて、わけまくり、わかったことをかたる。また、さらに、わける。わかったことをかたる。こうして、またもや、わけまくる。わけて、かわをむく。いくどもかわをむいて、なにやら、また、かわがみえてきたらしい。ちいさなちいさなつぶが、みえてきたという。あやしく、いぶかしげな、つぶ、なの。そう、なの、よ。ただしくは、つぶでもあり、なみでもあり、ひかりでもあるとか、ないとか。やぶれる、おのれからやぶれる、しぼむ、ゆらぐ、ほころぶ、もつれる、くりこむ、ひも、つりあう、あちこち、あるない、あべこべ、しゃれこうべ、さだまらない、さだまさし、などなど。このたわごとと、かわるところなし。

＊

まえに限界をかたったときにもふれたが、ことばもおもいも、限界にあるとおなじく、減界にある。ことのはは、たりない。ものやことやさまに、くらべれば、そのかずは、はてしなく、すくない。なぜなら、ひとはわけるから。わければ、わけただけ、ことのはがいる。たわけとは、まさに、このことではないか。だから、ことのはは、つねに、たりない。どんなにふやしても、おいつかない。すかすか。すけすけ。まだら。まだらけ。むらだらけ。ざるのように、ざあざあ、もれる。ちいさなうつわにもった、こめつぶのごとく、ぽろぽろ、こぼれおちる。たりない。つねに、たりない。ぬけている。まぬけ。ひとは、おのれを、そうおもうべし。そうおもえば、おごりたかぶるより、いくらかは、かしこし。

＊

わかるために、わける。とはいえ、しろうとには、わけられない。わけがわからない。だから、わけのわからないことは、なんでも、でまかせだ、でたらめだ、とおもうのが、なみのひと。しとうとのくせに、わずらわしくて、しろうともしない。それでいて、くろうとは、わけて、わかったという。かたったはなしが、ただしいとわかったという。それこそ、あやしいはなし。あやまったとしりつつ、いいつくろうとする、くろうと。かたられるだけで、しろうともしない、しろうと。かたりは、かたり。だますことなり。まゆつばもの。いつか、また、あらたなあやしいはなしで、かたられないと、だれがいえるだろう。かたりつがれる、かたり。やはり、かたりはかたりか。まことのかたこと。かたことのまこと。いくらわけたところで、わかるたぐいのはなしとは、おもえない。あほには、わからない。そういわれれば、かえすことばなし。

＊

まをほろぼし、ことをわけ、いまここにあるものをもちい、はてまでかけはせ、もとを

たどり、よりちいさなつぶをおいもとめ、めをこらし、おおきなものまえでおのれのまけをみとめ、わけるむなしさをおもう。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen 界、眼界、弦界、減界。しっぽのないさるからはずれた、くるえるさるの、しにものぐるいのさま。とどまるところをしらぬ。あさましくもあり、むなしくもあるさま。なにかに、にている。えづけされたさるが、なげられたえさを、あさるさまににている。ちは、あらそわれない。ひとは、かしこく、あやまらない。あやまつことなし。そう、ひとはおもいこんでいる。だから、たりなくても、へいちゃら。のーたりん。のーりたーん。

＊

ぼんやり。きりが、たちこめたさま。それが、ひとのめにうつる、うつつのさま。だが、まだら、すかすかになれた、ひとは、それが、くっきり、あきらかだ、とおもう。ひとにかぎらず、すべてのいきものは、わくのなかにある。あえて、わくを、おもうことなし。わくにこだわるのは、ひとだけ。だから、ひとは、おのれがぼんやりのなかにいることを、ぼんやりとおもう。たりない。なにかが、たりない。かけている。なにかが、かけている。そのなにかは、わからない。しらない。でも、しりたい。わかりたい。だから、しかたなく、わける。わければ、わけただけ、かけらが、ふえる。そのかけらに、な、すなわち、ことのはを、あたえる。なが、たりなくなる。おぼえきれないから、おなじ、なをあたえる。そして、また、わける。きりがない。それなのに、きりのなかにいる。だから、ぼんやり。たわけた、ことわりなり。

＊

なは、つねに、たりない。それでいて、しんだことのはを、わらい。あらたなことのはを、ほめそやす。しご。しんご。ちがいは、ん、があるか、ないかだけ。たわけ。ん。n 。ひっくりかえして、u 。ふたつあわせて、m 。む。ひっくりかえしたのを、ふたつあわせて、w 。だぶるゆー。えいごなり。どぅぶるヴぇー。ふらんすごなり。u と v は、もとはおなじだというはなし。それにしても、たった、にじゅうろくもじで、ことばをあやつるとは、たいしたもの。まな、かな（ひらがな、かたかな）、ろーまじに、なれた、このしまじまのひとたちには、はかりしれない、しくみ。このたわごとをつづるあほも、くびをかしげるうちの、ひとりなり。

＊

なるべくして、なっている。そうかんがえるしかなし。ややこしく、かんがえれば、ややこしくなる。やさしく、かんがえれば、なんでもない。こと、もの、さまは、みるものの、おもいできまる。おもいはおもい、おもいはかるい。もっとわけたい、もうわけな

くていい。ひと、それぞれ。にじゅうろくもじ。おびただしいかずのもじ。ものは、いいよう。ものは、かんがえよう。減界は言界でもあり幻界でもある。

＊

ことのはは、またがる。ことのはだけでなく、ことも、ものも、さまも、またがる。ひとつが、ふたつに、みっつに、よっつに――とまたがる。かさなりあう。からみあう。おもいはおもい、おもいはあつい、とかんがえるひとの、ことわりなり。ただしいかどうかも、まことかどうかも、ひとには、わからない。まことはかたこと。かたことはまこと。ひとが、おかわりをもちいるかぎり、わからない。減界は言界でもあり幻界でもあり限界でもある。

＊

ことはは、またがる。ひとつが、ふたつに、みっつに、よっつに――とまたがる。おなじなのものが、いくつかあるときもある。にたものどうしは、にくみあう。ひとのさが。にたものたちが、ともにいきることは、むずかしい。そっくりだと、なお、むずかしい。にているは、おなじとはことなる。よに、おなじものはない。そっくりも、おなじとはことなる。おなじなをもつ、にたものたち。おなじなをもつ、ことなるものたち。ちなみに、な・己・汝は、わたしでもあり、あなたでもある。わ・我・吾も、おなじ。てまえ、てめえも、おなじ。もっとも、これは、やまとことばでのはなしなり。からことばについては、しらぬ。からからきたひとがきいたら、ぶったまげるのではないか。いや、にたような、つくりのことばが、どこかのからにあってもおかしくはない。減界は言界でもあり現界でもある。

＊

じびきを、みてみよう。ひとつのことのはに、いくつかのことわりがしるしてある。みじかいおとのことのはほど、おおくのことわりがある。どういうことなのか。もとがあって、わかれたのか。きのように、えだわかれしたという、はなしもある。かたや、いいまちがい、かんちがい、なまったためだという、ことわりもある。そんなものだろう。ことばのもとは、ひとのくちからでた、いき。いきもの。いきものは、ひとりあるきする。けつまずくこともある。つまずけば、われる。つるむこともある。つるめば、こができる。そうやって、ことのはが、ふえる。なまりも、ふえる。ことばも、ふえる。減界は言界でもあり Gen 界でもあり原界でもある。

＊

まみずのような、ことばはない。どのことばにも、べつのことばのかたことがまじっている。ずれた。はずれた。ゆがんだ。まがった。それが、まとも。すこやかに、そだったあかし。みなもとのいずみに、まみずがあるはずだと、しんじるひとたちが、たまにいる。もとに、もどろう。まことのすがたに、もどろう。かえるに、かえろう。そう、わめく。かえるにかえることはできない。おたまじゃくしは、かえるのこ。だが、かえるは、おたまじゃくしに、かえれない。おたまじゃくしは、ゆらゆら、ぶらぶら、およぐ。そのうち、あしがでる。てがでる。そのうち、かえるとなって、すいすいおよぐ。ひとのこも、おなじ。はいはい、よちよち、ゆらゆら、ぶらぶら、よりみちをして、こどもはそだつ。とはいえ、おとなになっても、よりみちばかり、しているものがおおい。このあほも、そのひとり。ゆらゆら、ぶらぶら。減界は言界でもあり弦界でもある。

＊

ことのはは、それがさししめすといわれている、ことやものやさまと、ひとつがひとつに、むきあっているわけではない。ひとつのことのはには、あつみとおもみが、そなわっている。なぜなら、ことのはは、もとは、ひとがつくった、いいかえれば、くちにした、ものである。いったん、くちにされ、つくられたことのはは、ふたり、あるいは、それよりおおくのひとのあいだで、かわされることになる。ひとのかずだけ、そのことのはの、あつみとおもみは、ます。いや、たとえ、ひとりのひとが、あることのはを、くちにしていたとしても、ときとともに、そのことのはは、あつみをまし、おもみを、ますこともあるだろう。わすれさられることも、あるだろう。

＊

ことのはは、かみ。ぺらぺらの、かみっきれ。ただし、それには、なまえが、しるされている。ひとは、ながしるされたかみっきれを、つぎからつぎへと、なにかに、はりつけ、はがし、また、かわりを、はりつける。おなじものに、なんども、はりかえる。どうして、そんなことをするのだろう。かみが、たくさんあるからか。なまえが、たくさんあるからか。なにかが、たくさんあるからか。いや。たりないからだ。たりないのは、なにかでも、なまえでも、かみでもない。なにかのかわりになるものが、たりないのだ。ねんのためにいうと、かわりとは、なまえではない。かわりとは、ひとのおもいのなかにある、なにかをさししめすと、おもわれている、はっぱのこと。ことのはと、きわめて、にているが、ちがう。ことのはのかわりともいえる、なにか。かめん、おめん、ますくと、よぶこともできるもの。なにかに、にせたもの、つまり、にせものといってもいい。ぺらぺらした、かわり。うすい、かわでできた、かわり。それが、つねに、たりない。

＊

ことのはは、まぼろし、ゆめ、おもいと、きりはなすことができない。ひとつのことのはが、いくえにも、きこえる。もじとして、つづられたものなら、いくえにも、かさなってみえる。そして、きいたものであれ、みたものであれ、ことのはは、こころのなかで、おもいのなかで、いくつかのゆめのつぶや、おもいのつぶにわかれ、ぱちぱちと、はじける。すくなくとも、このあほは、そんなつぶの、ゆらぎとうごきを、わがみのなかで、かんじる。げん、減、幻、言、現、限、原、源、元、Gen、眼、弦、絃、gen、ゲン――。へる、減る、経る、歴る、謙る、放る、heru、ヘル、hell、Hel、her（※ドイツ語）、Herr（※ドイツ語）――。減界は言界でもあり幻界でもあり眼界でもある。

＊

へる。たりない。ふえる。みちる。そうしたことわりが、であい、ともにすまうところ。それが、ことのはという、ば。ことのはにおいては、つじつまあわせは、ふさわしくない。ことのはは、おもいや、まぼろしや、ゆめの、かがみ。おもい、まぼろし、ゆめに、つじつまは、かならずしも、そぐわない。きまぐれ、まぐれ、でまかせ、でたらめ、たまたまが、すべるところ。ことわりは、ことのはのがわになく、あくまでも、ひとのがわにある。というか、ひとは、ことのはと、ことわりとの、あわい、へり、ふちをさまよう。うろうろ、よろよろ、ぶらぶら。

＊

へる、たりない。それなのに、ふえる、みちる。なにごとも、ひっくりかえせば、べつのものにみえる。あべこべ。べこべあ。さかさま。まさかさ。ちがってみえても、おなじこと。すべてのことのはは、ひとしい。ひとしくないのは、ひとのめにうつるから。つまり、そのように、ひとにみえるだけ。そんだけー。そうだ。そうじゃない。そうにちがいない。いや、そんなことありえない。どんなにいいあらそっても、おなじこと。あらがう、あらそう、むなし。ねこのみみには、ひとのことわりのこえに、ことわりなし。よそのことばをはなすものには、うちのことばは、ちんぷんかんぷん。ばいす・ばーさ。

＊

へるのきわみは、なし。む。無。ふえるのきわみも、なし。む。無。さしひき、ぜろ。０、〇、わ、輪、環、話、我、吾、曲、回、わ、◎、〇、０。まあるく、おさめまっせー。わっ。おどろかせて、もうしわけない。もうす、わけ、なし。なんにもない。幻界、言

界、現界、限界、原界、Gen 界、眼界、弦界、減界。ことわけしても、なんにもない。むなし。む、なし。む、あり。おなじこと。

＊

ない、から、あるはうまれない。これ、うそ。ひとにとっては、うそ。ないから、あるを、うむのが、ひと。くれあちお・えくす・にひろ。ちなみに、ひとは、あるから、ないを、うむ、おそれあり。このほしから、いのちといういのちを、ことごとく、なくす、おそれあり。うっそーっ！？　ほんまやでー。ほんとに？　ほんとに。さしひき、なし。ごはさん。じこはさん。じょうだんや、ないでー。ほんまもんやから、こわいでー。

＊

へる。いくつかのにたものが、ひとつのものにみえてしまう。あわいが、みえなくなってしまう。ことのはで、たとえをあげれば、遇う、遭う、会う、合う、あう、というぐあい。／ふえる。ひとつのものが、いくつかのにたものに、わかれてみえてしまう。たとえば、かえる、帰る、返る、還る、というふう。／だぶる。ひとつのものが、ふたえ、みえ、いくえにも、みえてしまう。たとえば、原、源、元、腹、胎、本、素、基というかんじ。／くっきり。ふたえ、みえ、いくえにみえるものが、ひとえにみえてしまう。たとえば、編、篇、偏、片、扁、辺、へん。

＊

みえてしまう。なぜか、みえる。わけもわからず、みえる。ことわけにたすけられて、みえる。いずれにせよ、みえるだけ。かわりと、にせものだらけの、うつつでよくみかける、ゆめうつつ。ある、わけではない。いる、わけでもない。みえるだけ。ゆめとまぼろしのなかに、なにが、ある、だろうか。なにものが、いる、だろうか。

＊

みえる。どんなふうにもみえる。眼界は、絃界のはたらきを、つよくうけている言界のごとく、きわめてきまぐれであるがゆえに、減界と Gen 界がかさなり、それが原界をなして、かぎりなく幻界と現界とせっする限界にある。ことわっておくが、これは、ことわりではなく、うたであり、たわごとなり。ここにつづられたことのはは、しんじるにあたいせず。うたのように、ききながすべし。

＊

へる。ない。たりない。かける。すかすか。ばらばら。ちりぢり。とびとび。ちょっと。ちょっぴり。

＊

ふえる。ます。みちる。つまる。うようよ。ますます。いよいよ。いっそう。いっぱい。

＊

０と１、でじたる、いちかばちか、うむ、有無、〇 Œ、∞、０、かぎなく０、n、なの、よ。それで、ことたりる。すかすかでも、おーけー。ちょっとでも、のー・ぷろぶれむ。たっぷりすかすか。ちりぢりにうようよ。

＊

ぜろさむ。つどのつまりは、なんにもないちゅー、ことか。zero sum。zero thumb。digital。もとは、finger と、じびきにあり。ゆびおりかぞえる。おおむかしのひとは、どうやって、かぞえたのか。

＊

ゆびを、おる、まげる。おる。おれる。あかんなー。まげる。まがる。ねじける。ひねくれる。このあほみたい。あかんなー。なまって、まがう。まがいもの。まちがう。やっぱ、あかんなー。まげる。" がぬけおちて、まける。あかんなー。かぞえるも、ことわりなり。というより、かぞえるこそ、ことわりなり。ことのはより、ふるいかも、しれぬ。

＊

てと、あしの、ゆびだけでは、たりない——。いや、だいじょうぶ。げんこと、ゆびいっぽん、さえあれば、なんとかなる。にほん、ゆびの、ヴぃさいん。０と１、でじたる。０と１、で事足る。０と１で、ことたりる。なるほど。そのかわり、ちょーはよう、うごかな、あかんでー。はんぱや、ないでー。

＊

やっぱ、すぱこんや。にばんてでは、やれん。ほー、そうかいな。しわけで、えーだの、あーだのいっても、らちがあかん。というわけで、しゃしゃりでてきた、りけいのおやぶんの、どーかつ。りけん（※だぶるみーにんぐ）の、ごねとく。のべるなかまのよりきりで、かち。おめでとさん。で、だれのとくに、なるの。しょみんでないことは、たしか。【※出演者、３名＋端役数名。】

＊

こんぴゅーた　しゃかりきにうごけば　ないものはない

つかれをしらず　あさばんはたらく　でじたるうま

れいといち　それだけあれば　ひとおおよろこび

はらいっぱい　まだたりないのは　のうみそだけ

みえないつぶ　あらたにでてきた　ひまつぶし

きりはなし　えんえんとおもちゃに　もてあそばれ

へるはなしなのに　いっこうにへらず　へらずぐちをたたくのみ

＊

へる。hell。Hel。じごくへ、まっしぐら。Help!

＊

へる。たりない。このほしの、ゆくすえだけは、まじ、やばそう。ゆめでも、まぼろしでもなさそう。おそらくのはなしだが――。だから、みんなで、めをさまそう。ひとであるかぎり、おそらく、としかいえぬかなしさ。かわりだけを、あいてにせざるをえない、ひとのよるべなさ。さが。かなしさ。まぼろしよ、まぼろしであってくれ。ゆめよ、ゆめであってくれ。くるいよ、くるいであってくれ。たわごとよ、たわごとであってくれ。

◆

以下は、10 の「げん」の見取り図です。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」（うつせみのたわごと-7-）
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」（うつせみのたわごと-8-）
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」（うつせみのたわごと-9-）
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」（うつせみのたわごと-10-）
＝ 7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」（うつせみのたわごと-11-）
＝ 8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」（うつせみのたわごと-12-）
＝ 9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・輪・和・わ」
＝ 10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

◆

**「うつせみのたわごと-13-」（全 14 回）**

　できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしてい

ます。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する。
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く。
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす。

以上の３つの方法を試しています。

＊

＊「うつせみのたわごと -13-」

今回のテーマは、「減る・足らない・げん・減」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる減界です。

言葉の遊びを多用しながら、「減る・足りない・欠ける」と「増える・足りる」とが言葉では矛盾しても、言葉の枠外では矛盾しないことを、言葉たちに演じてもらっています。
再読すると、反意語や反対語と呼ばれている２項対立のからくりに対する懐疑と嫌悪感が表れているのを感じます。結果として、「減る」をめぐる言葉が「増える」こととなり、長い記事になりました。

原理は単純です。ヒトは分ける。分けたものに名前を付ける＝分かったことにする。名前が増える、つまり、名前が足りなくなくる（ヒトの処理能力を超える)。「事＝言足りる」が「事＝言足りない」となる。
そうなると、訳＝分けが分からなくなってくる。「分けた＝分かった＝知が増えた」とならず、「分けた＝分かっていない＝知が欠けている」ことの確認にしかならないという「わけ」です。
さらに、ヒトの知覚・認識・意識における集中力および持続力、データの保存容量、データの再現力・再構築力には限りがある。知が増えたはずが、常に減った・足りない感じがする。
要するに、減界は限界でもある。そんな話なのです。

ヒトは自分で意識しているよりは、はるかにぼーっとしている。すかすかの意識とま

だらの認識の中にいる。と要約することもできます。ただし、ヒトが考え出した、すかすかの２進法でも、疲れを知らない機械ならば、そこそこの働きをすることが可能です。

　標準的な表記に直したキーワードは、「足りない」「間が抜けている」「たわける・戯ける」「ぼんやり」「26 文字」「重なる」「またがる」「絡み合う」「だぶる」「厚み」「重み」「多い」「多すぎる」「忘れる」です。

　直接書けなかったキーワードは、「対応」「写像」「関係性」「語彙」「分類」「命名」「ラベル・レーベル」「博物学」「言と事の同一視」『言葉と物』「ミシェル・フーコー」「語の多義性・多層性」「アルファベット」「辞書・百科事典の編さん」「デジタル」「コンピューター」「ゼロサム」「ナノテクノロジー」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.14　うつせみのたわごと-13-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp
参考記事

（以下の「わかるという枠」と「わかるはわからない」と「わかるはプロセス」は、削除していまはない note のアカウントで投稿した記事のバックアップです。）

わかるという枠
げんすけ 2020/09/14 09:00「翻訳の可能性と不可能性」の続きです。　この数日間、前置きが長くなって本題に
bloggpostings.blogspot.com
わかるはわからない
星野廉 2020/09/21 12:51「わかるという枠」の続きです。　今回は、これまでとは異なった視点から、＊「わ
bloggpostings.blogspot.com
わかるはプロセス
星野廉 2020/09/22 07:50「わかるはわからない」の続きです。　結論から書きます。　まず、記号バージョン

bloggpostings.blogspot.com

げん・絃（うつせみのたわごと-14-）（全 14 回）

＊

げん──。きになることば。からからきた、ことば。からから、つたわってきたこととのは。つたわるには、すじがいる。いと、みち、つな、みぞ、くだ、つる、ぼう。べつに、ほそくのびたものでなくても、いい。なにかとなにかのあいだに、なにかがあれば、なにかがつたわる。

＊

つたわる。わたる。うつる。とどく。あう。であう。つながる。まじる。

＊

はなす。はなつ。はっする。おくる。しかける。とどける。あげる。あたえる。やる。うける。うけとる。むかえる。とめる。うけとめる。てにする。おうじる。もらう。こうむる。いただく。

＊

ま。あいだ。あわい。へだたり。ば。ところ。うち。めん。かん。かんかく。みち。みちのり。

＊

むき。ほう。ほうこう。ほうがく。かた。すじ。すじみち。みち。

＊

なみ。ながれ。つぶ。こな。かたまり。かぜ。くうき。き。け。けはい。もの。ぶっしつ。ぶつ。こと。さま。ありよう。かた。かたち。すがた。ゆれ。ゆらぎ。うごき。はたらき。

＊

つながり。かかわり。かかわりあい。きずな。つな。あいだがら。むすびつき。ゆかり。つて。ひき。えん。えんこ。いんねん。かんけい。こね。てづる。すじ。ちすじ。ほだし。かせ。

＊

つる。ひっかける。とらえる。つかまえる。つかむ。もつ。てにする。てにいれる。よせる。ひきよせる。おさめる。もらう。にぎる。とる。うちとる。うばう。みる。きく。かぐ。あじわう。はだでかんじる。かんじる。さっする。いだく。おぼえる。おもう。

＊

きになるのは、うごくと、うごき。うごく、うごきにも、いろいろあるが、とりわけ、きになるのは、ゆらぐと、ゆらぎ。ゆらゆら、ぶらぶら、ぶるぶる、うろうろ、おろおろ、くねくね。

＊

うごくと、うごきほど、まぼろし・幻界、ことわけ・言界、いまここ・現界、ふち・限界、もと・原界、ふえる・Gen 界、みる・眼界、まかせる・弦界、へる・減界、つたわる・絃界と、かさなるもの・こと・さまはないきがする。というのは、むなしき、ことわりにすぎない。うごくという、な、すなわち、ことのは。うごきという、あきらめにみちたことのは。ことわりも、ことのはも、うごく・うごきをとらえることはできない。できないように、できている。そういう、つくり。そういう、しくみ。しくみという、ことのはも、むなしい。

＊

げん・絃——。きになることば。からからきた、ことのは。ひとには、うまれつき、ことばのすじがあたまのなかに、きざまれているらしい。そのすじをたどるかたちで、まわりで、はなされていることばを、まなび、みにつけていくのだという。どのようなことばであれ、あかんぼうやおさないこどもは、おとなとは、くらべものにならならない

はやさで、まねていく、まなんでいく。まなぶためには、まねるためのみちすじが、そなわっていなければならない。みちが、ひかれているはずだ。このようにして、ことばがつたわる。うけつがれる。という、はなし。ものがたり。たしかめたものはいない。

＊

おおむかし、このしまじまに、からのくにぐにからきたひとたちが、うつりすみ、おおきくわけて、ふたつのことばをはなし、かいていたことがあったという。という、はなし。ことばとともに、さまざまなもののつくりかたや、くにのおさめかたなどが、つたわったことは、いうまでもない。という、ものがたり。ことばが、ことのはが、ひとをうごかす。ひとをゆさぶる。という、はなし。

＊

ことばは、おりものに、よくたとえられる。ちなみに、絃は、いと。おりものとは、いとをおること、または、いとをおってつくったもの。てくすと、てきすと、これ、からことばで、おりもの、すなわち、ぬののようにおられた、ことのはのあつまりだという。てきすと、てくすととは、かきもの、もじをつづったものなり。そういえば、つづるとは、やぶれたころもをぬいあわせたり、つぎをあてたり、はなれたものをつなぐこと。つづれおりという、きれいないいかたもある。

＊

おりものと、かきものは、ことのはとして、つながりやすいもよう。えになる。みためもきれいだし、みてわかりやすい、たとえだ。おりものといえば、ぬの。ぬのといえば、ぱっちわーく——。めちゃくちゃな、こじつけ。やらせ。いかさま。で、でてきたのが、ぶりこらーじゅ。これ、からことばで、てしごとなり。あどりぶ、まにあわせのおかずつくり、ありあわせのりょうりにも、にている。めについたものを、かたっぱしから、くみあわせる。そして、それをもちいて、しごとをする。なにかの、はたらきをする。

＊

たりないなら、あるもので、すます。いま、ここにあるものを、もちいる。言界では、ことのはのあつみと、おもみを、おもんじる。ひとつのことのはに、いくつかのことのはを、つめこむ。ひとつのことのはに、いくつものことわりを、になわせる。いわゆる、しょうえね。つかうことのはを、できるだけへらす、えこ。いつまのか、減界のはなしに

うつってしまった。えこ。えごと、かみひとえ。このほしに、やさしいとまではいえないが、いわゆる、ひとつの、えころじー。がけっぷちにある、このほし。いつのまにか、限界のはなしになってしまった——。めちゃくちゃな、こじつけ。やらせ。やおちょう。

＊

ふえすぎた、ひと。もちすぎた、ひと。ひとは、Gen 界にいながらにして、ぶらぶら、ゆらゆらと弦界にある、てんからのつるにつるしあげられて、みをまかせるしかない。そのゆらぐおのれのすがたを、からだでとらえ、まなこをあけて、めまいをおぼえつつ眼界をさまよう。ふと、それがおのれのふるさと、ははのはらのなかだときづく。原界にいるのだときづく。もどったのではない。かえったのではない。いまここが、もとなのだと、さとる——。めちゃくちゃな、こじつけ。やらせ。できれーす。

＊

めちゃくちゃなこじつけ。なんでもかんでも、くっつければいいというものではない。この、あほめ。たわけめ。めちゃくちゃ、こじつけたうえに、へらずぐちばかりを、たたきよって。

＊

ごめんなさい。かえすことばもありません。いや、ことのはしか、かえすものはありません。

＊

はなしを、ゆらぎにもどそう。うえのことばたちがえんじてくれた、めちゃくちゃなこじつけに、はなしをもどそう。つなぐ、めちゃくちゃに、こじつけて、なんでもかんでも、ことわりもどきのぺてんで、つなげる。それが、ゆらぎだと、このあほはおもう。とちくるっているのだから、いたしかたない。

＊

ゆらぎと、つたわりを、めぐるはなしを、はなしをつづることのはたちに、えんじてもらう。これ、このたわごとの、たくらみなり。つづるうえでの、すべなり。ひとりずも

う。はなしのなかみは、どうでもいい。はなしをつづってくれる、ことのはの、うごき、ゆらぎ、みぶり、めくばせ、かおつきに、めをこらしてほしい。たわごとに、ふさわしい、たわけた、くわだて。はなしをかえよう。

＊

くものすを、おもいえがこう。くもは、いとをはき、めぐらし、あみをつくり、すとする。すといっても、えものをとらえる、わななり。わな。なわばりなり。そのはりめぐらされた、なわ、すなわち、わなに、ひっかかったものは、にげようとして、もがく。ねっと。なっとう。ねっとりとした、いとが、もがくたびに、からだにからみつく。もがくほど、からだがゆれる。ゆれが、あみのいとに、つたわる。ぶるぶる。それが、ゆれ。ゆらゆら。ぶるぶる。

＊

くものすは、あみ。くもは、あみのゆらぎを、からだでうけとめる。そうやって、えものをあやめる、おりをうかがっている。うぇぶ。web。このほしにはりめぐらされた、あみ。ひとが、つくったあみ。あなたとわたしをむすぶ、あみ。あなたと、このほしにすむ、とおくはなれた、おびただしいひとたちとをつなぐ、あみ。

＊

いんたーねっと。いんたーは、からことばで、あわいとか、きわをさす。ねっとは、あみ。あわいあみ。めにはみえないが、ひととひと、ことのはとことのは、きかいときかいを、つなぐ、あみ。でんわも、あみ。むせんも、あみ。けーぶるも、あみ。じんこうえいせいをかいした、あみ。おざき、あみ。すずき、あみ。ぜ、あみ。まい、あみ。もとのもく、あみ。じびき、あみ。なんでもかんでも、ごっそり、すくいとる、あみ。

＊

ところで、あみは、こわい。ほんまやでー。ひっかける、しくみ、しかけ。ありとあらゆる、でんぱや、ゆうせんのしんごうを、ひっかけると、うわさされる、えしゅろん。それは、さておき、みなさん、おなじみの、けんさくえんじん。けんさくとけんえつは、きわめてちかい。このしまじまの、にしどなりの、おおきなくにのありさまを、みなはれ。ひとごとや、あらへん。あら、へんだと、おもったときには、もうおそし。びっぐ・ぶらざー。ふぁしずむ。ふあっと、でてきても、なかなか、しずむことなし。こわいでー。

＊

あみをはる、さがす、おう、みつける、ひっかける、つぶす、とらえる、けす、ばっする、ときには、あやめる。かの、０と１のしくみをもちいる。たった、ふたつのしるしなのに、はんぱじゃなく、きわめて、すばやく、はたらかせる。そうすれば、おびただしいかずとりょうのでーたを、さばくことができる。さはら、さばく。とてつもなく、でっかい、どくぐも。ぐぐる、やふる、えしゅる。にている。げきに。にすぎ。みなさん、せいぜい、きいつけなはれ。まじこわ、でっせー。のぞかれて、まっせー。みられてまっせー。きかれて、まっせー。よまれて、まっせー。このまま、すすめば、よも、まっせ、すなわち、すえ。

＊

つなぐ。むすぶ。あみ。ゆらぎ。絃界―幻界―言界―現界―限界―原界―Gen 界―眼界―弦界―減界。

＊

10 の「げん」の見取り図を、ふたたび、だしてみよう。

＊

「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」

＝「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

＝「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」

＝「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」

＝「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

＝「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

＝「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

＝「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす・まいりました」

＝「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・まあるくおさめまっせー・輪・和・わ」

＝「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でっけー・うへーっ・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

＊

ひろがる、あみ。あちこちに、はりめぐらされている、さまざまなあみたち。のびた、いと。とおいむかしから、ずっとつづいている、あるいは、ついこのあいだ、あるいは、たったいま、のびたばかりの、いと。あみがほどけば、いととなる。いとがからまれば、あみとなる。いずれにせよ、いとも、あみも、ゆらぎを、つたえる。ばいたい。場・維・帯。

＊

あわい。あいだ。ば。つたわる。ゆれ。ゆらぎ。つながる。つながらない。はる。めぐる。きれる。とだける。からまる。まざる。

＊

つりを、おもいうかべてみよう。かわのながれ、うみのなみま、いけのさざなみ。いとをたらす。いとをなげる。あみをなげる。あみをはる。わな。ねらう。いきをこらす。まつ。

＊

いとでんわを、おもいうかべてみよう。むこうと、こっち。はなす。こえがつつのそこに、はられたかみをゆらす。いとが、かすかにゆれる。みえないほど、かすかに。つたわる。つながる。つながったときの、よろこび。ときめき。

＊

しかけ。しくみ。わな。はまる。ひっかかる。おちいる。つられる。

＊

しかける。しくむ。とどける。おくる。つたえる。わたす。かわす。

＊

しかける。しくみ。ほしい。ねがう。いのる。たくす。まかせる。とどく。とどかない。かなう。かなわない。じゃまされる。

＊

しかけ。しくむ。ねらう。たくらむ。であう。あう。とらえる。とらえられる。のがす。にげられる。じゃまされる。まける。かつ。つながる。まじわる。

＊

しかける。しくむ。はる。あむ。おる。まげる。つぐ。つくる。うつる。かわる。あう。ゆらぐ。

＊

ありとあらゆる、いきものが、しかける。しくむ。ゆらぐ。ゆらぎをとらえる。いきるため。くうため。ひとも、おなじ。だが、おそらく、ひとだけが、ことわる。事割る。言割る。ことわりもなく、ことわる。おごる。

＊

ゆらぐ。いきもの。いきをすう。いきをはく。なく。みぶるい。みをふるわすのは、おもに、みをまもるときの、さま。ぴくぴく。びくびく。ぶるぶる。おののく。いつも、まわりに、めをそそぐ。あやうきを、なかまに、つたえることもある。それだけではない。ぴくぴく。つがる。たねをつける。たねをうける。ぴくぴく。うむ。うまれる。ぴくぴく。くるしむ。なくなる。

＊

ゆらぐ。ひと。みぶるい。みをふるわすのは、みをまもるさまだけに、あらず。よろこぶ。いかる。かなしむ。たのしむ。おののく。はなす。かたる。かく。しるす。つづる。となえる。うたう。いのる。つたえる。わらう。たかぶる。おごる。えらそうに、みをふるわす。うきうき。

＊

ある。いる。それだけではない。いきものは、ゆらぐ。ことわりは、これくらいにしよう。わけても、わからなくなるだけ。いや、ひとであるかぎりは、わけるしかない。おもいのなかで、ゆらぐ。それしかない。

＊

ゆれ。これも、なにかの、かわり。なにかの、しるし。なにかそのものにあらず。ゆれる。ぶれる。つたわる。つたわらず。つたわりそこなう。ゆれそのもの？　ことわけ、たわけ、たわごとなり。

＊

ともかく、ゆれよう。めがまうまで。

◆

以下は、10 の「げん」の見取り図です。

1)「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
＝ 2)「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
＝ 3)「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」（うつせみのたわごと-7-）
＝ 4)「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」（うつせみのたわごと-8-）
＝ 5)「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」（うつせみのたわごと-9-）
＝ 6)「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」（うつせみのたわごと-10-）
＝ 7)「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」（うつせみのたわごと-11-）
＝ 8)「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」（うつせみのたわごと-12-）
＝ 9)「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・０・〇・輪・和・わ」（うつせみのたわごと-13-）
＝ 10)「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・

ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」（うつせみのたわごと-14-）

◆

**「うつせみのたわごと-14-」（全14回）**

　できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

　ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

１）ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する。
２）大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く。
３）大和言葉系の語を用いて比喩をつかい、ほのめかす。

　以上の３つの方法を試しています。

＊

＊「うつせみのたわごと -14-」

　今回のテーマは、「糸・伝わる・伝える・げん・絃」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる絃界です。

　「伝わる・伝える」という動き、「伝わる・伝える」を仲介する媒体、「伝わる・伝える」の対象をめぐる、さまざまな言葉たちを次々と「ずらす」ことにより、その言葉たちの表情・身ぶり・目くばせを読者に体感してもらおうとしています。

　糸とその縦横の運動から成る織物と、紙と記された言葉たちの縦横の運動から成るテクスト＝テキストのつながりにも触れています。さらには、網とクモの巣、ひいてはインターネットへと話をつなげていきます。網における「引っ掛ける・仕掛ける」という

動作の重要性を訴えています。検閲・検索の基本的仕組みだからです。

また、「伝わる・伝える」の究極的な対象となる「揺れ・揺らぎ」について考察していますが、尻切れトンボに終わっています。再度、考えてみたいテーマです。不可解なテーマです。

標準的な表記に直したキーワードは、「目まい」です。

直接書けなかったキーワードは、「宮川淳」『引用の織物』『紙片と眼差のあいだに』「豊崎光一」『余白と余白または幹のない接木』「ロラン・バルト」『テクストの快楽』「Stephen Heath」『Vertige du déplacement』「ジル・ドゥルーズ」『プルーストとシーニュ』です。

◆

このシリーズは、タイトルを模倣し、まさに、たわごとで終わりました。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen 界、眼界、弦界、減界、絃界。なお、各記事の中で、断っているように、10 の「げん」をめぐる各界は、別個のものではなく、パラレルな関係にあり、同調し、共振しているとイメージしています。

各界も、各界についてのイメージも、戯言であることは言うまでもありません。読者に、目まいまでは行かなくとも、笑いという揺らぎを促すことができたなら、そんな嬉しいことはありません。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.15　うつせみのたわごと-14-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに　第１１巻｜パブー｜電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいだき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

# ◆第四部　「言葉ではないもの（人にはとらえられないもの）」に言葉を当てる

「何か」に「何か」を当ててみる

「何か」に「何か」を当てはめる

＊

人が「決める」。「決まる」は「起きる」とか「あらわれる」。そんな気がします。
（拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」」より）

かた、形、型――。たとえば、「かた」という音に、「形」や「型」という文字を当てる。

なるほど.....。一瞬「当たった」つまり「つながった」という感じがします。しっくりするし、「その通りだ」と得心してしまうのです。でも、「当たった（つながった）」のでしょうか。「当たり（つながり）」なのでしょうか。

「何か」に「何か」を当てる――。この場合の前者と後者の「何か」は、そもそもそれぞれが「何か」に「何か」を当てた結果としての「何か」であることに気づきます。「かた」（和語・ひらがな）と「形・型」（漢字・漢語）のことです。

言葉ではないものに「かた」と「形・型」というもの、つまり言葉が当てられたという意味です。

そうであれば本当に「当たった（つながった）」のか、単に「当てた（つなげた）」結果としてそうなっているのか、その「当たり（つながり）」加減が不明に思えます。本当なのか適当なのかテキトーなのか妥当なのか穏当なのか。どの「当」なのか分からないのです。

言葉ではないものに当てた「かた」も、おなじく言葉ではないものに当てた「形・型」も自明なものではな。不明に不明を当てている。何に何を当てたのかが不明。

＊

言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるために、言葉に言葉を「当てる」ことができるのですが、不明なものに不明なものを当てていると言えます。

「かた」に「形」や「型」を当てて、「なるほど」と分かった気分になる。しっくりするのは「当たり」ではなく、むしろ「当り前」なのです。和語と漢語からなる（言葉の中に言葉がある）日本語では、そういうふうに仕組まれているのです。ある意味やらせなのです。

お察しのとおり、日本語における翻訳や言葉の成り立ちだけでなく、言語活動にかかわる話をしています。今回からしばらく、こうした話を記事にしていく予定です。

目次

**かた、かたる**
**あてる、あたる、ぼうーっとする**
**つなぐ、つなげる、つながる**
**多面的なもの同士はどこかでつながる**
**血縁、ツリー構造**

**かた、かたる**

かた、形、型、かたる、語る、騙る、カタル、カタルシス

＊

当てる、当ててみる、そのうちに当たるかもしれない。当てるも当たるもころあい。正しい正しくないとは話が違う。当たりなどないのではないか。辺りを探るくらいが当てるであり当たるだろう。

＊

「かた」に「形」と「型」という漢字を当ててみます。音に文字を当てるとも言えるでしょう。ひらがなに漢字を当てるとも言えるでしょう。大和言葉つまり和語に漢字とか漢語を当てているとも言えそうです。

「形」と「型」を「かた」ではなく「けい」と読めば、もともとこの島々にあったと言われる音（発音）の訛りで、大陸から渡ってきたと言われる文字と音を読んでいると言えるかもしれません。

とはいうものの、いま上で挙げた文字（形・型・かた・けい）も読み方つまり音（発音）も、いまのものです。大陸から文字が伝わってきたころとはかなり変わっていると考えるのが自然でしょう。

＊

「カタル」と「カタルシス」は上の文字列の中では、音以外のつながりはないように見えます。いわゆる駄洒落でではないかと思う人がいても不思議ではありません。とはいえ、ここでは語源の面子を保ったり、語源の辻褄合わせをしているわけではありません。

さらに言うなら、いわゆる論理の顔を立てたり、論理の辻褄を合わせている場でもありません。深くも広くも知ろうとしない素人が、わくわくするために語っているだけです。

語ることで、しゃあしゃあと何かが外へと出ていき、いわゆるカタルシスが起る。こう考えるとつながります。私も心当たりがありますが、悩みや苦しみを人に語るとすっきりします。問題が解決しなくても、何かが出た気がします。

語るはカタル。語るはカタルシス。

ここではさかんに掛け詞をします。駄洒落は掛け詞の別称であり蔑称でもあります。わくわくするためには、どちらで呼ばれてもかまいません。どちらも、別に蔑ろにするつもりはありません。

**あてる、あたる、ぼうーっとする**

当てる、当たる、決める、決まる、あらわす、あらわれる

＊

「決める」は人のすることであり、「決まり」は人を超えたところで起きるもの。「当てる」は人のすることであり、「当たる」は起きるもの。「あらわす」は人のすることであり、「あらわれる」は「あらわれる」もの。

いや、それどころか、おそらく「当てる・当たる」や「つなげる・つながる」も「決める・決まる」も「あらわす・あらわれる」も、人を超えたところで起きるものであり、あらわれるもの。

他動詞とか自動詞という文法用語をつかって横断し、理屈をつけて説明することもできそうですが、横歩きするよりも真っ直ぐに歩いて迷う、つまり個別の細部にこだわるほうが性に合っています。直線上を歩いていて迷うことが私にはあります。

＊

「かた」に「形」や「型」を当てると、一瞬決まった（つながった）ように感じます。「なるほど」、「そうだ」、「これこれ」――当たったという気がするのです。語るからでしょう。要するに騙りです。錯覚とも言えそうです。

なじんだ言葉に置き換えただけなのですが、それが「分かった」「大当たり」「どんぴしゃり」「的を射ている」と感じられるのです。言葉に言葉を当てる、言葉に言葉を重ねるという、置き換えと言い換えが基本である辞書はそういう仕組みで成り立っているのかもしれません。

当ててみて当たったと感じる。

これは、籤（くじ）や標的に当たったときと同じ感じですから、自分が当てたとか自分がやったというよりも、人を超えたものが働いているところで、起きたとか起ったような思いを私はいだきます。人それぞれですが。

＊

「かた」に当てた「形」や「型」という文字を見ていると、「あらわれた」のではないかとすら私には思えます。

「かた」を音や声として聞いたり、あるいは唱えたさいに、頭か心か知りませんが、浮かんでいるイメージと、「形」や「型」という文字を見ているときに浮かぶイメージは違います。

それでいて、音に文字を当ててみて、「当たった、決まった、つながった、起った、あらわわれた」とあっけにとられます。「あっけ・呆気・あきれる・呆れる・呆然となる」のです。

ほうける、呆ける、耄ける、惚ける、ほおける、蓬ける。

ぜんぶ頭と関係ありそうですね。「当たった・つながった」と感じるときには、頭がどうかしているにちがいありません。そういうときには、いわゆる判断停止とか思考停止が起きているはずです。

要するに、ぼうーっとしているのではないでしょうか。わくわくするのもそうでしょう。

＊

「かたる」に、「語る、騙る、カタル」を当てたときも、一瞬ぼうーっとします。「そうそうこれなのよ、まさにそういうこと」。しゃあしゃあと何かが流れ出ていくカタルシスに似ている気がします。

当ててみるときにはそれなりにぼうーっとしますが、当たったと感じたときには、もっとぼうーっとするというか、ぼうーっとしているあいだが少しだけ長い気がします。

「呆ける」の度合いが高まっているのです。

**つなぐ、つなげる、つながる**

つな、つなぐ、つなげる、つながり、きずな、気づく、築く

つなをつなぐ（つなげる）、つながりに気づく、絆を築く

かたる、語る、騙る、カタル、カタルシス
あたる、当たる、中る、カタル、カタルシス

＊

「何か」と別の「何か」を当ててみて、つながるかどうかを考えてみましょう。

・「語る」と「カタル（カタルシス）」は似ている。（印象・類推・感想）
・「語る」と「カタルシス」が起きる。（仮定・類推・相関関係・因果関係）

たしかに、語る、つまり物語る行為は、カタルシスを起こしそうだし、これまでにそんなことが語られてきたようです。

・「語る」は「カタル（カタルシス）」のようだ。（直喩・明喩）
・「語る」は「カタル（カタルシス）」である。（隠喩・暗喩）
・「語る」は「カタル（カタルシス）」。（掛け詞）

比喩も言葉の音や意味やイメージや形（文字）を掛けているわけですから、掛け詞の一種です。駄洒落は、掛け詞や比喩の別称であり蔑称でもあると言えそうです。

＊

・「あたる（中る）」は「カタル（カタルシス）」である。

「あたる」には「飲食物や暑気・寒気がからだにさわる。毒気・悪気の害を身に受ける」（広辞苑）という語義があります。この意味のときには「中る」とも書くそうです。中毒や「どくあたり」を連想します。

素人っぽい言い方になって恐縮ですが、毒にやられた体液が体外にしゃあしゃあ、またはどくどくと流れ出るのが、カタルやカタルシスの本来の意味だろうととらえています。

精神的とか心理的な意味あいを含めて、広義の浄化ということでしょうか。体や心に悪いものや毒を外に出す感じ。

「「あたる（中る）」は「カタル（カタルシス）」である。」というフレーズは、語源的なつながりのない言葉同士が奇しくもつながっている例だと言えます。このフレーズを至言だと感じる人もいるでしょうし、駄洒落だと言う人がいても不思議ではありません。

**多面的なもの同士はどこかでつながる**

ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前で呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかでがつながることがよくあります。

（仮に百の要素や属性のあるもの同士をくらべれば、どこかに共通点や類似点が見られると言えば分かりやすいかもしれません。）

猫は犬に似ている――。そう言われると、たしかに手足の数は同じですし、両方とも毛が生えています。

猫は人間に似ている――。似ている気もするし.....。

ほんとうに「つながった」のか、「当てた」結果としてから「つながった」ように見えるだけなのか、その「つながり」が不明なのです。

「つながった」として、それは偶然とも言えますが、言葉と事物の関係はそもそもが偶然っぽいとつねづね感じています。たとえば、生きものの猫が日本語の猫という言葉と「つながる」必然は全然ないわけですから。当然です。他の言語や方言でも同じです。

ただし、別個の名称で名指されているもの同士を当ててみることで立ちあらわれるつながり、つまり偶然の産物であるつながりを見ることで、名指されていないつながりを感じ分けられるかもしれません。

猫はペンギンに似ている――。うーむ。
猫は星に似ている――。うーむ。

「つながった」つまり「つながりがある」のか、「当ててみた」結果として「つながりがある」ように見えるだけなのか、やっぱりその「つながり」加減が不明なのです。

猫は星だ――。

詩に似ていますね。つながりとは詩のようなものかもしれません。

**血縁、ツリー構造**

「語る」と「騙る」は語源的なつながりがあるようですが、つながりをさがすさいには、語源が役立つこともあれば邪魔になることもある気がします。

群れる生きものであるヒトは血縁関係を重んじますが、事物についても血縁や枝分かれする木のイメージ（ツリー構造）にとらわれています。人情なのです。これを重んじない人は人でなしかもしれません。

一方で、固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何かが「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。

＊

血縁や木のイメージは、機械や AI に教える、つまりプログラミングするのに適しているから余計に厚遇されているのでしょうが、血縁やツリーという比喩（何かに別の何かを当てること）がつねに有効である保証はありません。

「固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、」と上で述べましたが、「固定された「つながり」」が疑わしく思えてきました。

「「何か」に別の「何か」を当てること」の「何か」と別の「何か」がすでに比喩（置き換え）であるからです。

言葉ではないものに言葉を当てる（要するに置き換えであり、すり替えです）という言語活動そのものが「当てる」を基本にしている語り＝騙りだという意味です。

そうであれば、あてど（当て所・宛て所）もなく当てるを繰りかえすしかなさそうです。これが人にとっての自然であるにちがいありません。

要するに、人にとって「当たる」なんてないのです。「当たる」という言葉があり、それを人がつかっているのは自暴自棄になった人の腹いせにちがいありません。

冗談はさておき、「当たって砕けろ」、「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」です。人にはとらえられないものである「言葉ではないもの」を相手にしようというのですから、それしかありません。かりに「当たって砕けろ」はあったとしても、「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」はありえなくて「下手な鉄砲は数打っても当たらない」という意味です。

# 「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」

＊

当てる、当たる、決める、決まる、あらわす、あらわれる
つな、つなぐ、つなげる、つながり、きずな、気づく、築く
つなをつなぐ（つなげる）、つながりに気づく、絆を築く
（拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より）

**「当たった」と感じるときの高揚を求めつづける**

言葉ではないものに音を当てる。
言葉ではないものに文字を当てる。
言葉ではないものに表情や身振りを当てる。

以上が、言葉をつかういとなみの根っこだと思います。

＊

言葉に言葉を当てる。
言葉に言葉を重ねる。
言葉を言葉で置き換える。

音に文字を当てる。文字に音を当てる。
意味に文字を当てる。文字に意味を当てる。
イメージに文字を当てる。文字にイメージを当てる。

上の作業では、「何か」に「別の何か」を当てているわけですが、「何か」も「別の何か」も必ずしも明確ではない気がします。そもそも、「何か」も「別の何か」もが「何かに別の何かを当てた」ものだからでしょう。

たとえば、「「言葉ではないもの」に言葉を当てる」です。これが言葉だと私は思います。言葉とは、すでに「何か」に「別の何か」を当てた結果だという意味です。代用物とも言えます。代用物が実物をどれだけ忠実に反映しているかは不明なのです。（ところ

で、私は言葉を広く取っています。音声と文字だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情や身振りやしるし、場合によっては映像や音楽も言葉としてとらえることがあります。）

「言葉ではないもの」に言葉を当てるというのは、両者を当てる必然性がないために、きわめて不安定な基盤に立っていると言えます。言葉ではない猫という生きものに、日本語の「ねこ・猫」を当てる必然性はないと言えば分かりやすいかもしれません。もちろん、他の言語や方言でも同じです。

そんなわけで、言葉をつかうさいに、言葉ではないものに言葉を当てたり、ある言葉に別の言葉を当ててみてはいるものの、それが当たったかどうかは不明なのです。こうなると、当たったと感じたときが「当たった」だと言うべきでしょう。「当たる」は人にとって印象とか感想の世界だと言えます。

籤（くじ）や占いや予言・預言に似ています。当たるも八卦当たらぬも八卦。

「当たり」が出たときに、それが当たっているかどうかを知るためには、さらにまた籤を引くか占うしかないのです。当て処（あてど）がない。「当たった」と感じるときの高揚を求めてあてどなく続くのでしょう。

当たったときの高揚感を求めてなんてギャンブルに似ています。これも印象です。

**「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」**

かたがかたちをなすさまがあらわれる――。このフレーズに漢字を当ててみましょう。漢字をまじえて読んでみるとか、漢字による注釈をつけるとか、漢字をつかって意味を分けてみる（意味を限定してみる）とも言えます。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

上の漢字まじりの文字列を左から右に、そして右から左に読んでいくと、その展開にはっとします。わくわくするのです。「そうかそうか」、「なるほど、なるほど.....」と。

「言葉ではないもの」に、つまり「ひながな」（言葉ではないもののたとえとして考えてください）に漢字を当てることによって、音、文字、意味、イメージを当てている気分が味わえます。たとえて言うなら、そうした過程が「かた、かたち、形」になっていくのです。そのさまが上の漢字をまじえた文字列に「あらわれている」とか「起きている」ように見える気分を味わえるという意味です。一種のシミュレーションと考えてください。

【※言葉を得た人類が「言葉ではないもの」をとらえることは不可能だと私は考えています。生まれたとたんに言葉に囲まれた環境にいて言葉の習得を余儀なくされている個人としての人も「言葉ではないもの」をとらえることはできないでしょう。したがって、いまここで「言葉ではないもの」として「ひらがな」で表記した日本語を持ちだしているのは、苦しまぎれのたとえ（比喩）であり、たとえという名のすり替えによる騙り（嘘）でもあります。上の「一種のシミュレーション」というのも美辞麗句のたぐい、つまり与太話に他ならないことをご承知おき願います。】

「当てる」と同時に「ずれる」も起きています。何かに別の何かを当てているのですから、「ずれる」のは当然です。

和語の「かた」を漢字・漢語の「形」に当てる。「形」を和語の「なり」に当てる。「なり」を漢字・漢語の「形・態」に当てる。「形・態」をくっつけて、漢語の「形態」に当てる。「形態」を「なりをなす」と読む。「なす」に「成す」を当てて、「なりを成す」、さらには「形を成す」とずらす。それを「形成」と読む、ずらす、当てる。

＊

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

おそらく言葉ではなく、とりあえず「かた」という音と文字（ひらがな）にしたものが、「かたち」を「なす」さまが具体的な文字（漢字）として、そこにあらわれます。

かたがかたちをなすさまがあらわれる——。

わずかひらがなで十七文字ですが、漢字を当てたことによって、長く多く厚く重く深く感じられます。私の場合には、ずっと眺めていられるし、暗唱して寝入り際に呼びもどして味わうことができそうです。

（A）かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。
（B）かたがかたちをなすさまがあらわれる。

（B）を読むさいに（A）がいわば二重写しになるわけですが、説明（注釈）的な（A）ではないために、ひらがなだけの文字列が多層（多義）化して、詩のようにも、物語みたいにも、おまじないっぽくも感じられるのです。同時に、詩とか物語とかおまじないという安易な譬えは、この十七文字からなる文字列の具体性を失わせる気もします。一方に集中するともう一方が見えなくなるだまし絵に似ています。

**「何か」をある定型に当てる・収める**

十七文字で十七音からなる俳句を思いだしました。「何かに何かを当てる」を短い定型詩で考えてみます。

「言葉ではないものに言葉を当てる」と単純に考えましょう（これも上で述べたのと同じ与太話です）。

定型のある、ごく短い詩で何かを歌ったり詠んだりする場合には、その「言葉ではないもの」は必ずしも明確ではない気がしますが――それを明確にしたいからわざわざ言葉にするのでしょう――、とりあえず「何か」として話を進めます。

「何か」を写生するとか描写するという立場もあるでしょう。「何か」を「写す」というよりも「映す」、または「移す」という考えもありそうです。「何か」を「語る」のだという意見もあるでしょうね。

一センテンスや短い散文にするのではなく、あえて定型、つまり音数（文字数）や韻や季語・季題のような決まったテーマ、あるいは流派の決まりのようなもののある詩にするからには、そこには先行する作品が前提としてあります。これを忘れてはなりません。

たとえば、俳句は一句で完結もしていなければ、一句で成立もしていないのです。

＊

「何か」を短い定型に収める。「何か」を言葉に当てる。この場合の「何か」は言葉ではないものだと考えられます。

当てる、当てはめる、収める、入れる、容れる、型に入れる。

こうした作業においては、「何か」を当てるさなかに、試行錯誤があるにちがいありません。なかにはぱっと一瞬で作品ができる人もいるでしょうが、それは例外中の例外だという気がします。

ああでもないこうでもない、ああだこうだ。そのさいには、先行する他人の作品や自分の過去の作品もちらつくのではないでしょうか。型があるのですから当然です。

定型詩では、音数（文字数）、韻、決まりといった枠があるために、言葉が具体的な物として扱われる点がとても大切です。言葉を型にはめたり型に流し込む必要があります。この場合の言葉は抽象や観念ではなく物――目に見えるし聞こえるし数えられます――なのです。

「「何か」を定型に収める」や「「何か」を言葉に当てる」さいの「何か」は、「言葉ではないもの」ではなく言葉かもしれません。正確に言うと、「言葉ではないもの」と言葉の両方なのかもしれません。

この場合の言葉とは、先行する他人の作品や自分の過去の作品のことです。読まないと詠めないのです。

先行する作品を手本にして詠んだり歌ったり詩（うた）うのが、定型詩でしょう。さもなければ、定型を踏まえることになりません。

写生という意味での絵を描くときに、目の前の風景や物を見て描くだけでなく、これまで見てきた絵や自分の書いた絵を踏まえて描くことがありますが、その体験を思いうかべると分かりやすいかもしれません。

以下の文字列では、まさにそうしたことが起きているのではないか、あらわれているのではないか、と思います。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

形を成すというのは、その前提として形（かた・かたち）が想定されていなければならないという意味です。

「想定」ですから、頭の中に「ある」という点が大切です。それを具体的な形にしていくのが創作でしょう。形を成すのです。

＊

べつに定型詩ではなくても、一文であったり、短い散文であっても、それが言葉で唱えられたり書かれるかぎり、そこには前提としての形が想定されている気がします。たぶん、それが以下の文字列にある和語の「かた」であり「なり」です。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

なお、短い文に話を限っているのは、短いほうが体感しやすいからです。話は大きくなると抽象的でつかみどころのないものになりますので。長い文章については、短い文の積み重ねだと考えればいいかもしれませんね。

人にあらわれて、機械にあらわれないもの

＊

　べつに定型詩ではなくても、一文であったり、短い散文であっても、それが言葉で唱えられたり書かれるかぎり、そこには前提としての形が想定されている気がします。たぶん、それが以下の文字列にある和語の「かた」であり「なり」です。
　かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。
（拙文「「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」」より）

　ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前で呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかでがつながることがよくあります。
（.....）
　固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何かが「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。
（拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より）

目次

**形を「なす・為す」、形に「なる・成る」**
**生成**
**生成、生成り**
**形が「出る」、形が「あらわれる」**
**人にあらわれて、機械にはあらわれない**

**形を「なす・為す」、形に「なる・成る」**

　かた、形、なり、形・態、形態、なす、生す、成す、為す、形を成す、形成、なる、生る、成る、為る

＊

　為せば成る。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も。
為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

江戸時代の米沢藩主であった上杉鷹山の言葉らしいです。

「為す」と「成る」の使い分けに注目しないではいられません。

＊

「決める」は人為、「決まる」は人の領域ではない。
(.....)
人が「決める」。「決まる」は「起きる」とか「あらわれる」。そんな気がします。
(拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」」より)

決める、決まる。
当てる、当たる。
つなぐ・つなげる、つながる。
あらわす、あらわれる。
起こす、起きる。
かためる、かたまる。
なす、なる。

このところ、上のようなペアが気になります。他動詞と自動詞なのでしょうが、どんなペアでも気になるのではなく、上の場合が気にかかってなりません。

為す、成る。

「為す」は人為、「成る」は人の領域ではないと言いたくなります。

人為と言えば人造という言い方を連想します。人の領域ではない創造を人が為すという意味でしょう。人造も人為に他なりません。

創造、模倣。人造、天然。

＊

「かた」が、「形（かたち）を為す」とすれば、それは人が為している。「形（かたち）が成る」とすれば、人の領域ではないところで、そう成っている。形を為す、形が成る。

そんな気がします。

こうなると、「生す、生る」が気になります。

形を生す、形が生る。

「生成」という漢語を連想しないではいられません。このところ、さかんに見聞きする言葉です。

**生成**

「生成」を愛用の広辞苑で調べてみると、以下のようにまとめられそうです。

生成：せいせい、生成、生じて形を成すこと、（哲）Werden（ドイツ語）、物の発生、変化、転化。

ドイツ哲学の用語のようですが知りません。

現在、さかんに見聞きするのは「生成 AI」です。よく知らない言葉です。この文字列を初めて目にしたときには、「きなり AI」と読んでいましたが、やがてそうではなさそうだと気づきました。

「せいせい AI」ですね。わくわくしないので調べたことはないのですが、文脈から何となくイメージをつかんでいます。

あと、「生成・せいせい」で思いだすのは、「生成文法」です。英語の generative grammar の訳語だということは知っていますが、これもよく知りません。あえて調べようという気持や予定もありません。昔勉強した覚えがありますが、記憶がないのです。

よく知らないことについては記事では触れないほうがよさそうです。

**生成、生成り**

生成：せいせい、生成、生じて形を成すこと、（哲）Werden（ドイツ語）、物の発生、変化、転化。（広辞苑を参照）

自分にとって大切そうなところだけを抜きだしてみます。

生成、生じて形を成す、発生、変化、転化。

わくわくしてきました。おもしろそうです。

＊

生成り・きなり、手を加えてないこと。（広辞苑）
生成り・きなり、生地のままで、飾り気のないこと。（デジタル大辞泉）
生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟（または熟成）していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。（デジタル大辞泉）。

なるほど。言えています。逆に言うと、まだまだ生るし成るということですね。伸びしろは無限ということでしょうか。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

**形が「出る」、形が「あらわれる」**

何かに何かを当てる。何かに何かを当てることで、何かが形を成す、または何かが形に成る。

声としての言葉をもちいて、話をしたり、会話をしたりする。物語や詩歌をつくったり、物語や詩歌を繰りかえして口にしたりする。

文字をもちいて、メモ程度の文を書いたり、手紙を書いたりする。あるいは、物語や詩や散文を書いたりする。

現在であれば、電話やメールやツイートやチャットも話し言葉や書き言葉をもちいた「何かに何かを当てる」行為だと言えます。

たぶん、音楽や映像も「何かに何かを当てる」だという気がしますが、どうなのでしょう。

＊

「何か」に言葉——声と文字に限定して、表情や身振りやしるしや映像や音楽は除きます——を当てることで、言葉という形での「何か」が「出る」のですが、形があるとは言うのものの、これだけ誤解や不通や行き違いが生じるのですから、「出た」言葉は発した本人をふくめて各人にとって異なって「あらわれている」としか考えられません。

形は「出る」けれど、各人にとっては異なって「あらわれる」。そんなふうに言えそうです。

この場合の「形」は、声と文字だけでなく、表情や身振りやしるしや映像や音楽においての「形」ととらえてもいいのではないでしょうか。そんな気がしてきました。

形が出る、形になる、形をなす、形があらわれる。

「形になる」と「形をなす」の「形」は、たとえ、なったり、なしたとしても、それが人に「あらわれる」時点で、その人において「変わる」し「転じる」と言えそうです。

人は機械ではないからそうなのでしょう。

変形、生成、変形生成、生成変形。
transformational generative。

**人にあらわれて、機械にはあらわれない**

逆に言うと、機械は「形になる」と「形をなす」を文字どおりにとらえるのかもしれ

ません。形は機械に対して「あらわれる」なんてことはないという意味です。

　まして、「なる」と「なす」とは相性が悪く、「あらわれる」と相性のいい「すがた・姿」は、機械には「あらわれる」ことは断じてないと思います。

　生成――。この言葉はいかにも機械にふさわしい気がします。よく知らないのですけど。

　ちゃんと動いているのか、ある程度動いているのか知りませんが、現に機械が動いているのですから、そうにちがいありません。

＊

　形になる、形をなす。
　形があらわれる。

　どうやら、人にあらわれて、機械にあらわれないものがありそうです。

　ところで、猫はどうなのでしょう。猫を観察していると、猫にあらわれて、人にはあらわれないものがありそうです。というか、人のギャグは猫に通じないのですが、猫のギャグも人に通じていない気がします。

　猫は猫の夢を見るのでしょうか。機械は機械の夢を見るのでしょうか。こんなたわごと（ギャグ）は猫にも機械も通じそうもありません。人にあらわれているだけでしょう。

　そう考えると、「あらわれる」は他者（他人や他の生きものや他の生きていないものを含みます）とは共有できないものかもしれませんね。もちろん、人から見ての他者の話です。

　いずれにせよ、「あらわれる」は不気味です。なんて不気味がるのは人だけという落ちに落ち着くようです。

# 言葉ではないものをさぐる

言葉ではなく、ものをさす

＊

　ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前で呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかでがつながることがよくあります。
（.....）
　固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何かが「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。
（拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より）

　たとえば、「形・姿・型・語る・固い・固まる」の「かた」も、「片言・片向く・傾く・片寄る・偏る・片方・夕方」の「かた」も、言葉ではないものとか、言葉にする前のものとか、言葉が消えかけたものと言ったほうがよさそうです。断片的で取り留めも取っ掛かりもないからです。

　形が無い、形に成らない、形が欠けている。
　かたはし・片端、かけら・欠片、あとかた、後方・跡形。

　それでいて、「かた」という二音と二文字に、なにか目や芽のようなものを感じるのは、それが言葉の欠片（かけら）であり、言葉の跡形（あとかた）だからでしょう。半端な形で言葉をひきずっているのです。気配をイメージすると分かりやすいかもしれません。言葉の気配という感じです。

　「かた・形」と「かた・方」がそれぞれ、「言葉ではないもの」の気配を漂わせたり、「言葉にする前のもの」を引きずっていたり、「言葉が消えかけたもの」の跡を留めているとするなら、両方の要素や属性を備えているとか、どちらでもない要素や属性を帯びているとか、見方しだいで何にでも見えることがあっても、不思議ではない気がします。

　当り前のことを言っていますが、今回はそんな話をします。

目次

**言葉ではないもの、言葉にする前のもの**
**二つの「かた」のあいだでまよう、さまよう**
**無文字**
**形であり、同時に方でもある**

## 言葉ではないもの、言葉にする前のもの

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

和語の「かた」を漢字・漢語の「形」に当てる。「形」を和語の「なり」に当てる。「なり」を漢字・漢語の「形・態」に当てる。「形・態」をくっつけて、漢語の「形態」に当てる。「形態」を「なりをなす」と読む。「なす」に「成す」を当てて、「なりを成す」、さらには「形を成す」とずらす。それを「形成」と読む、ずらす、当てる。

かた、片、片向く、傾く、へん、片、片寄る、偏る、偏向、方向、ほう、方角、方、片、かた。

和語の「かた」を漢字・漢語の「片」に当てる。「片」を「片寄る・偏る」とずらす。「偏る」から「偏向・へんこう」へとうつる。「向」に促されて「方向・ほうこう」があらわれる。「ほうこう」から「ほうがく・方角」へ。方も片も「かた」だと気づく。

＊

上で並べた、二つの「かた」から続く文字列を見くらべているとわくわくします。上と下は、つながるようでつながらない。上を下に、下を上に、当てることはできるものの、当たった感じがするものもあればしないものもある。

「あらわれる」も「つながる」も「当たる」も、個人的な印象だとつくづく感じます。ギャグや駄洒落と同じで、受ける受けないはその時と場合と顔ぶれしだい。比喩や掛け詞と同じで、決まるか決まらないかは受け手しだい。そもそも本人にも分からない気がします。

＊

二つの列の左端にある「かた」と「かた」ですが、たぶん和語なのでしょう。語と言ったものの、それだけではあまりにもとりとめがない。こんなとりとめのないものを言葉と呼んでいいのでしょうか。

「かた」も「かた」も、言葉ではないものとか、言葉にする前のものと言ったほうがよさそうです。断片的で取っ掛かりがないからです。

それでいて、「かた」という二音（二文字）に、なにか目や芽のようなものを感じるのは、それが言葉の欠片（かけら）だからでしょう。

上で書いた文にある「断片的」と「欠片」に「片」が見えます。かけらであり、きれはしなのですが、そこには何かの兆しが感じられます。ピアノのキーを叩いて出た最初の音みたいな感じだと言えば分かりやすいかもしれません。

この先に何かが来る、何かが起る、何かの流れの一部だ。そう考えると、「片」がある「方向」であり、同時に「形をなす」ものに思えてきます。

「かた・片」と「かた・形」はけっして矛盾するもの同士でも、異なるもの同士でもないようです。そうであるとすれば、それは「言葉ではないもの」や「言葉にする前のもの」を引きずっているとか、「消えかけた言葉」が跡を留めているとも言えるでしょう。とりとめがないという意味です。

「言葉ではないものをさぐる」がこの記事のタイトルですが、言葉ではないものに「とっかかり」と「とりとめ」がないかぎり、言葉を取っ掛かりと取り留めにして手探りをするしかないのです。

＊

ややこしい話になってきたので、文字列を短くして、ここまでを整理してみましょう。

かた・形・型
かた・片・方

どちらも「かた」と読めますが、違った方を向いている気がします。「かた・形・型」はまとまりを目指し、「かた・片・方」は散らばっていく感じがします。

話を広げて、詳しく見ていきましょう。

**二つの「かた」のあいだでまよう、さまよう**

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成

「方」向を変えてみます。

かた、形、型、かたる、語る、騙る

「かたる」はある方向にむかって流れる筋です。良い悪いに関係なく流れます。

かた、形、型、かたる、語る、騙る、カタル、カタルシス、あたる、当たる、中る

音だけのつながりでは、思いがけないものも出てきます。言葉であれば、そうした展開もあるでしょう。そうでなければ言葉ではない気がします。ま、程度問題ですけど.....。

かた、形、姿、すがた、容、器、体、態、様、景、かげ、象、像、影、潟、方、放

気になる文字というものがあります。形にも音にもとらわれずイメージだけで並べるのも楽しいです。

語る、放す、放つ、話す、離す、発する
放出、発射、発散、放送、放言、離散

「はなす・はなつ・はっする」は、「語る」より「形・型・固」がなくて、言い放し的な感じがします。「片・方」寄り。はなったものとのあいだに「隔たり」があるのです。散らばるとかばらばら感があります。

＊

かた、片、片向く、傾く、片端、へん、片、片寄る、偏る、偏向、方向、ほう、方角、方、片、かた

語って形をなす方向に流してみましょう。

かた、肩を寄せる、肩に手を掛ける、寄り掛かる、片向く、傾く、かたぶく、かぶく、歌舞伎、型、方、形、女形

ある方向に流れていきながら、形がかたまるよりも、方から方へと散っていく感じもします。まだらでまばら。ばらばら指向なのです。辺、偏、変という、つながりも感じます。

エクセントリック（excentric）なのです。偏心、つまり心（中心）からはずれているし、ずれているイメージ。ex-です。外へと拡散していく、散っていく。反とも、重なりそう。

片、片端、はしっこ、葉、はっぱ、はし、端、箸、橋

辺境のイメージです。「ふち・縁・ふちっこ」とも重なります。「きわ・際・さかい・境」でもあるので、外部やよそ者や他者との出会いもありそう。

傍ら・かたわら、半端、偏と旁、片割れ、破片、欠片・かけら、一方、片方、かたはし・片端

何かが欠けている、二つでひとつ、。ペアのうちの一方。半分。場合によっては差別の対象になりそう。

かたの、片野、交野

地名ですけど、辺や縁や境と重なります。そとやよそと交わる場のようです。ノマド的で固まらないし、堅くも硬くもない雰囲気を感じます。形式にこだわらない放埒さがあります。マルクスのいった「交通」とも通じそうな気配。

さまよってきました。さまよう、さ迷う、彷徨う、「方・片」だから当然ですね。

＊

「かた・形」と「かた・方」がそれぞれ、「言葉ではないもの」の気配を漂わせたり、「言葉にする前のもの」を引きずっていたり、「言葉が消えかけたもの」の跡を留めているとするなら、両方の要素や属性を備えているとか、どちらでもない要素や属性を帯びているとか、見方しだいで何にでも見えることがあっても、不思議ではない気がします。

ふたつの「かた」のあいだでまよい、さまよう。そこで、まよっているつもりが、どうやらそうでもないところで、さまよっている。まかすしかない。ゆだねているだけでいい。

**無文字**

かた、かたまる、固まる、かたい、固い、硬い、堅い、難い、堅苦しい

かた、片、片言・かたこと、片仮名、片隅、片苦し、片身、肩身、形見、破片、半片、片言・へんげん

同じ「かた」という文字列から出発しても、イメージが異なります。似ていると感じる場合もあります。無理にまとめる必要はないと思いながらも、ついある筋書きやかたちに導かれ運ばれていきそうになります。

「かたまる」を主旋律にして流していく。「かたこと」で放っていく。かたまる方向へ、かたことで形づくっていく。

＊

現在はありとあらゆるものが文字にされています。公式な記録は文字であり、音声や映像ではないようですが、文字は手書きから印刷されたものに移り、いまではデジタル化されたデータとしてインターネット上で飛びかっています。

もっとも、「飛びかっている」というのは比喩であり、誰も観た人はいそうもありませ

ん。それにしても、ネット上で、文書の投稿、配信、複製、拡散、保存がほぼ同時に起きているのは、私にとって驚異であり脅威でありつづけています。

私はよく無文字の世界を夢想します。文字のない世界ではどんなふうに人がいるのだろうと、なんの根拠も裏づけもなく空想するわけです。

発した瞬間に片っ端から消えていく音声や表情や身振りと異なり、文字は消さないかぎり残ります。それが文字の最大の特性であり、人がこれだけ文字を厚遇し礼遇するのは残るし複製しやすいからだと思います。

もし無文字の世界であれば、どんなふうになっているのでしょう。そこでは「かた・形」と「かた・片」はどんな形で、そしてどんな片で「ある」のでしょう。

表情と身振りで、「かた・形」と「かた・方」をあれこれイメージしてみるですが、そこで浮かぶのは、歌であり、旋律であり、踊りであり、スポーツなのです。

そこには、言葉ではない、言葉にする前の「かた・形」と「かた・片」が生き生きと「ある」ような気がします。生き生きとした「ある」とは、たぶん「なる」です。

**形であり、同時に方でもある**

夕方、朝方、明け方

ある方向に向かっているけど、その前後のどちらでもない、同時にどちらでもある。

たそがれ、誰そ彼、薄暗い夕方に「だれだ、あれは」。かわたれ、彼は誰、薄暗い明け方（または夕方）に「あれは、だれだ」。

西の方、東の方

ある方向に向いているけど、こちらでもそちらでもない。こちらにいながら心はあち

らに移りつつある。

片、方、偏、辺
放、端、葉
肩、扁
形

形、型、容、潟、象
固、堅、硬、難
成、為、生
語、騙
片

上の漢字を見ているさいに、「かた」の形と姿にこだわるときと、「かた」の「kata」という「音」にこだわるときでは、違った並び方になるし、浮かんでくる漢字も異なります。

あれこれと分けることに、ある種のあきらめを覚えるようになります。それでいて、ばらばらにしておくのが嫌なのです。そのうち眠くなります。

＊

形であり、同時に片でもある。どちらでもない――。

文字と形にこだわるとそうなります。

かたであり、かたでもある――。

音にまかせるとそうなります。

目をつむり、寝入り際の心境で、浮かんでくるものにまかせてみます。

＊

人類は言葉を得てしまった。
個人としての人は生まれたとたんに、言葉を習得する環境に投げこまれる。

言葉ではないものは人にはとらえられない。
言葉ではないものは言葉でしか語れない。

言葉ではないもの、それは言葉であり言葉の綾。
言葉ではないもの、それは夢。

言葉の夢　夢の言葉。
夢の言葉　言葉の夢。

言葉が夢を見る。
夢が言葉を話す。

人はその夢と言葉を見ているだけ、聞いているだけ。
人にその言葉と夢の主導権はない。

言葉は人に宿る。
人が言葉に宿る。

夢の言葉　言葉の夢

著　　星野廉

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社